

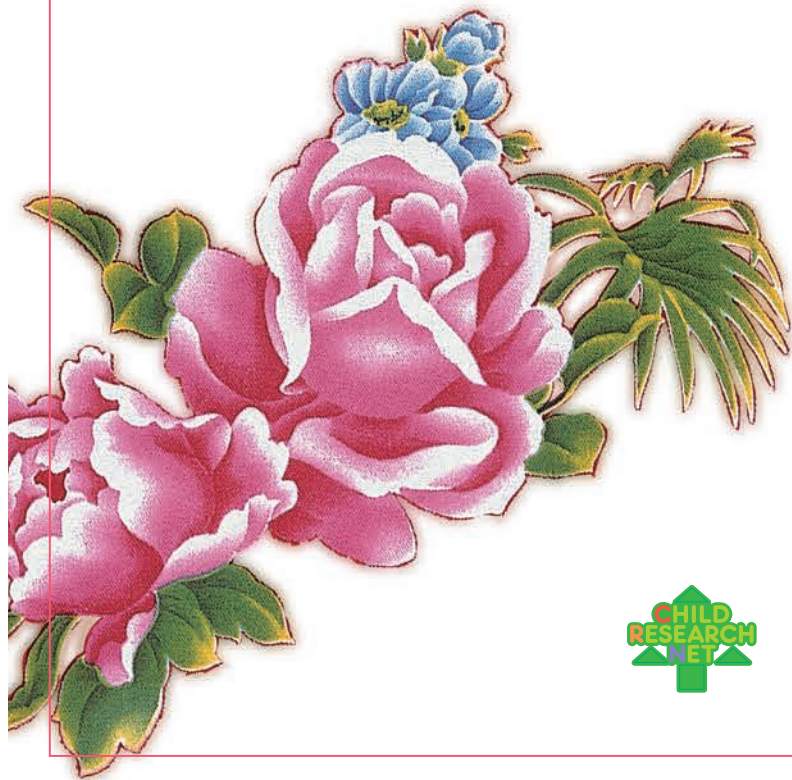


CRN活動レポート 2013

～ECEC研究と東アジア子ども学交流プログラム報告書～

CRN Activity Report 2013

~Research on ECEC and the Child Science Exchange Program in East Asia~



ECEC

巻頭言

子ども時代の成育環境が、後の子どもの発達に影響を与えることは周知の事実です。OECDやユニセフなどの国際機関も、子どもの成育環境の改善に向けた資源の適切な配分が、現在の子どもが主人公である未来の世界をよりよいものとするために最も効率の良い方法であることを認め、世界中で幼児教育（ECEC：Early Childhood Education and Care）の改善に向けた取り組みが始まっています。

チャイルド・リサーチ・ネット（CRN）は、こうした世界の趨勢の中で、日本の幼児教育の課題は、子どもをめぐる諸課題の中で最も重要なものであると捉え、ECEC研究会を立ち上げ、これまでに3回開催してきました。

第1回ECEC研究会では、日本の保育幼児教育の現状の分析と課題を主題にとりあげました。日本全体の保育幼児教育の実態のマッピングが十分にできていないこと、保育の質の評価とその向上のための方法に課題があることが明らかになりました。

第2回ECEC研究会では、日本の保育の原点である遊びの意味について、世界的な研究が始まっており、そこで提唱されているPlayful Pedagogyについて、理解を深めることができました。また、海外からの研究者も招き、海外と比較することで、日本の課題がより明確になりました。

そして、第3回ECEC研究会では、遊びの質について、研究者だけでなく保育の第一線で活躍している保育士や幼稚園教諭を交え、講演とワークショップを組み合わせ、新たな知見を創成する試みを行いました。

本報告書には、3回のECEC研究会の濃縮された議論と新しい考え方が詰まっています。本書を通じて、保育幼児教育だけでなく、現在の子どもの育ちに関心のある多くの方々と、ECEC研究会の成果を共有することができれば幸いです。

Sakakihara Yoichi

榊原洋一

CRN 所長・お茶の水女子大学大学院教授



ECEC研究活動 への期待

一見真理子

Ichimi Mariko

…………… 国立教育政策研究所国際研究・協力部
総括研究官



大学・大学院では、中国語・比較教育学・教育史を専攻。中国における子ども観、幼児教育・児童研究に関心を持ち1年半の北京留学。帰国後、国立教育研究所（現国立教育政策研究所）を拠点として日中教育関係史、アジア地域の教育政策と教育改革、学校と地域社会との連携、東アジアにおける子育て支援と早期教育、学校にもとめられる生涯にわたる資質能力形成等をテーマとする調査研究に参加。そのかわり、職務としてユネスコアジア・太平洋地域教育協力事業、ボランティアとして日中教育研究交流会議等の運営や日中戦争の被害にあった山間僻地への教育支援活動などにも従事。いずれにしても、教育をとおしての持続可能な社会の実現やホリスティックなアプローチに関心がある。

主要業績：『親の学校参加に関する国際比較研究・報告書』（編著）、『近代日本のアジア教育認識（資料篇・中国の部）全22巻』（共編）、『東アジアにおける早期教育の現状と課題・報告書』（編著）、『幼児の生活アンケート報告書：東アジア5都市調査』（共著）、『世界の幼児教育・保育改革と学力』（共編著）、『OECD保育白書』（共編訳）など。

チャイルド・リサーチ・ネットでは「ECEC研究活動」を2013年6月からスタートしており、すでに3回の研究会を開催しています。ECEC*ということばがいよいよ日本でも市民権を獲得するのかと、感慨を深くしております。

ECEC（Early Childhood Education and Care）を「Starting Strong」（人生の始まりこそ力強く！）という標語とともに広め始めたのは、OECD（経済協力開発機構）です。ECECを強化しよう、もっと財政的にサポートしよう、という動きは、OECDが21世紀の幕開けに先立ち、グローバル社会での経済活動（生きて行くための営み）のあり方を、根源からとらえなおす中で生まれました。

ご存じのように、これからの世代は、科学技術の輝かしい成果を享受しながらも、戦争や紛争、経済格差によってもたらされる人口移動、異常気象や自然災害、環境破壊といった問題状況にも勇気をもって取組み、全てと調和的に生きていくことが求められています（日本における2011年の大震災後の試練も、まさにそのことをひしひしと感じさせてくれました）。こうした状況を予見してOECDでも今後の人材育成の焦点をさぐり、獲得すべき知恵や技能の内容を検討したのです。OECDは、生涯学習の必要性を説くUNESCO（国連教育科学文化機関）とともに20世紀末から議論を重ねた結果、キー・コンピテンシー（鍵となる能力）の概念を打ち出しています（2001）。

キー・コンピテンシーとは、人が他者とともに知識技能を相互作用的に活用し、自律的かつ幸福に生きるための能力であり、時代が要請する広義の学力の基礎となるものです。ちなみに国際学力調査としてすっかり定着したOECD・PISAが測定を試みているのも義務教育終了段階における生徒のキー・コンピテンシーの獲得状況です。

OECDは、元来、経済活動の開発を主たる任務とする国際機関ですから、乳幼児期に関しては積極的な政策提言をしておらず、福祉と教育の側面から、UNICEF（国連児童基金）やUNESCOがそのことを主に担ってきました（例えば、国連子どもの権利条約の起草・締結など）。では、この世紀の転換期におけるOECDの乳幼児期重視政策は何に由来していたのでしょうか？ それは、「人生の初期の質の高い教育とケア（ECEC）」の実現こそが、迂遠なようでいて、市民のコンピテンシー獲得ならびに社会の持続的発展にとって効果ある公共財政投資であることが、立証されたからでした**。

この機をつかまえ、乳幼児期にかかわる各国の専門家は、OECDの枠組みを通して国際ネットワークを広げ、調査活動とモニタリングを行い、ECECの充実の必要性を各国政府に訴えかけました***。こうした努力を通じて、政府指導者がECECの重要性を認知したときに、制度も政策も大きく変化しはじめたのです。具体的にいうと、幼保の一元化ないしは一体化（管轄、法制、カリキュラム、職員の養成と資格制度などの諸側面での）、ECECの無償化、0～3歳児のECECサービスの充実整備、乳幼児期と学童期の教育とケアの連携の強化、ECECスタッフの資格・待遇の改善などに関する財政的裏付けのある政策です。

ECECとは、誕生以前から就学前および学童前期までの教育とケアを含みます。その際に大切な点は、できるだけ、「教育とケアを一体的に」、エデュケアとしてとらえようとするところにあります。親の経済的状況にかかわらず、子どもたちが質の高いECECを保障されること、このことは格差社会においてはとりわけ重要です。

ということで、日本で現在進められている子ども・子育てをめぐる制度改革も、世

界的潮流と大きく連動していることがわかります。また世界標準からみてまだまだ欠けている部分も明らかとなってきました。これについては第1回研究会の基調報告（秋田喜代美先生）をぜひご覧ください。

さて、CRNのECEC研究活動では、世界の動きをつかみながら、足元の日々の実践の質や問題点を相互に検討・検証する場が形成されるのだと理解しております。また幼稚園と保育所、この2つの業界の実践家・専門家が、ひとつのテーブルに着き、現場感覚を大切に、ECECの質保証に必要と思われるどんな問題でも自由に協議・検討することも計画されていることを喜びたいと思います。各ECEC現場から、もち寄られるデータや関係者の声や姿から、貴重なエビデンスを構築することも可能でしょう。そして世界的にもユニークな（ある意味ガラパゴス的な？）日本のECECの特質や潜在力を少しでも見える形にして、諸外国の実践家・専門家に発信することもぜひ進めていただきたい活動です。

以上に、大きな期待を寄せたいと思います。

* 国際的には、ECECのほかにUNESCOとその傘下のOMEP（世界幼児教育機構）が使用してきたECCE（Early Childhood Care and Education）や、開発途上国でより多く使われるECD（Early Childhood Development）ということばもあり、いささか悩ましいところですが、「どの用語であれ、子どもたちのウェル・ビーイングと長い目でみた発達を大切にする点では一致している。どれでも差支えない」とイングリッド・ブラムリン世界OMEP総裁（当時）が、2013年7月のOMEP大会で強調しておられたのが印象的でした。

** その最たるものが、ノーベル経済学賞受賞者のヘックマン博士による学説です。

*** その政策提言とモニタリング報告は、Starting Strong：Early Childhood Education and Care（2001）、Starting Strong II：Early Childhood Education and Care II（2006）（邦訳版は星三和子・首藤美香子ほか訳『OECD保育白書』（2011、明石書店））、Starting Strong III：Early Childhood Education and Care（2012）（邦訳版は、同上より近刊予定）にまとめられています。

Contents 目次

	page
はじめに 巻頭言	1
ECEC研究活動への期待	2
第一章 日本における保育の課題と展望	
第1節 日本における保育の課題と展望	6
第2節 パネルディスカッション	
問題提起～日本におけるECECの課題～	11
調査データから見る日本の保育	12
総合討論	15
第二章 遊びと学びの子ども学～ Playful Pedagogy ～	
第1節 Playful Pedagogyとは	
Playful Pedagogy の目指すものは？	22
喜びいっぱい生命感動学	26
子どもの「遊び」をはぐくむ保育者：育ちを見通した「学び」の多様性	30
「遊び」と「教育」の板挟み～幼児の Guided play（誘導的遊び）への理解～	34
第2節 シンポジウム：東アジアの現場	
国定基準からみた台湾の幼稚園における「遊び」の位置づけ	38
「遊び」を通して「学ぶ」～教育神経科学の視点から～	42
「あー、楽しかった！ 明日もまた遊びたい！」という保育を目指して	45
パネルディスカッション 東アジアの現場から	50
第3節 遊びの中に学びがある	
学習の場としての遊び学習：子どもの楽育教具と空間デザイン	53
Playful Learning の情景 All you need is... Love, Passion and Playful Learning	57
第三章 遊びの質を高める保育のあり方（現場の声を聞きながら）	
第1節 遊びの質を高める保育のあり方	62
パネルディスカッション	67
第2節 園種別ワークショップ：「遊びが学びの保育」の実現を阻むもの	73
第3節 現場と専門家の議論：「遊びが学びの保育」の実現に向けて	78
English	
1. The Challenges and Prospects of ECEC in Japan	84
2. Child Science of Play and Learning: Playful Pedagogy	88
3. Child Care that Improves the Quality of Play	92
4. Presenter Profiles	96

Chapter



第一章

日本における保育の課題と展望

- 1-1 日本における保育の課題と展望
- 1-2 問題提起～日本におけるECECの課題～
調査データから見る日本の保育
総合討論

日本における保育の課題と展望

秋田喜代美

Akita Kiyomi …………… 東京大学大学院教授



東京大学大学院教育学研究科教授。東京大学大学院教育学研究科博士課程修了。博士（教育学）。専門は保育学、教育心理学、授業研究。現在、日本保育学会会長、日本読書学会会長、World Association of Lesson Studies, Vice President、日本発達心理学会理事等を務める。日本教育心理学会城戸研究奨励賞、日本読書学会読書科学研究奨励賞、(財)発達科学研究奨励賞等を受賞。著作に、『保育のおもむき』（ひかりのくに）、『学びの心理学』（左右社）、『保育の心理学』（全国社会福祉協議会）など多数。

● 今、日本の幼児教育には何が求められているか

今、日本の幼児教育に必要なだと私が考えていることは、大きく3点ある。1つ目は、「21世紀の社会のあり方を見据えながら、すべての子どもたちが乳幼児期、子ども時代、そしてその後の人生において、幸せな生活が送れるように育てていく」ということ。21世紀は「知識基盤社会」といわれており、この点が鍵になるのではないかと考えている。

2つ目は、「格差なく、落差なく、段差なく」ということ。「格差」とは、家庭経済格差、地域格差、園間格差のことである。「落差なく」とは、特別な支援の必要な子どもをはじめ、多様なニーズをもつ子どもに対応する必要があるということである。加えて、体力低下や直接体験の減少が指摘さ

れる中、子どもの育ちに必要ないずれの領域も落とすことなく、バランス良く、すべての子どものニーズに応じた経験を保証することが大切である。また「段差なく」とは、子どもの成長とともに、家庭から園へ、園から学校へ、そして地域へと円滑に移行できるようにということである。

3つ目は、「幼児教育の質向上サイクルの過程を保証する」こと。幼児教育の質の確保については行政でも議論されているが、各園が質の向上サイクルの過程を保証して、より良く変わっていく仕組みをつくるのが大切だと、私は考えている。

● 日本の幼児教育の課題は質保証のエビデンスと財源

日本の幼児教育は質が高い半面、課題もあると、私は考えている。

例えば、幼児教育の質が本当に子どもの幸せな人生を保証するかということについて、東アジアやアメリカ、ヨーロッパの国々がエビデンスを既に出しているのに対して、日本はエビデンスが出せていないという課題がある。幼稚園では自己評価が義務づけられ、保育所でも第三者評価がなされているが、それが質を向上させるサイクルに貢献し、質を保証しているかどうかという点に関しての事実やエビデンスがないのである。

格差は増大しているのに、財源が不足しているという課題もある。多様なニーズに応じた保育もまだ十分だとは言えないだろう。さらに、段差解消に向けて保幼小連携の取り組みは始まっているものの、人口規模の小さい自治体ほど予算が不十分で、地域格差も生まれている。

今回は、財源と質保証のエビデンスという2つの点に関して、海外の現状を紹介しながら、我々がこれから課題解決に向けて取り組むべきことを考えていきたい。

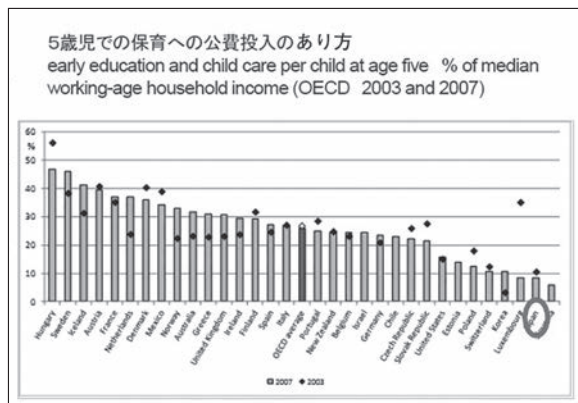
● 乳幼児教育への公的投資が少ない

OECD（経済協力開発機構）は、教育のイノベーション分野として、幼児教育と高等教育を挙げている。図①は、OECDによる「5歳児での保育への公費投入のあり方」についての国際比較のグラフだが、日本は下から2番目と、非常に公費が少ないことがわかる。また、日本の相対的貧困率は、働く一人親世帯で60%程度と、OECDの中で最も高く、子どもの貧困の発生や、貧困が世代を超えて受け継がれるリスクが指摘されている。

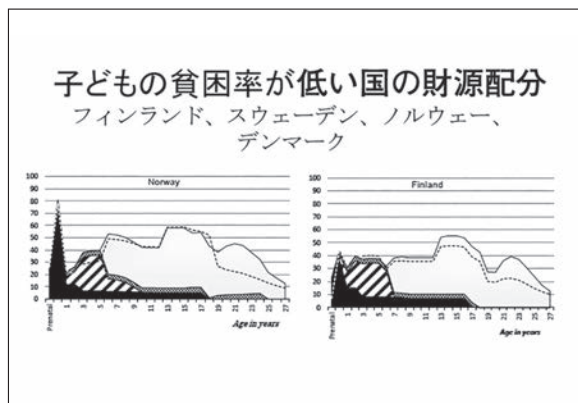
図②は、子どもの貧困率が低い国の財源配分を示したもので、乳幼児に対する財源が手厚いことがわかる。日本は、義務教育段階の国庫負担は高いのに対し、乳幼児の部分が非常に低い（図③参照）。今後、少子高齢化社会が進む中で、予算がさらに削減される危険性もある。

このような状況の中で重要なのは、幼児教育の重要性を、関係者のみではなく、広く社会一般に理解してもらうように働きかけることだ。そのためには、まず、幼児教育の質を上げたり、十分な予算を配分したりすることが必要である。そして、子どものその後の成長にかかわるというエビデンスを収集しなければならないだろう。

また、財源が少ないのであれば、効率的に幼児期の教育を行えるような制度体制に



図① 5歳児での保育への公費投入のあり方



図② 子どもの貧困率が低い国の財源配分

転換していくことも重要となる。その効率的制度運営として考えられるのが、幼保一体化だ。

海外では幼保一体化が進んでいる。東アジアでは、例えば台湾は、カリキュラム、資格、所管行政が一元化され、シンガポールでもカリキュラム、制度、所管行政の一元化が実現した。韓国では、所管行政は一元化されていないが、満5歳の子どもに対する共通カリキュラムを導入し、3～4歳児についても同様の共通カリキュラムが導入され、所得制限はあるが、無償化も実現している。欧州では二元化が残っている国もあるが、その場合は基本的に、乳児と幼児で二元化されているのが特徴である。

日本では、幼保連携型の認定こども園保育要領（仮称）策定に関する議論が先日始ま

り、厚生労働省と文部科学省が一緒にカリキュラムを作成するという試みが動き始めた。資格に関しては、幼保連携型認定こども園では、「保育教諭」という新しい職名が誕生してはいる。だが、今のところは保育士と幼稚園教諭の両方の資格が必要になるという課題が残っている。財源、施設、行政制度などの点でもまだまだ課題はあり、給付や課程は一体になっても乳幼児をめぐる施設制度の一元化実現への道のりははるかに遠いという印象を私は抱いている。

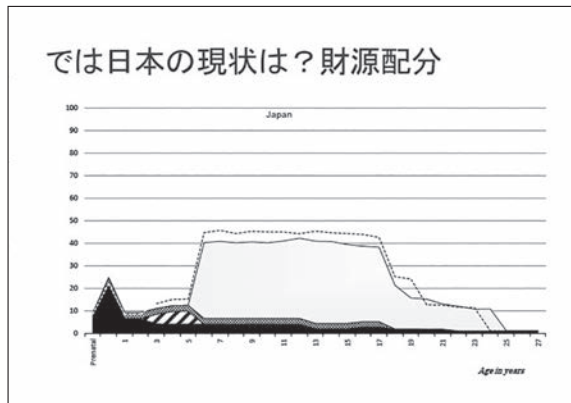
● 幼児教育の質を評価するための指標をつくることが重要

幼児教育の質の保証について、国家レベルとして何をすべきかを、グローバルな動きを見ながら考えてみよう。

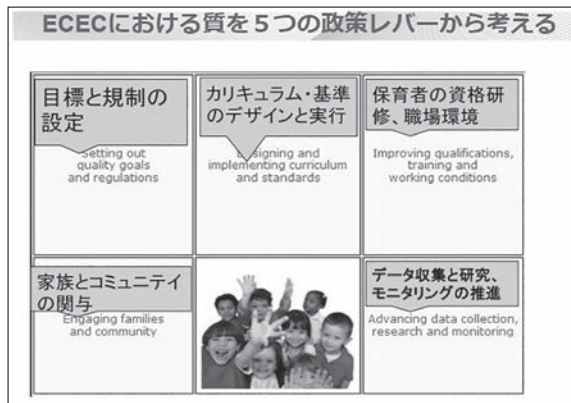
OECDは2012年に出した報告書「Starting StrongⅢ：幼児教育・保育のための質の高い方策」で、早期に力強い一歩を踏み出すことが重要だと述べており、子どもの学習と発達の向上には品質基準が不可欠だと指摘している。

そこでは、「1：目標と規制の設定」「2：カリキュラム・基準のデザインと実行」「3：保育者の資格研修、職場環境」「4：家族とコミュニティの関与」「5：データ収集と研究、モニタリングの推進」の5つの政策手段が紹介されている。—— 図④参照

中でも、「5：データ収集と研究、モニタリングの推進」に関しては、各国ともはまだ「弱い」という認識が強く、OECDの「ECEC（Early Childhood Education and Care）ネットワーク」と呼ばれる先進諸国のネットワークでは、今後この点を強化し、国際的に幼



図③ では日本の現状は？ 財源配分



図④ ECECにおける質を5つの政策レバーから考える

児教育の質を評価できるような指標をつくらうとする動きが始まっている。

— 図⑥参照

指標には、「どのような保育政策を実施するか」「何人の保育グループなのか」「学級定数はいくつなのか」といったインプット指標と、こうしたインプット指標によって、子どもの育ちや保護者の満足度はどう変化したのかということ測る「アウトプット指標」があり、この2つの指標の関連を分析し、活用していくことが幼児教育の質を上げることにつながるとしている。

このような質を保証するための指標については、EUやIEA（国際教育到達度評価学会）、ユネスコなどで試作されているほか、イギリスのネットワークでは欧州各国を横断した研究、カナダやオランダ、ノルウェー、デンマークなどでは国家規模での研究が行われている。

● 各国の評価指標について 具体例を紹介

具体的にどのような指標づくりが行われているのかを見ていきたい。

■ Eurydice Network (EU)

欧州36か国が加盟し、ヨーロッパの教育政策やシステムなどについて情報提供や議論を行うための組織、Eurydice Networkでは、幼児教育の分野において、産休や育休の長さ、財政支援、就園率、クラスのサイズ、保育者に対する子どもの比率、カリキュラムなどのデータベースを作成している。各国が教育政策を改定したり、教育改革をしたりする時に役立てるために、2014年に比較データが出せるように進められている。

データに基づく質モニタリング

■ これからの2年間 OECD ECECネットワークの仕事
2013-14、2015-16

国際的に保育の質の評価ができる指標や検討
インプット指標 と アウトカム指標

■ この背景にはグローバル化の中での動きがある
欧州連合、IEA、ユネスコ、他にも英国発のネットワーク
各国が保育の質に関する縦断研究を実施している
カナダ、オランダ、ノルウェー、デンマークの例

図⑥ データに基づくモニタリング

■ オーストラリア

オーストラリアでは、さまざまな地域コミュニティの幼児が、どのように発達しているかの相対的な動向を明らかにするための指標、AEDI (Australian Early Developmental Index) がある。感情・情動の発達、言語、運動・身体能力の発達、社会的対人能力、コミュニケーション能力という5つの領域で発達成果を報告するもので、オーストラリア政府は総額5～6億円を投じ、3年ごとにデータを収集している。データ収集方法は、ウェブデータ入力システム上のチェックリストについて、教師の知識とクラスでの観察に基づき、1人ひとりの子どものデータを入力していく形である。

これまで26万人（全体の97.5%）のデータが収集され、オーストラリアの子どもの大半はAEDIのどの分野においても健全に発達していることがわかった。ただし、1つ、あるいはいくつかの分野においては23.6%の子どもは発達の弱い点が見いだされた。また、発達の遅れは経済社会的地位の低さに基づくものではないことなども明らかになった。

こうした情報は、園だけではなく、地方自治体、政府組織、都市計画、健康福祉サ

ービスなど、多方面の組織から提供されている。そして、そのデータを子ども同士の比較に使うのではなく、1人の子どもが生涯幸せに過ごすためには、どのような政策を立てるべきかを、州レベルやコミュニティレベルで検討しているのである。

■ノルウェー

ノルウェーには、乳児を含めた「幼稚園」があり、学校教育機関と位置づけられている。国として「全ての幼稚園が公平で質の高い保育を保証する」「子どもたちが学びと育つ場としての幼稚園の強化」「全ての子どもが幼稚園に参加する」という目標を設定している。これまで、園の総数や就園率、労働供給と労働条件、法令・規制のコンプライアンス（遵守）、ECEC施設の質については定期的にモニタリングしてきており、保育者満足度調査や、カリキュラムの実施具合は、都度行われてきた。また、自治体においては監査制度、アンケート調査などにより、法令遵守や保護者支援、施設（環境）の質がモニタリングされてきた。幼稚園では、年次計画及び教育活動の評価も行われている。

現在、政策や保育者養成、現職研修にとって必要な要素を考えるという目的で、全国統一のモニタリング制度の準備を進めているところである。

■デンマーク

デンマークでは、2007年度から教育内容の質に関する情報を自治体が公表することが法制化された。モニタリングしているのは、「人格発達」「社会的能力」「言語発達」「身体と運動」「自然及び自然現象に関する知識」「文化的価値と芸術（アート）表現」の6領域。面接や観察、質問紙調査、インタビューなどによるデータが収集される。

また、言語発達についてはストーリーテリングの手法も使われている。

●幼児教育の質についてのデータを日本でも収集すべきではないか

前節で見たように、海外のさまざまな国で幼児教育の研究データを蓄積し、分析するようになっている。一方、日本にはまだ、子どもの園での育ちに関する大規模な縦断研究データがないのが現状である。

もちろん、国によって事情は異なるから、日本も海外に倣って実施すべきだとは言えない。また、子ども1人ひとりの存在価値はデータだけに落とし込めないことも、言うまでもない。

ただ、最初に述べたように、日本の幼児教育にも課題はあると、私は考えている。全ての子どもに幸せな人生を保証できるように、幼児教育のあり方を改めて見直し、幼児教育を通して子どものどのような力を伸ばすか、そのために保育者は何をすべきかなどを検討してもよいだろう。そして、日本の幼児教育の質に関するデータを集め、質を保証する方法を考えていくことも、グローバル化の中で必要になるのではないだろうか。

1-2

パネルディスカッション

日本における保育の課題と展望

panel discussion

第1部 問題提起

～日本におけるECECの課題～



神原洋一
CRN所長・お茶の水女子大学大学院教授

日本の 幼児教育の 課題と展望

第1回ECEC研究会の最後に行われたパネルディスカッションは、3部からなる。第1部は神原洋一氏による、日本の幼児教育についての問題提起。第2部はベネッセ教育総合研究所の後藤憲子主任研究員による、「第2回幼児教育・保育についての基本調査」についての報告。第3部は、上記2名に秋田喜代美先生、一見真理子先生、大豆生田啓友先生を加えた5名による総合討論である。

私は小児科医であるが、これまで多くの保育士や幼稚園教諭の方々と仕事を共にしてきた。その経験から、パネルディスカッションのための問題提起として、現在の日本におけるECECの課題を以下の5つにまとめてみた。――

表①参照

1つ目は、「日本の保育・幼稚園教育は、世界の中でどのような位置にあるのか？」ということだ。日本の幼児教育で世界に誇れることは何であり、逆に足りないことは何なのか？ と言い換えることもできる。

2つ目は、「そもそも日本の保育・幼児教育の全体像は明らかになっているのか？」である。日本では、幼児教育の「代表的」「標準的」「平均的」な保育所・幼稚園を挙げることができるのか？ という問題提起をしてみたい。

3つ目は、「保育の質を測定する基準（ものさし、measure）は何か？」ということだ。別の言い方をすると、「高い幼児教育の質」とは何か？ どのような条件を満たせば、それは質の高い幼児

教育といえるのか？ということを考える必要があるだろう。

4つ目としては、「保育の質を高めるためには、何がなされなければならないのか？」ということが挙げられる。これは、理念や精神論ではなく、どのようなことをしなければならないのか、具体的に考えていく必要があるだろう。

5つ目は、前の4つとは少し趣旨が

異なるが、「保育所と幼稚園で行われている幼児教育の内容の本質的な差は何か？」ということだ。幼保一元化を進めるためには、保育者の教育内容ではなく、実際に行われている活動の差が何か？ということを考える必要があるだろう。

こうした課題について、保育所と幼稚園の先生方に伺ってみたい。

表①

日本におけるECECの5つの課題

- 課題1 日本の保育・幼稚園教育は、世界の中でどのような位置にあるのか？
- 課題2 そもそも日本の保育・幼児教育の全体像は明らかになっているのか？
- 課題3 保育の質を測定する基準（ものさし、measure）は何か？
- 課題4 保育の質を高めるためには、何がなされなければならないのか？
- 課題5 保育所と幼稚園で行われている保育内容の本質的な差は何か？

第2部

調査データから見る日本の保育

～「第2回 幼児教育・保育についての基本調査」より～



後藤憲子
ベネッセ教育総合研究所
次世代育成研究室室長

基本的な生活習慣に 重点が置かれている

現在、幼稚園と保育所が制度改革の時期を迎え、非常に大きく変わろうとしている。我々も民間のシンクタンクとして調査データを提供することでより良い保育環境づくりに貢献できればと考え、2012年度に幼児教育・保育についての2回目の調査を行った。

調査のテーマは、園の教育・保育活動、子育て支援活動、園の体制などの実態と、回答した園長の意識である。園児数が30人以上の国公立幼稚園、認可

panel discussion

保育所、認定こども園の園長または施設長を対象に、郵送による自記式アンケートで行った。—図①— この調査結果の中から、今回のパネルディスカッションのテーマにかかわるいくつかのデータを紹介したい。

図②は、「教育・保育目標として特に重視していること」を16項目の中から3つ選んでいただいたものだ。幼稚園、保育所ともに1位が「基本的な生活習慣を身につけること」、2位が「健康な体をつくること」だった。3位は幼稚園では「友だちを大切にし、仲良く協力すること」、保育所では「人への思いやりを持つこと」が挙がったが、他者との関係を大切にするという点では、相似している。1位、2位に関しては、幼稚園教育要領の改定の際に、「健康」の領域で心身の健康や運動の充実、食育、生活習慣に関する指導などの項目が付け加えられたことが影響しているのではないかと考えている。

一方、日本の幼児教育が大切にしてきた、遊びの中でさまざまなものに興味を持ったり、伸び伸びと遊んだりするといった点は、あまり上位に来ていなかった。これは、私自身の所感としては意外であった。

保育者の確保と質の維持が課題

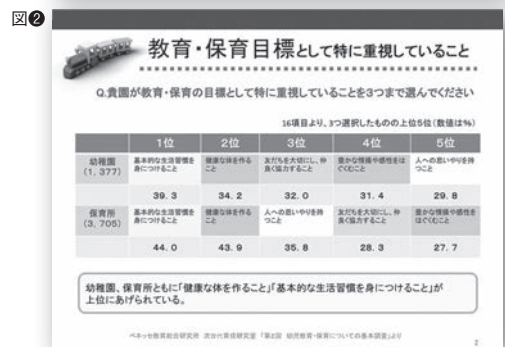
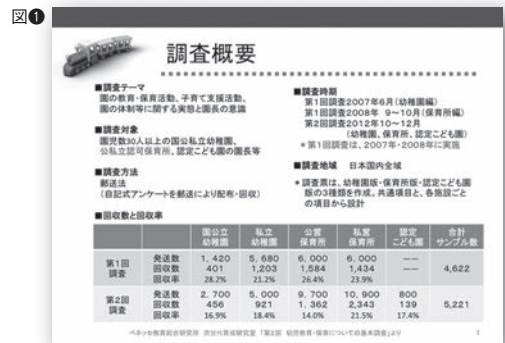
図③は、教育課程・保育課程の編成について尋ねたものだ。ほとんどの園が編成しており、指導計画も作成していた。しかし、毎年見直しをしているかどうかという点で、多少違いが出るという結果であった。

また、保育者の免許・資格保有状況だが、幼稚園教諭と保育士の両方の免許を持っている人は、幼稚園では75.6%、保育所で81.6%と、保育所の方が少し多い結果となった。この背景

には、公立では幼稚園と保育所の職員の人事交流を推し進めていることがあり、ここ10年ほど、行政が両方の免許の取得を求めてきたということや、幼保一元化の流れがある。

学生にとっては、幼稚園、保育所のどちらにも就職できるというメリットがあるが、一方で履修科目が増え、学生が忙しくなったにもかかわらず、実践的な知識やスキルを身につける機会がなかなか得られないという課題もあるようだ。

図④は、保育者の雇用形態である。非正規の保育者は、公立の方が多いという結果であった。その理由としては、自治体の財政難が考えられるだろう。延長保育や早朝保育、預かり保育で保育の時間が長くなった部分を、非正規の保育者が担っているという幼稚園や保育所も多いようだ。非正規の職員は研修を受けにくいという現状もあり、保育者としてのスキルを磨く機会が少ないことも課題だ。



また、図⑤を見てもわかるように、開園時間の長時間化で、園での研修の機会がなかなかつくりにくいという現状もあるようだ。

図⑥は、園運営上の課題について、22項目の中から最も重要な課題だと思ふものを1つ選んでいただいたものである。私立幼稚園を除き、「保育者の資質の維持、向上」がどこの園でも第1位に挙げられている。「保育者の確保」も公営保育所、私営保育所で第2位となっていた。量的な業務の拡大にスタッフの確保が追いついていない、スタッフを確保できても保育者の質をいかに維持するかという点に課題があるのではないかと推測できる。

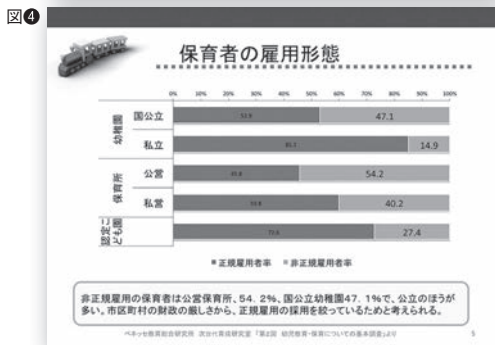
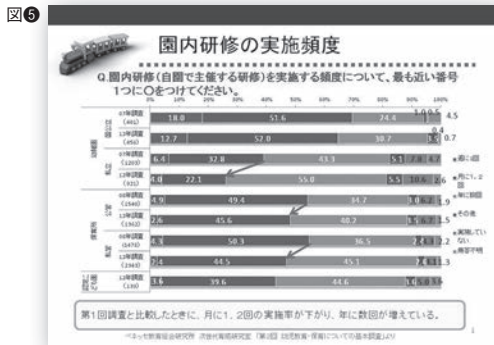
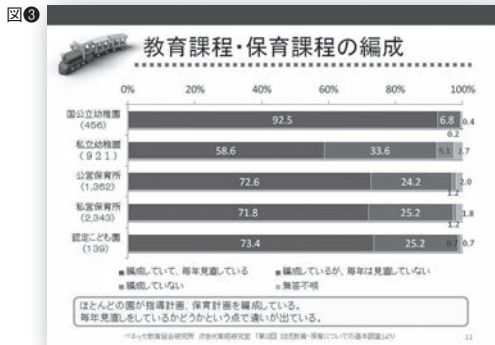
養成課程の教育内容の充実も求められている

図⑦は、保育者の資質向上のために必要なことについて、27項目の中から必

要だと思ふ項目すべてに丸をつけていただいたものだ。私立幼稚園、私営保育所、認定こども園では「保育者の給与面での待遇改善」が第1位に挙げられた。公営保育所では「職員配置基準の改善」が第1位であった。

「養成課程の教育内容の充実」が、幼稚園・保育所、公立・私立の別にかかわらず上位に挙がってきていることにも注目したい。なぜ養成課程の教育内容が課題になっているかを考える必要があるだろう。

図⑧は、私立幼稚園と私営保育所を対象に、認定こども園への移行を考えているかどうかについて聞いたものだ。私立幼稚園の36%が条件によっては移行してもよいと回答していた。その条件としては、施設整備費の保証、職員配置基準を満たすための人件費の保証、会計処理や申請手続きなどの事務手続きの簡素化や一本化などが挙げられていた。



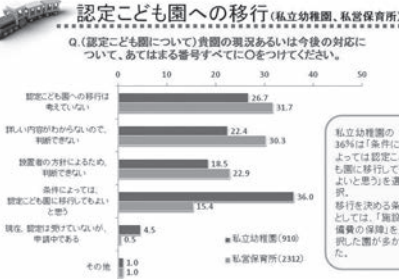
今回ご紹介した調査結果は、幼稚園、保育所の実態の一部を示したものであるが、今後、議論を進めるための参考にしていただければと考えている。

図7 保育者の資質向上のために必要なこと
前頁の28項目から選択率の高いもの上位5位を表示

園種	養成課程の教育内容の充実	非正規雇用保育者の正職化	保育者同士が学び合う場の風土づくり	園内研修の内容の向上	管理職の指導力の向上
国立幼稚園	80.9	84.7	84.0	80.5	80.1
私立幼稚園	77.2	80.8	80.6	88.0	85.3
公立保育所	72.6	87.7	82.1	81.2	89.5
私立保育所	83.4	87.2	85.3	93.2	80.1
認定こども園	77.7	89.5	85.5	89.7	89.0

私立幼稚園、私立保育所、認定こども園では「保育者の給与面での待遇改善」が、公立保育所では「職員配置基準の改善」が1位にあげられている。国立幼稚園で1位の「養成課程の教育内容の充実」は私立幼稚園、私立保育所、認定こども園でも高順位にあげられている。

図8 認定こども園への移行(私立幼稚園、私立保育所)
Q.(認定こども園について)貴園の状況あるいは今後の対応について、あてはまる番号すべてに○をつけてください。



第3部 総合討論

panel discussion

司会● 榊原洋一 Sakakihara Yoichi …………… CRN 所長・お茶の水女子大学大学院教授

パネリスト●

秋田喜代美 Akita Kiyomi …………… 東京大学大学院教授

後藤憲子 Goto Noriko …………… ベネッセ教育総合研究所 次世代育成研究室室長

一見真理子 Ichimi Mariko …………… 国立教育政策研究所総括研究官

大豆生田啓友 Omameuda Hirotomo …………… 玉川大学准教授

※所属・肩書きは発表当時2013年6月30日のもの

日本の幼児教育に どのような課題があるか

榊原● 本日はよろしくお願ひいたします。まずは、ECECの課題について、お一人ずつコメントをお願いします。

一見● 本日はこのような席に立たせていただき、ありがとうございます。私自身は、もともと幼児教育の専門ではありません



ませんが、ユネスコを通じた国際協力のセクションにおりましたので、海外の方々を日本の幼児教育の現場にご案内する機会が多くありました。また、ベネッセのアジア地域の5都市の幼児の生活や子育てに関する比較調査にかかわるなど、日本とそれ以外の国の幼児教育のあり方を比較する機会が多かったので、そうした立ち位置から発言させていただきます。

まず、日本の幼児教育と、他のアジアの国の幼児教育は、かなり異なった特徴があるということを感じています。保育に対する期待は、日本以外のアジア地域では遊びを通して知的に発達する、激しい競争社会を生き抜く力を身につけることにあり、一方、日本では子どもの自発的な遊びを通して社会性を身につけたり、友だちや集団の意識を大切にしたりすることが求められているように思います。どちらが優れているかの結論を出そうとすること自体も、それがなぜなのかを考えることは、興味深いことです。

また、日本の幼児教育には遊びを重視する素晴らしい伝統がありますが、それが果たして日本の幼児教育の典型といていいかどうかは議論を深める必要があると思っています。なぜならば、幼児教育の質の保証を考えると、どこでどういう幼児教育が行われているかをマッピングしておくこと、実態を把握しておくことが、非常に大切になってくるからです。



国際的にもエビデンスに基づく制度改革が当たり前になってきており、きちんとデータを揃えたうえで、予算を政府に請求していくことが重要になっていますが、秋田先生もおっしゃったように、日本はその点が比較的遅れています。今回、秋田先生が日本のデータを初めてOECDに提供したとき、保育者の待遇や子どもと保育者の比率などの指標が必ずしも芳しくないということが明らかになりました。これをテコにして、予算措置を要求できる段階には入りましたが、震災や政権の不安定さなどさまざまな事情があり、就学前教育に公的な予算を十分に呼び込めないという状況です。ともあれ今後は、行政側が一元的にデータを収集するなどの体制作りが必要です。

大豆生田 ● 本日はよろしくお願ひします。私は、普段幼稚園や保育所の現場を見ることや、保護者との接点も多いのでこうしたスタンスからお話をさせていただきます。

本日、幼児教育の質保証に関してのデータをもつことの大切さについて、秋田先生がお話されていました。最近、子どもの運動能力に関する調査が行われましたが、その結果は特に幼児教育の世界には大きなメッセージであったと思います。自由に遊ぶことと運動能力との関連や、園庭の有無との関係性など、ある程度の規模をもったエビデンスが出てきて、現場にも反映されました。データを揃えることの重要性を痛感しました。

また、先ほど後藤さんが報告されたベネッセの調査からは、園が、保育者の問題を非常に大きな課題として捉えていることがわかりました。これは、多くの現場を訪れる中で、私も実感していることです。

保育者の問題を解決するために、養成課程の充実の必要性を感じている園が多くありましたが、養成カリキュラムの問題なのか、生活習慣も含めてもったとき

ちんと教育せよということなのか、どのレベルのことを求めているのか、知りたいと思っています。

秋田● 私は、今日は国という大きな視点から、スタンダードというもののあり方についてお話をさせていただきました。しかし一方で、それだけでいいのかとも考えています。むしろ、各園の文化、地域の文化、その固有性で考えるのが実践者の立場ではないかと。幼児教育は多様であり、その多様性の中で、それぞれが誇りを持って質を向上させていくということですが、幼児教育の質を上げていくものではないとも考えています。

だからこそ、それぞれの園の誇りを得るためにも自園は何が特徴的なのかを知ることが大事ではないかと考えています。

幼児教育の質をどう考え、どう高めていくのか

榊原● 幼児教育の質をどう見るかというのは非常に難しい問題がありますね。

一見● OECDで理想とする保育者像の一つとして、ヨーロッパのソーシャルペタゴーク（社会教育士）が挙げられています。専門性が高く、待遇面でも小学校教諭と同等以上で、キャリアも長く、社会、家庭、幼児教育の三者の橋渡しができる専門家です。質保証のネックは、子どもとかわる大人の力量にかかっていると思いますので、そこに関しての議論が今日も必要だと思われま。

また、ECECに関する国際的な会議に、日本から参加できる人材がなかなかいないという課題もあると思っています。こうした会議では、保育情報のIT化の促進などがはかられつつありますが、こうした会議に参加できるような、なるべく見晴らしのいい立ち位置にある人材を育成することが必要です。そのためには、省庁の一体化・一本化は不可欠です。



大豆生田啓友
玉川大学准教授

大豆生田● 先ほどの秋田先生のお話にもありましたように、幼児教育の質を考えるには、「スタンダードは何か」を考える国レベルの大きな観点と、「個々の園レベル」という両面から議論を進めることが大切なのだと思います。

ただ、「幼児教育の多様性」というのが、まるっきり多様なのが、それともある程度の共通性があった上での多様なのかを考えることも、一つの鍵になるのかなと思いました。

秋田● 大豆生田先生、的を射た指摘ありがとうございます。私自身は、すべての子どもに保証する質のレベルを上げるのが国や公共の仕事で、そのレベル以上のことは、個々の園の対応であると考えています。各園が学び続けてさらによくなっていくというプロセスにこそ、意味を見いだしたいのです。

そのための鍵は保育者が握っていると、先ほどからの議論で出ていますが、その中でも重要なのは、園長や施設長です。それぞれの先生の力を十分に発揮させ、足りないところを補い合いながら、質を高めていくという「園としての有能さ」を議論していくことが大切ではないでしょうか。

後藤● 私自身も今回の調査を行いながら、現場で起こっている問題を解決していくことが大切ではありますが、そのためにも、幼児教育の質を上げるには大きな観点からも考える必要があり、そこを



秋田喜代美
東京大学大学院教授

どう結びつけていくかが大切だということを感じました。

また、先ほど一見先生から、遊びの中で学ぶのが日本の幼児教育のスタンダードだといわれているが、実態とはズレがあるのではないかというお話がありました。今、現場の先生方にお話を聞くと、保護者のニーズにどう応えていくかという点に課題を感じているという意見がとても多く出てきます。このことが、ズレの原因の一つとして考えられるのではないのでしょうか。

秋田先生の講演で、コミュニティの中で幼児教育の質を考えていくという諸外国の例が挙がっていましたが、先生や保護者だけでなく、コミュニティ全体で子どもに必要な幼児教育とは何かを考えていくことが、一つの新たな視点として考えられるのではないかと思います。

養成校が抱える 課題について

榊原● 先ほど、養成校を充実させることの必要性が出てきましたが、これについて、後藤さん、大豆生田先生からもう少しコメントをいただけますか？

後藤● この調査を行ったとき、必要だと思うことに○をつけてもらうと同時に、なぜそう思うのかも書いていただい

ています。例えば、「保育者となる人たち自身に生活の実体験が不足している」「幼保両方の免許を取るのに忙しく、実践的なスキルのトレーニングをする機会が不足している」などのご指摘がありました。

一方で、特別支援の子どもたちをどう見ていくか、問題を抱えている保護者へのカウンセリングも必要など、社会からの要求レベルが非常に高まっています。そのため、養成校の課題だと一言で片付けてしまうのではなく、何が具体的に課題で、どのような対応が必要なのかを、一つひとつ分解して、考えていくことが必要ではないかと思っています。

大豆生田● 確かに、実体験を養成課程の中にどう組み込むかという課題はあると思っています。私が所属している玉川大学では、1、2年生で現場に出る体験を増やすために、インターンシップを充実させ、カリキュラム改革を行いました。

ただ、実体験の中身として何が必要かということになると少し議論が必要かもしれません。

榊原● 秋田先生、保育学会長として、今の養成校への期待などがございましたら、コメントをお願いします。

秋田● まず、保育士と幼稚園教諭の両方の免許を取る必要があるために、実体験が不足するという課題、これはやはり保育士と幼稚園教諭の資格や養成課程をいずれいつかは一本化することが大切だと考えています。一本化されたカリキュ

ラムの中で、さまざまな特徴をもつ園で豊富な実体験をして、実践力を高めてほしい。非常に難しいことであり、夢でもあります。あえて申し上げたいと思います。

また、個々の保育者の質を上げるという観点では、ある程度実践を積んだあとに、さらに専門性を深めるための基準や資格をつくり、そのための研修を行うということも考えられると思います。例えば、カナダには専門性基準があり、新人が最低限身につけておく基準と、ある程度現場で実践経験を積んだ保育者がさらに専門性を高めるための基準があります。こうした基準を決める職能団体があり、保育者同士がお互いの経験やノウハウを提供し、共通で活用できるデータベースをつくったり、研修をしたりしています。

会場とパネリストとの 質疑応答

榊原● ここからは、会場の皆様からご質問をいただきたいと思います。

Q1 八王子で園長をしています。今、幼児教育の現場は、「一刻も早く、人とお金をください」というような、かなり切羽詰まった状況です。そのためにも、早く政治家を動かす物差しが日本でつく

れないかと思っています。海外との比較ではなく、現状として日本の子どもの育ちが大変なんだということも国にも深刻に考えてもらいたい。しかし、その大変さを証明できるデータがないという状態です。実際に目の前の子どもや家族を見ているだけで、状況の大変さは伝わってくるので、今の子どもたちの未来をつくるためにも、国の支援を整えていく必要があると思いました。

秋田● 先生が言われたような本当に困難な状況は、よく理解しています。その状況を打開するためにも、保護者や地域の参画によって質を上げていくことが大切だと考えています。園の活動が地域に開かれることによって、例えば、その地域の政治や行政官が、状況を理解していく。このことは、一つのエビデンスになると思います。

数値だけがデータではありません。園がコミュニティの中で抱えている課題を、いろいろな人に参画してもらいながら共有し、対話していく。また、課題だけではなく、質の高い幼児教育をすれば、それだけ子どもが成長していくという事実・エピソードも伝えていく必要があります。その対話というものが、多様性を保証しながら、質を上げていくということにつながるのではないのでしょうか。

一見● 韓国が、OECDの勧告を受けて、ECECにかかわる専門家を集めた、データ共有や一元化のための専門機関を早々と設立しました。日本でも、実践の現場や養成校とリンクして、きめの細かなレベルまでのデータが作成できる機関の設立が本当に待たれると思います。

Q2 横須賀から参加しました。お話を聞いていて、幼児教育の質ということと、保育者の質とは連動していると思いました。先ほど、養成校の課題についてお話がありましたが、現場を見ていると、遊びを豊かにしていこうというときに、



一見真理子

子どもが遊んでいる瞬間、どういう言葉がけをするかが非常に大切になってきます。しかしどうしても、保育者個人に関わる問題になってしまいます。保育者の質が、子どもを豊かにするか、しぼませてしまうかに大きく影響してしまうのです。

養成校では、「遊び」という科目はありません。夢中で遊んで、その遊びをどう展開したらおもしろいかといったことを、今の学生さんは生活体験として持っています。だから、子どもにも伝えられない。そこに、大きなポイントがあるのではないかと考えています。

大豆生田● 先生がおっしゃられたこと、私は賛成です。今の若い世代は、遊び込むという経験が非常に減っています。私も授業では、例えば泥だんごを作ってみるなど、「子どもになってみて、学ぶ」ということを大事にしています。

ただ、それを個人の問題だと言ってしまうと、限界があります。それぞれの保育者なりのあり方を、園の中でつくっていくことも大切だと思っています。

幼児教育の質を高めるためにこれからできることは何か

榊原● パネリストの先生方、最後に一言ずつお願いします。

秋田● 外を鏡にして、自園や自国を振り返ってみると、良いところが見えてく

るということは多くあると思います。子どもと一緒に、日本の文化や良さを大切にしたいという心が必要だろうと思いました。

一見● 日本の幼児教育の質の良さを、いろいろな条件が整わないために落としてしまうことのないように、政治家も巻き込みながら訴え続けていくことが大事だと思いました。また、世論でムードを誘導していくことも効果的だと思います。例えば、日本での幼稚園や保育所のエピソードをたくさん集めて、宮藤官九郎さんのような方にシナリオを書いていただき、朝の連続ドラマにしてはどうかなどと考えていました。(笑)

大豆生田● 一見先生が、日本は幼児教育に夢を描く傾向が高いと話されていて、この視点はとても大事なことだと思いました。幼児教育に夢が描けるかということの中に、幼児教育が良くなっていく要素が多く含まれていると思います。夢が描ける状況をどうつくっていくのが、エビデンスを揃えることと並んで大切なことだと思いました。

後藤● 一見先生のドラマ化の話、私も大賛成です。そういうところで具体的な事例や、こんなことが行われているんだということ、世の中の方に伝えていくことも必要なのかなと思いました。

また、調査をしていると、ネガティブなことが出てきやすいのですが、調査の中では、認定こども園になったことの良さもたくさん挙がってきています。ニュースでは、保育所が足りないことばかりが取り上げられてしまいますが、ポジティブな回答も伝えていきたい、良いニュースも伝えられる調査をしていきたいと思いました。

榊原● 本日は長い時間、ありがとうございました。



第二章

遊びと学びの
子ども学
～Playful Pedagogy～

Chapter



第1節：Playful Pedagogyとは

- 2-1-1 Playful Pedagogyの目指すものは？
- 2-1-2 喜びいっぱいの生命感動学
- 2-1-3 子どもの「遊び」をはぐくむ保育者：
育ちを見通した「学び」の多様性
- 2-1-4 「遊び」と「教育」の板挟み
～幼児の Guided play（誘導的遊び）への理解～

第2節：シンポジウム：東アジアの現場

- 2-2-1 国定基準からみた台湾の幼稚園における「遊び」の位置づけ
- 2-2-2 「遊び」を通して「学ぶ」～教育神経科学の視点から～
- 2-2-3 「あー、楽しかった！明日もまた遊びたい！」
という保育を目指して
- 2-2-4 パネルディスカッション 東アジアの現場から

第3節：遊びの中に学びがある

- 2-3-1 学習の場としての遊び学習：
子どもの楽育教具と空間デザイン
- 2-3-2 Playful Learningの情景
All you need is... Love, Passion and Playful Learning

2-1-1

Playful Pedagogyとは

Playful Pedagogyの目指すものは？

榊原洋一

Sakakihara Yoichi …………… CRN 所長・お茶の水女子大学大学院教授



お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科教授、医学博士。1951年東京都生まれ。東京大学医学部を卒業後、同大学附属病院小児科に勤務。発達障害のある子どもの医療に携わりながら、発達のメカニズムを研究する。東京大学医学部講師を経て、現職。専門は、小児科学、小児神経学、発達神経学、国際医療協力、育児学。主な著書に『乳児保育の基本』（フレーベル館）、『発達障害と子どもの生きる力』（金剛出版）など。

◎ 子どもの遊びに 大人がいかにかわるか

私は二十数年の間、小児科医として大学病院に勤務し、子どもが遊びを通して多くのことを学ぶ姿を見てきた。学びと遊びは、子どもの年齢が上がるにつれて分化していくが、幼児期には密接に結びついていると考えている。

ただ、一口に遊びと言っても、その内容も仕方も多岐にわたる。例えば、子どもが大人から何の指導も受けず、ただ自由に遊ぶ場合もあれば、大人の指導を受けて遊ぶ場合もある。どのような遊びでも、同じように学びに結びつくのだろうか。あるいは、遊び方によって、得られる学びも違ってくるのだろうか。

こうした疑問を抱くようになったのは、10年ほど前、現在の勤務している大学に赴

任し、幼児教育に携わるようになってからである。

私の勤務している大学には附属幼稚園があり、教え子の学生がそこで保育実習を行うため、私も付き添うことがある。初めて付き添ったときは、私も子どもと遊んだのだが、後で園長先生に注意された。「もっと子どもを主体的に遊ばせてほしい」と。

言われてみれば、私は「積み木をしよう」「ブランコに乗ろう」というように、私がしたい遊びをすることだけを考えて、子どもを誘っていた。子どもに自分のしたいことを押しつけてしまっていたと反省した。

それ以来、保育実習に付き添うたびに、幼稚園で先生方がどのように子どもとかわっているかを注意して見学するようになった。一見すると子どもがただ自由に遊んでいるだけのように感じるが、よく見るとそうではない。どの先生も遊んでいる子

もの様子をしっかりと見とり、子どもが興味を持てるように働きかけるなど、必要に応じた対応をしていることに気づいた。

これをきっかけに、私はいくつもの幼稚園や保育所を見学するようになったが、受ける印象は同じだった。どの幼稚園や保育所でも、子どもが遊びを楽しむだけでなく、保育者が目的を持ち、それを実現できるように遊びにかかわっていると感じる。つまり、子どもの主体的な遊びを学びに結びつけているということである。

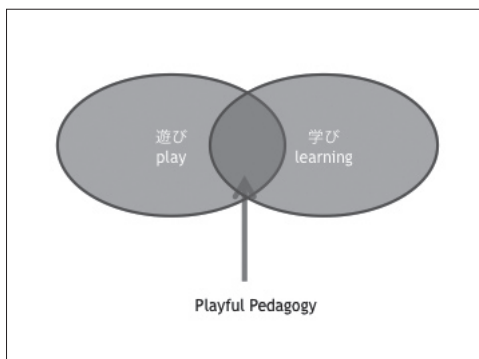
日本の幼稚園や保育所が以前から遊びを通した教育を大切にしていることは知識として知っていたが、幼児教育の現場を知る中で、身をもって感じるようになった。

● Playful Pedagogyの鍵となる Guided playの特徴

子どもの成長に対する遊びの影響についての研究は、近年、欧米の幼児教育学者や発達心理学者によって力が入れている。

欧米にも遊びを通した教育の仕方があり、Playful Pedagogy（楽しく遊びながらの教育）と呼ばれている。—— 図①参照

これを充実させるための重要な方法の1つとして注目されているのが、Guided play（ガイドされた遊び）である。これは、どの



図①

ような遊びなのだろうか。

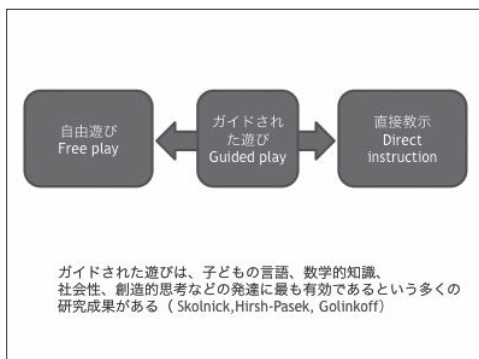
子どもの主体性によって、遊びを2つに分けてみよう。一方の極は、最も主体性が高い遊び、Free play（自由遊び）である。ここでは、大人は一切かかわらず、子どもが自由に遊ぶ。もう一方の極は、最も主体性が低い遊び、Direct instruction（直接教示）である。ここでは、大人の指導に子どもがただ従うことになる。そして、Free playとDirect instructionの中間に位置づけられる遊びが、Guided playである。—— 図②参照

アメリカの発達心理学者Hirsh-Pasekは、Guided playを成り立たせる要件として次の3つを挙げる。

- ①保育者が教育目的に沿った環境を用意すること
- ②保育者が子どもの自然な好奇心や探究心を刺激するように遊びの目的を設定すること
- ③保育者が子どもに何を学んでほしいかを考えて遊具などを選び、与えること

Hirsh-Pasekが、子どもに対する保育者のかかわり方を重視していることがわかるだろう。

このHirsh-Pasekによる定義に従って、Guided playとはどのような遊びなのか、その特徴を確認してみよう。まず「子どもの自然な好奇心や探究心」を重視する点で



図②

Direct instructionと異なる。また、「教育目標」の設定、それに沿った「遊ぶ環境」の整備、遊具の選定・提供などを大人が行う、換言すれば、すべてを子どもの自由にさせるわけではないという点でFree playとも異なる。つまり、Guided playとは子どもの主体性を尊重する一方、子どもの好奇心や探究心を刺激できるように大人がしっかり計画を立て、かかわる遊びといえるだろう。

— 図③参照

● Guided playはなぜ有効なのか

遊び、特にGuided playは、言葉や社会性の獲得など、子どもの発達にとって大きな役割を担うと、Hirsh-Pasekは述べている。では、なぜGuided playにそのような力があるのだろうか。これについて考えてみたい。

脳科学の研究では、子どもの成長は、子どもが抱く感情によって大きく左右される可能性があることを示唆している。楽しさや喜びなどのポジティブな感情を多く感じる環境にある子どもほど、発達が早く、学習内容を身につけやすい傾向が見られるのである。

そのため、Direct instructionでは、たとえば多くのことを学べるような遊びを保育者

が用意したとしても、子どもの感情が考慮されない以上、有効であるとはいえないだろう。

Free playでは、子どもは遊びに楽しさを感じるに違いない。その点では効果的であるが、保育者がかかわらないため、遊びが必ずしも学びに結びつくとは限らないだろう。

Guided playでは、保育者は子どもが学ぶ環境を整えつつ、あくまでも子どもが主体的に参加し、活用できるように促すことに務める。だからこそ、子どもは楽しさを十分に感じながら効果的な学びができるのではないだろうか。

Hirsh-Pasekも、「子どもが最も発達するのは、遊んでいるときである」と述べている。さらに、ただ遊ぶ、Free playを行うだけでなく、保育者によるガイドが加わる、Guided playとなることで、子どもの発達が促されることをさまざまな研究データによって裏づけている。— 表①参照

● Guided playは日本の伝統的な幼児教育法

子どもの主体的な遊びと保育者の適切なかかわり。Guided playに見られるこの要素は、日本の幼児教育が昔から充実させているものである。Guided playと日本の幼児教育法は同じ特徴を備えていることになるため、日本では伝統的にGuided playが行われていたと言っても過言ではない。一方、かつて私が学生の保育実習に付き添ったとき、幼稚園の園長先生にたしなめられた遊び方ができる。

恐らく、日本の保育者は日々子どもと向き合う中でGuided playの効果に気づき、そのノウハウを後輩へ伝授してきたに違いな



図③

表① Guided playが子どもの発達を促す研究データの例

学力における有効性	社会情緒的発達における有効性
<p>幼稚園で語彙を学習する30分間の活動を週2回、2か月間行った。活動内容は次の2つ。</p> <p>①30分間すべて指導者から教えらるる</p> <p>②20分間指導者に教えられた後、学んだ言葉を使った Guided playを10分間行う</p> <p>①を行ったグループよりも②を行ったグループの方が、多くの語彙を身につけた。</p>	<p>ヘッド・スタート・プログラム(※)に参加している子どもを、①Direct instructionを行うグループと②Guided playを行うグループに分け、計画スキルを測る活動などを実施した。その結果、①のグループよりも②のグループの方が事後テストの成績が良かった。また、自由遊びの時間の過ごし方にも違いが見られ、②のグループの方がごっこ遊びを積極的に行うことが多く、何もしていない時間が少なかった。</p>

いずれもHan, Moore, Vukelich, Buell (2010)の研究より。
 ※アメリカ合衆国政府の支援のもとに行われるプログラムで、低所得層の子どもなどを対象とする。幼稚園入園の準備として、読み書きや言葉の力を高める活動などが行われる。

い。何世代にもわたる保育者の経験が積み上げられているからこそ、アジアの多くの国の幼稚園や保育所で英語や算数などを教えるが増える中、日本では遊びを通じた教育を連綿と続けられているのだと考えられる。

● 保育者には自信を持って子どもと向き合ってほしい

今後の課題について見てみよう。

先に紹介したアメリカの発達心理学者 Hirsh-Pasekは、Guided play を中心にした Playful Pedagogyの有効性を証明するために、さらに研究を続ける必要があると述べる。特に重要なポイントとして挙げられているのは、次の3つである。

① Guided playの定義を確立すること

Guided playとはどのような遊びかという概念を明確にすることである。前述したように、Hirsh-Pasek自身はその成立要件を「教育目標の設定と環境の整備」「子どもの好奇心・探究心を刺激する目標の設定」「学びに応じた遊具の選択」とするが、異なる見解を示す研究者もいる。何がGuided playかがはっきりしなければ、その効果を検証できないし、普及させることもできないため、共通する定義を打ち出す必要があるという。

② Playful Pedagogyが子どもの発達・学習に及ぼす影響を明らかにすること

効果があることを示すデータはある程度得られているが、不十分であるという。1000人以上の子どもを対象に10年以上にわたって長期的に継続するような、大規模な研究が求められると述べている。

③ 遊びと学びとの因果関係を明らかにすること

Guided playがFree playやDirect instructionよりも子どもの発達に効果があるのはなぜか、そのメカニズムを解明することである。

このようにHirsh-Pasekは研究者にとってのポイントを挙げたが、では保育者にとってのポイントとは何だろうか。私は、これまで通り、しっかり子どもの様子を見とることだと考えている。日々、子どもと接する中で、子どもがどのような遊びに喜んで参加し、多くの学びを得ているかを把握していってこそ、幼児教育が豊かになるに違いない。

Guided playの長所、すなわち日本の幼児教育の長所は、近年の欧米での研究によって科学的に立証されつつある。日本の保育者には、自信を持って従来の教育法を実践していただきたい。

2-1-2

Playful Pedagogy とは

喜びいっぱいの生命感動学

小林 登

Kobayashi Noboru …… CRN 名誉所長、東京大学名誉教授



医学博士、東京大学名誉教授、CRN名誉所長、国立小児病院名誉院長、日本子ども学会名誉理事長。1954年東京大学医学部医学科を卒業し、東京大学教授、国立小児病院院長、国際小児科学会会長などを歴任。日本医師会最高優秀功労賞（84年）、毎日出版文化賞（85年）、国際小児科学会賞（86年）、武見記念賞（2003年）などを受賞。01年には勲二等瑞宝章を贈られた。主な一般向け著作に、『風韻怎思—子どものいのちを見つめて』（小学館）、『子ども学のまなざし』（明石書店）など多数。

◎ 大人の接し方が、子どもに及ぼす影響とは

保護者や保育者が子どもに優しく、思いやりをもって接することが、子どもの体と心の発達にとって、いかに重要であるかを考えてみたい。

私の専門である小児科学のキーワードの一つに、「Joie de vivre（生きる喜びいっぱい）」というフランス語がある。「Joie de vivre」であることは、子どもの心身の健やかな成長に欠かせない要素として以前から重視され、その正当性がさまざまな学問領域の研究によって科学的に裏づけられて

もいる。

例えば、イギリスの栄養学者Widdowsonが1954年に発表した論文を見てみよう。これは、ドイツのA、B2つの孤児院を約1年間調査し、養育者の接し方の違いが子ども

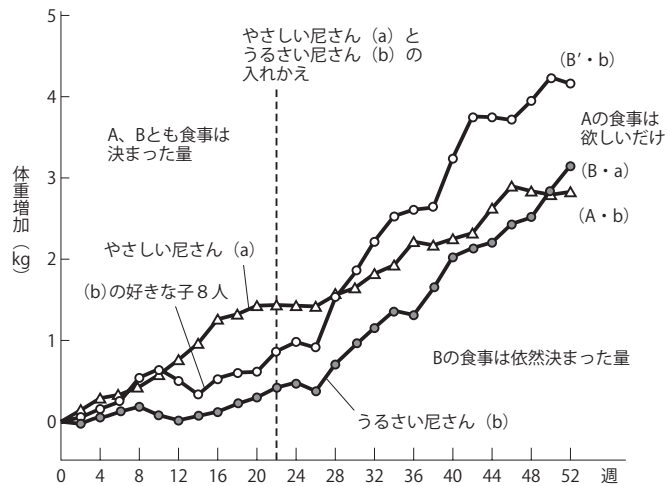


図1 養育者の性格と孤児の体重増加曲線

の発達にどのように影響するかを研究した論文である。— 図①参照

どちらの孤児院も子どもに与える食事の量は同じだったが、子どもに優しく接するシスターがいたAの孤児院の子どもは体重がよく増え、子どもに厳しく接するシスターがいたBの孤児院の子どもは体重があまり増えなかった。しかし、Aの孤児院の子どもほどではなかったが、Bの孤児院でシスターに特に可愛がられていた子ども8人は、ほかの子どもに比べれば体重が増えていた。

調査を始めて半年ほど経った頃、Aの孤児院のシスターが辞めたため、Bの孤児院のシスターが彼女の可愛がっていた8人の子どもを連れ、Aの孤児院に移ることになった。Bの孤児院には体重が増えていない子どもばかりが残ったわけである。

そして、Aの孤児院ではシスターが代わったのを機に子どもの食事の量を増やしたところ、Bの孤児院から来たシスターに可愛がられている8人の子どもは以前と同じように体重を伸ばしたが、もともとAの孤児院にいた子どもは以前に比べて体重が増えなくなり、シスターに可愛がられていた8人の子どもの平均体重がAの孤児院にいた子どもの平均体重を上回った。

一方、Bの孤児院では、子どもに優しく接するシスターを新たに迎えた。すると、食事の量は増やさなかったにもかかわらず、どの子どもの体重も順調に増えるようになった。その平均体重は、数か月後には、もともとAの孤児院にいた子どもの平均体重を上回ったほどである。

優しく育てられた子どもほど体の成長が良くなるのは、子どもが「Joie de vivre」になっているためと考えられる。

●うれしさを感じなければ成長ホルモンの分泌が阻害される

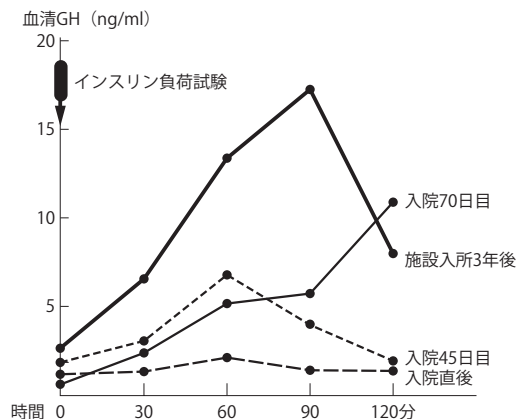
「Joie de vivre」であることは、身体の発達を促す物質、成長ホルモンの分泌とも密接な関係があることがわかっている。これについて見てみよう。

結婚生活がうまくいかないなど何らかの事情により、保護者が我が子に愛情をもって接することができなくなると、子どもの発達に大きく影響する。特に乳児期・幼児期の子どもは下痢や嘔吐を繰り返し、身長と体重も伸びなくなり、さらには抑鬱症状が表れるなど、身体と精神の健康状態が明らかに損なわれることが多い。

保護者から十分な愛情を受けられないために表れるこのような子どもの症状を、「情緒剥奪症候群」と呼ぶ。深刻な症状の子どもは保護者から離し、病院や施設などで治療を受ける必要がある。

「情緒剥奪症候群」の子どもから採血し、成長ホルモンの分泌量を測ると、治療を始めた当初は極めて少ない。そのため心身の発達に支障をきたしたと考えられる。し

愛情遮断性低身長の子どものGH分泌能の経時的変貌



図②

かし、治療の過程で医師や看護師から優しくされ、可愛がられると、成長ホルモンは日を追って増加し、症状も改善していく。—— 図②参照 気持ちが「Joie de vivre」になるからである。そして3年ほど経てば、成長ホルモンは安定して正常に分泌されるようになる。

子どもが成長ホルモンを分泌するためには周囲の大人が温かく、思いやりをもって接することが、いかに重要であるかがわかるだろう。

●「Joie de vivre」であることと学びとの相関

「Joie de vivre」であれば、学びにも良い影響を及ぼす可能性が高い。これは、近年の脳科学や生理学の研究によっても裏づけられつつある。

アメリカの生理学者MacLeanは脳の三位一体説を提唱し、人間の脳をその機能によって次の3階層に分けた。—— 図③参照

①魚類・爬虫類脳

脳の中核にあたる間脳・脳幹・脊髄からなり、呼吸や血液循環などの生命を維持す

る機能や身体を動かす機能のみを司る脳である。脊椎動物の中で進化の程度が低い魚類や爬虫類などの脳である。

②原始哺乳動物脳

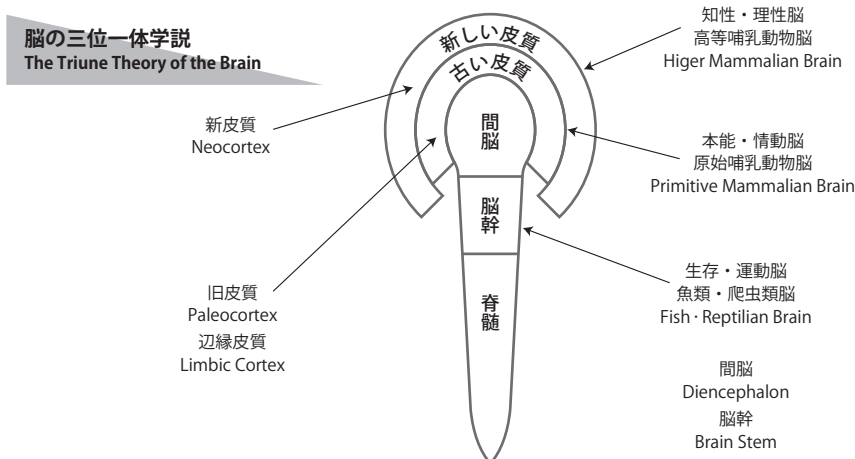
①の外側に発達した海馬、扁桃体、視床下部・上部など的大脑辺縁系からなり、食欲や性欲といった種の保存に必要な情動、さらに喜びや悲しみといった感情を生み、生理機能などをコントロールする機能を司る。原始的な哺乳類の脳が有する階層である。

③高等哺乳動物脳

②の外側、脳の最上層部に発達した大脳新皮質を有する脳で、学習などの知的行動を司る。この階層は、人間や猿、馬などの高等哺乳類の脳にしかない。

このようにMacLeanの研究は、体のプログラムである①、心のプログラムである②、知性のプログラムである③、という具合に、脳が段階的に進化してきたことを示している。

それぞれの位置を見ると、中枢部の①と上層部の③に隣接して②があることがわかる。先に孤児院での体重増加についての研



図③

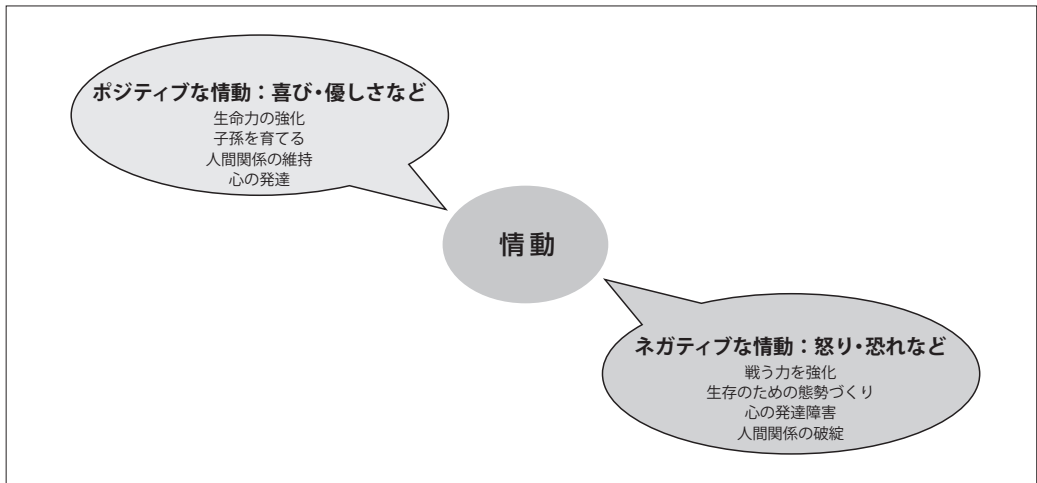


図4

究や「情緒剥奪症候群」の子どもの例で見たとように、「Joie de vivre」である子どもの体はよく発達していた。つまり、感情を司る②は、隣接する①の機能、生命維持や運動などの機能に大きく作用しているのである。したがって②が、やはり隣接する③の機能、知性・理性に対しても影響する可能性は高いと考えられる。

また、②が生み、生理機能などをコントロールする感情は、大きく2つに分けられる。— 図4参照 1つは怒りや恐れなど、いわばネガティブな感情である。苛酷な生存競争を勝ち抜いたり、危険を察知し自分の身を守ったりするためには必要になるが、精神の発達を阻害し、人間関係を破綻させることにもなりかねない。

感情のもう1つは、喜びや優しさなど、いわばポジティブな感情である。心身の健全な発達を促し、人間関係を円満に保つ働きがある。安心して生活するうえで欠かせない感情である。これに満たされた状態こそ、「Joie de vivre」であると言ってよい。

知性を司る③は、感情を司る②に影響するとみられるため、ポジティブな感情を抱く方が、よく学ぶことができると言えるだろう。すなわち、「Joie de vivre」になるこ

とは、学びにとっても効果があると考えられるのである。

●あらゆる子どもが、「Joie de vivre」になれるように

子どもの感情は、周囲の大人の接し方によって大きく左右される。子どもが「Joie de vivre」になるためには、前にも述べたように、大人が優しく、思いやりをもって接することが重要である。他者に対する気遣いなど、社会で生きるために求められる力の基礎を育むことにもつながると、私は考えている。

大人に優しくされ、思いやられることが、子どもの成長にどのように影響するか、子どもはどのようなときに「Joie de vivre」になるか。脳科学などの知見を応用しながら、これらのメカニズムを解明するための学問として、私は「Child Bio-emotinicomics (子ども生命感動学)」を提唱し、これを体系化することに力を入れている。あらゆる子どもが心身ともに健康に育っていけるように、今後も研究を続けていきたい。

2-1-3

Playful Pedagogy とは

子どもの「遊び」をはぐくむ保育者： 育ちを見通した「学び」の多様性

秋田喜代美

Akita Kiyomi …………… 東京大学大学院教授



東京大学大学院教育学研究科教授。東京大学大学院教育学研究科博士課程修了。博士（教育学）。専門は保育学、教育心理学、授業研究。現在、日本保育学会会長、日本読書学会会長、World Association of Lesson Studies, Vice President、日本発達心理学会理事等を務める。日本教育心理学会城戸研究奨励賞、日本読書学会読書科学研究奨励賞、(財)発達科学研究奨励賞等を受賞。著作に、『保育のおもむき』（ひかりのくに）、『学びの心理学』（左右社）、『保育の心理学』（全国社会福祉協議会）など多数。

◎ あこがれ、 夢中になる遊びの経験

充実した遊びの中で、子どもたちは、仲間づくり、世界づくり、そして、自分づくりを行っている。遊びの経験の中で、他者にあこがれ、ものに惹かれ、そして、自分の思い描く世界と一体になって、今の自分とは違うものになりきり、遊び込む。つまり、それは遊びを通して、①他者と出会い、②ものと出会うことであり、夢中になることで、③出来事の中の役や世界に自らを同化し、④見立てやファンタジーの世界に生きるということである。それが乳幼児の育ちの源となる。ある行為を模倣し習得するだけでなく、自分たちでその遊びを⑤持続発展させていくことで、対象とのかかわりや仲間との

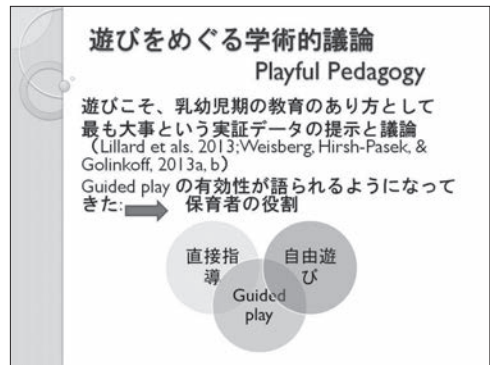
かかわりを深め、新たな自己表現へと形を変えていく。これが新しい文化創造となる。遊び込むことで、子どもはもう一つの可能性を日々開いて育っていく。幼稚園や保育園での集団保育における暮らしの中では、さまざまな場面で、振る舞いのかっこ良さや美しさにあこがれ、物や事象のよさや不思議さに惹かれることが生まれている。

近年では、保育に関してさまざまな学術理論や保育原理があり、保育がもたらす、その後の育ちへの効果が実証的に数値で語られてきている。しかし、子どもの経験から保育を考えるならば、安心感や居場所感の中で、文化的に価値あるものに出会い、夢中になり、没頭する時間、その子が生き生きとする時間がより長くあることが、保育の質の豊かさとして最も大事である（秋田ほか、2010）。

● 遊びをめぐる学術的議論 としてのPlayful Pedagogy

近年、遊びこそ乳幼児期の教育のあり方として大事であるということが実証的にデータが提示されて、その効果の有無や要因との関連性をめぐり、海外で議論がなされている (Lillard et als. 2013; Weisberg, Hirsh-Pasek, & Golinkoff, 2013a, b)。その中で、保育者に“Guided play”ガイドされた遊びの有効性や“子ども間の考えを共有すること=sustained shared thinking”など、保育者の役割に目を向けた語りがなされるようになってきている。Guided playは、子どもの自発的な自由遊びと、保育者の教育的意図を伴った指導の間にある保育のあり方の総称として捉えられている。

なぜGuided playが重視されるのかといえば、子どもが夢中になって取り組む方が直接的な指導よりも社会情緒的発達、言語発達等に有効 (Lillard et als, 2013) と考えられるからである。つまり、自由遊びや発見的な学びの要素 (おもしろい、自発性、柔軟性) と、意図的な教授の要素 (外的な目標、積極的な関与) の両方を、Guided playは含んでいる。また、Guided playは、ストレスを低減し、喜び・誇り・自信や社会的絆を育てるとされ (Diamond & Lee, 2011)、子どもの育ちの下ごしらえ (mise en place) をしていると表現する報告もある (Weisberg et als, 2013)。これらは数量的な実験的観察研究に基づく遊びの効果の研究である。さらに、社会文化的活動理論の立場からも、Hedegaard (2012) は、遊びの中では、要求・意図・動機の間で生じる緊張や葛藤から新たな課題が生まれ、子どもがどのようにして、その要求を統合し、折り合いをつけていくのかというところで



図①

学びや発達が生まれると指摘している。年齢により、そのあり方は異なり、保育者への要求、援助として何が求められるのかは変わってくる。

子どもは何かを学ぶために遊ぶのではなく、遊びたくて遊ぶことが大事である。だが一方で、私が大事であると考えるのは、その遊びの中で何がその子の今にとって“学びの対象”として重要であるのかを保育者が見定めるということである。学びの多様性理論を唱えるLo (2012) は、その理論の中で、①教師が経験させたいと思っていることについての、子どもの理解やかかわりについての多様性、②学びの対象をどのように扱うのかという教師の理解の多様性、③具体的にデザインに対してどのようにガイドしていくのかという行為の多様性の3つを指摘している。同じ遊びでも子どもによる多様性、それらを理解し意味づける保育者の多様性、さらに具体的な行為としての多様性があり、それを自覚することが子どもを理解し実践を理解するうえで大事なことであると考え。—— 図①

● 事例を通して、遊びの中の 学びの多様性を考える

ある子どもが廃材の箱でヘビを作ろうとしている。それを見た子どもたちもまた作

り始める。しかしそれをよく見ていると、廃材はそれぞれ同じ箱がないことから多様性が生まれる。また子どもによって精緻に作ることで満足する子もいれば、大きなところで似た形ができればそれでよしとする子どももいる。それぞれに作りたいヘビのイメージも違っている。そこで興味深いことは、このようなときに子どもたちは、ハリーポッターに出てくるヘビを作ろうとファンタジーの世界に生きると同時に、図鑑でヘビの姿を見て、より本物らしいものにしようと工夫を凝らすことで、科学的な事実にも出会っている。こういうジグザグを認めることが日本の保育の良さであると考えられる。

また、空き箱をできるだけ高く積む運動会の競技「運んでハイタワー」という1つの目標に対して2つのクラスが挑戦していく過程（かえで幼稚園DVDより）を、この学びの多様性という視点から見ると、練習試合を通して皆で協力し合う経験を積む中で、「積む」ことの質に、異なる多様な次元での気づき生まれ、学びが深まってくることが見えてくる。ここでも、子どもは夢中になって遊んでいる。その夢中な協働の取り組みだからこそ、さまざまな学びが生まれている。挑戦的な活動に不安なく取り組み、その子の可能性が十二分に発揮されることに日々の中での育ちがある。ここで大事なのは、子どもの育ちに足場をかけるのは保育者だけではなく、子ども同士もまた相互に足場をかけ合えるような環境が準備されていることである。海外のGuided playの議論では、足場をかけ導くのは保育者として語られるけれども、1学級定数の大きい日本の保育の良さは子ども同士が高め合える場を十分に準備している点にあるだろう。—— 図②

運んでハイタワーから考える 2クラスの学びの多様性分析		
変わらぬ目標	あおぞら組	太陽組
時間内に箱を積んで高さを競う	変化面と重要な特徴への気づき	変化面と重要な特徴への気づき
最初	積み方：大きい順から積み上げる	グループ間の作戦 踏み台の使用、芯を入れる 支え：長い箱を使って周りを囲む
練習試合 1回目まで	大きい順から積むと偶然風が吹いても箱が残る：勝ち 箱を接着しておく	風で跡形なく倒れる：負け 安定感のある積み方 基礎：1本だとぐらぐらするから基礎の幅を広げる
風でも倒れない		軸：穴をあけて通す。斜めに通すと早い。穴に通すのに時間がかかる。棒はいらぬ
2回	積む回数：あらかじめ接続した箱を運ぶ方が少なくよい	
皆で協力して早く積む		
決戦	不安定なものをまっすぐな大きなもので支え安定を固る 大きな支えを作る	頂上部分に少しでもたかさのあるものを積む

図②

● 遊びを支える園の持論

この子どもの姿をご紹介した広島県のかえで幼稚園では、中丸元良園長先生が「できない部分にばかり焦点をあてないで、できる部分・できようとする部分を見ていくと子どもの素晴らしさが見えてくる」「遊びながら“知らず知らずのうちに”いろいろなものが身につくのが幼児教育ですし、そんな“しかけ”がたくさんあるところが幼稚園だといえます。ただし、どんな立派な“しかけ”でも、子どもたちが楽しいと感じて乗ってこなければ、意味がありません」と語っていた。ここには園長の実践に対する持論、保育の原理が語られている。このように実践に埋め込まれた理論としての持論が園で共有されることが大事ではないだろうか。

例えば、東京都品川区の東五反田保育園（2011）では「東五の掟として、①子どもの疑問に答えを出さない、②子どもの考えを否定しない、③関心のない子には直接働きかけない、④止める必要のある行為に対して、その子の気持ちを受け止めながら行為だけを否定する」という原理が導き出されていた。

また、同区西五反田保育園（2013）では「見

守る」ということについて、「0歳児クラスから子どもの意思を尊重すること、意思を尊重するには子どものやりたい遊びをやらせてあげること、子どもがやりたい遊びとは保育者がさせたいことを、こうしようとして押しつけるものではないこと、そして子どもがじっと見つめる姿・何だろうと思っている表情・やってみたくて動き出したとき、こんな様子を見守ること」という園長のメッセージを皆が共有し合っていた。

各園の持論を自分たちの言葉で表し、目に見えるようにしていくことが、子どもの具体的な育ちにつながる保育者側の学びの環境になるのかもしれない。保育者は「見とる、見守る、見通す、見定める」という4つの見方をしていくことが大事である。特に見通しをもって、いつどのようにかかわるか、抜けるかを見定めることが実践への即興的な判断となるのである。

● 子どもの経験から考える、 保育の環境と活動

子どもが安心して自分を出し、夢中になってかかわるために、私は以下のような環境を保証していくことが大事だと考えている。この図③のような活動や環境が保証されているかを振り返ってみてはどうだろうか。

子どもの経験から考える 保育の活動と環境の質	
<ul style="list-style-type: none"> 安心感・居場所感を保証する環境 	<ul style="list-style-type: none"> 夢中になることを保証する環境と活動
<ol style="list-style-type: none"> 1 身体が休まる 2 一人や仲間内だけで居られる 3 大事に見守られている感覚(温かさ、自然との共生) 4 私、私たちの場の感覚 	<ol style="list-style-type: none"> 1 関わりたくなる 2 利用しやすい 3 続けたいくなる 4 足跡がある
	振り返り見通しができる

図③

最後に遊びについて好きな言葉を紹介したい。

「私たちは年をとるから 遊びをやめるのではない。遊びをやめるから年をとるのだ。」

(ジョージ・バーナード・ショー)

「どんな真面目な仕事も、遊戯に熱しているときほどには、人を真面目にし得ない。」

(萩原朔太郎)

子どもの遊びを支える大人の遊び心、共に遊ぼうとする気持ちを大事にすることが、遊びを導くという発想よりも大事ではないだろうか。

「遊びをせんとや生まれけむ
戯れせんとや生まれけむ
遊ぶ子どもの声聞けば
我が身さへこそ動がるれ」

『梁塵秘抄』

そこに日本の遊びの哲学があるように思う。

参考文献

秋田喜代美・芦田宏・鈴木正敏・門田理世・野口隆子・箕輪潤子・淀川裕美・小田豊(2010)

『子どもの経験から振り返る保育プロセス』幼児教育映像制作委員会事務局

Lillard et als. (2013) The impact of pretend play on children's development:A review of the evidence. Psychological Bulletin,139 (1) ,1-34.

Diamond & Lee (2011) How can we help children succeed in the 21st century?

The scientific evidence shows aids executive function development in children 4-12 years of age. Science,333,959-964.

Hedegaard,M. (2012) Analyzing children's learning and development in everyday settings from a cultural-historical wholeness approach. Mind, Culture and Activity,19,127-138.

Lo,M. (2012) Variation Theory and the Improvement of Teaching and Learning. Gotheborgs universitet.: Acta Universitatis Gotheoburgensis.

Weisberg, Hirsh-Pasek, & Golinkoff, (2013) Guided Play;Where curricular goals meet a Playful Pedagogy. Mind, Brain and Education,7 (2) ,104-112.

2-1-4

Playful Pedagogy とは

「遊び」と「教育」の板挟み

～幼児のGuided play (誘導的遊び) への理解～

朱 家雄

Zhu Jiaxiong …………… 華東師範大学名誉教授



中国教育学会常任理事、学術委員、環太平洋地区学前教育研究会(PECERA)中国大陸委員会主席。『Early Years』など6つ余りの国際学術雑誌の編集委員を務める。学術研究と教育の主な分野は、就学前教育の基本理論、幼稚園カリキュラム等。これまでに主宰した各種のテーマ研究は多項目にわたり、発表した著作・翻訳・教材は数十種類、論文は100以上に上る。省・部レベル以上の賞を多数受賞しており、国務院の特別助成を受けている。

朱家雄学前教育研究：<http://www.zhujx.com/>

◎ 遊びを通して学ぶ力を 子どもはもともと備えている

幼児教育において、保育者は子どもの遊びにかかわるべきか否か。これについての議論は以前から世界中で繰り返し行われてきたし、今後も続くだろう。簡単には答えを見いだせない難しい問題であり、非常に重要な論点であるからである。今回、改めて考察したい。

初めに確認しておきたいのは、たとえ大人がかかわらなくても、子どもは遊びを通して学んでいくということである。

アメリカの幼児教育研究者Rhoda Kelloggは、世界各国の2歳頃から6歳頃までの子どもが描いた150万枚以上の絵を観察し、大

半の子どもは保育者から指導されなくても、自然に絵を描く力を発達させていくことを明らかにした。図①に見られるように、どの子どもも年齢が上がるにつれて、なぐり描き、点と線とを交えた図形、人の顔の正面、人の全身の正面面というように、表現力を段階的に高めていく。さらに、4～5歳



図①

頃になると動物を横から描けるようになる。

— 図②参照

粘土細工や積み木でも、子どもが保育者の手を借りることなく、心身が発達するのに従って次第に複雑な形を作るようになることをさまざまな研究者が報告している。

— 写真①②

● 保育者がかかわった方が子どもの成長は促される

前節で見たように、子どもは遊びを通して自然に力を身につけていく。では、保育者は、子どもの成長にどのようにかかわるべきだろうか。自由に遊ぶ子どもをただ見守ればよいのだろうか。あるいは、何らかの形で遊ぶ子どもに手を差し伸べるべきなのだろうか。

1980年代の欧米では、子どもが自然に成長することを尊び、保育者や教師はなるべく子どもにかかわらないようにしようという意見が研究者の間で強まった。しかし、現在では、保育者や教師が子どもにかかわることが多くの国で重視されつつあるし、私も重視すべきであると考えている。自然な発達にただ任せるだけでは子どもの力の伸びには限界があること、換言すれば、保育者や教師がかかわった方が子どもの力が伸びることがわかってきたからである。

図③には、3歳6か月の子どもの数人が描いた絵を掲げている。左は保育者から何も



写真①

自由な状態で
子どもの発達レベル



写真②

教えられなかった子どもが自由に描いた絵、右は保育者の指導を受けた子どもが描いた絵である。右側の絵、保育者による指導のもとに描いた子どもの絵の方が、複雑な表現がなされている絵、言い換えれば、客観的に上手な絵と言うことができるだろう。

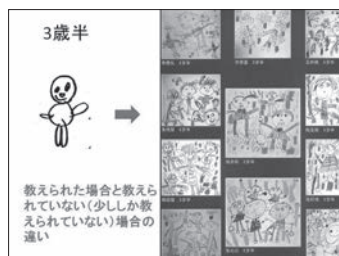
どの年齢の子どもの絵を観察しても、保育者に教えられた子どもの方が、教えられなかった子どもよりも複雑な、いわゆる上手な絵を描いている。つまり、子どもの個人差によってではなく、大人からの指導の有無によって表現する力に違いが生じているということである。

これは、粘土細工にも積み木にも当てはまる。— 図④参照 すなわち、子どもが1人で取り組むよりも、保育者の指導のもとに取り組んだ方が、いっそう複雑な、巧みな表現ができるのである。

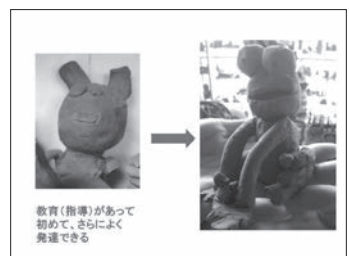
ただ、子どもが自分の力だけで描いた絵、作った粘土細工や積み木の方が良いという意見も、幼児研究者の間には根強く存在する。それこそが子どもの真の自己表現であり、保育者の手など借りずに、自然に自分



図②



図③



図④

の力を伸ばしていくことに大きな価値を見いだしているのである。

このように、子どもが独力で作った作品と保育者の指導を受けて作った作品の、どちらが好きか、どちらが子どもの作るべき作品かは、論者の抱く幼児教育観によって大きく異なる。もっとも、保育者の指導のもとに完成した作品の方が高度な表現がなされるということは、どの幼児研究者にも共通する見解である。そのことを示すエピソードを紹介しよう。

中国では、伝統的に保育者が子どもの遊びにかかわっている。子どもが自由に遊ぶことを重視する伝統を持つ、アメリカやイギリスなどの幼児研究者でも、中国の子どもが保育者の指導のもとに描いた絵、作った粘土細工や積み木を見ると、誰もが目を見張る。そして、「まるで芸術品のようだ」と口を揃える。つまり、異なる教育観を抱く論者からも賞賛され得る、客観的な特徴を備えているということである。保育者による指導の成果が大きいがわかるだろう。

子どもはもともと大きな力を持っている。それをさらに伸ばすためには保育者の力が必要だと、私は考える。すなわち、保育者は子どもの遊びをただ見守るだけではなく、遊びに手を差し伸べるべきなのである。

では、保育者はどのように手を差し伸べたらよいのだろうか。次節ではこれを検討したい。

● 保育者が子どもの遊びにかかわる際重視すべきポイントとは

保育者が子どもの遊びにかかわるにあたって心がけるべきことは、まず、子どもの意思を尊重することである。

アメリカの幼児教育研究者Rhoda Kellogg

による子どもの描画の研究などを挙げて前述したように、子どもは保育者がかかわらなくても、遊びを通して自然に多くのことを学ぶことができる。これは、自由に遊ぶことが楽しいからであると考えられる。楽しめる環境があつてこそ、子どもは学び得ると言っても良いだろう。したがって、子どもの意思を考慮せず、保育者の考えを押しつけるような指導をしても子どもは何も学ばないと考えられる。

指導する目的を持つことも、大切である。子どもにとって最も身近な社会人の一人である保育者には、知識と社会性を子どもにしっかり伝える責任もある。したがって、子どもの遊びにただかかわるのではなく、その遊びを通して、子どものどのような力を伸ばしたいのかをしっかりと考えるべきである。

子どもによって、興味を抱く対象などは異なるため、保育者には、子ども一人ひとりの個性に応じて、何の遊びによってどのような力を伸ばすのかなどをしっかりと計画して行ってほしい。6歳頃からは就学への準備として、ある子どもには読み書き、別の子どもには計算というように、子ども一人ひとりの適性に合った教科学習を見つけ、それに取り組むよう促すことも重要になるだろう。

このように保育者には、あくまでも子どもの主体性を尊びながら、自分の立てた目的に沿って子どもを導く遊び、つまりGuided playを行うことが求められるのである。

また、現代は通信技術の開発が進み、自分の部屋にいながらにして世界中の情報が手に入る。そのため、現在の子どもの頃、あるいは保育者の子どもの頃よりもずっと多くの情報に触れている。時代の違いを考慮し、Guided playにも新しい要素を取り入れるべきであると、私は考える。例えば、保育者の指導のもと、子どもがiPadを使って

行う遊びなどである。今も今後の社会でも求められる、情報通信機器を使う能力を鍛えることにもつながるだろう。

●子どもはGuided playを通して大きな達成感と自信を得られる

保育者によるGuided playによって、子どもの表現力が伸びるだけでなく、挑戦しようという子どもの意欲も高まると考えられる。これについて、積み木を例に考察してみよう。図⑤を見てほしい。右上の写真は子どもが保育者の教えを受けずに作ったヘリコプター、左の写真は同じ子どもが保育者の指導を受けて作ったヘリコプターである。

右のヘリコプターは単純な構造だが、完成させたとき、子どもは達成感を得ただろう。そして、「もっと大きく、実物に似せたヘリコプターを作ってみたい」という気持ちも抱いたはずである。もっとも、それを実践しようとしても、子どもだけの力では、構造がずっと複雑な左のヘリコプターを作るのは難しい。挑戦してもうまくいかないだろうから、そのまま保育者が何もしなければ、子どもが自信を失うことにもなりかねない。

しかし、保育者がアドバイスをしたり、一緒に積み木に取り組んだりすれば、子どもは左のようなヘリコプターを作ることができる。子どもは背伸びをして頑張っている



図⑥

るだけに、作っている過程で味わう興奮、完成時の達成感は、右上のヘリコプターを作ったときよりも何倍も大きいだろう。

これを繰り返していけば、子どもは表現力を伸ばすのはもちろん、努力したり工夫したりする楽しさを味わいながら、「やればできる」という自信をつけられるに違いない。何事にも立ち向かおうとする気持ちにもつながるはずである。

●Guided playによってこそ子どもの力は最大限に伸びる

どの子どもも、大人が想像するよりも多くのことを自然に学んでいる。Guided playは、子どもが生まれながらに持っている大きな力をもっと発揮できるようにするための手助けであると言えるだろう。

ただ、保育者が子どもの遊びにどの程度かかわるかは難しい問題である。かかわる割合は、少なすぎると子どもの力の伸びが少なくなるし、多すぎても子どもの自主性を損ね、やはり子どもの力は伸びにくい。また、前にも述べたように、人間には一人ひとりの個性がある。保育者が強くかかわった方がよい子どもも、保育者があまりかかわらない方が力を伸ばせる子どももいるだろう。したがって、保育者には、子どもの自主性を尊重しながら、自分が適切に子どもにかかわれるように、何を、いつ、どのように教えるかを、目の前の子どもに応じて考えることが求められる。

このように、子どもの自主性と保育者の指導のバランスについて、どの子どもにも共通する指標を見いだすのは困難である。幼児教育の永遠の課題と言っても過言ではないだろう。子どもに対する保育者のかかわり方についての議論は、簡単に答えを出せないと、私が冒頭に述べた所以である。

2-2-1

シンポジウム：東アジアの現場

国定基準からみた 台湾の幼稚園における「遊び」の位置づけ

翁麗芳

Wong Leefong …… 国立台北教育大学教授



教育博士、国立台北教育大学幼児と家庭教育学学科教授。現在は台湾の教育部幼保一元化以降における保育者の免許制度研究の課題責任者を務める。台北市で就学前教育の教員養成に携わりながら、幼稚園評価、養成プログラム評価のため、毎月1回台湾全島および離島へ出向き、現場指導を行う。台湾の早期教育過熱現象を、親・教育者・行政の3つの角度から観察、グローバル時代における子どもの教育とケア政策のあり方を研究テーマとしている。共著に、『子育て支援の潮流と課題』（ぎょうせい）など多数。

● 幼稚園と託児所が一元化され、「幼稚園」になった

台湾の近代的な幼児教育は、日本統治下の1897年に幼稚園がつくられたことに始まる。ここから1945年までは、遊びを通して子どもを育てるという日本的な幼児教育が行われていた。1945年以降は、保育者が子どもを教え導くという中国的な幼児教育が国民政府によって行われている。ただ、遊びを尊ぶ気質も残っているため、日本の特徴と中国的特徴の両方を備えていると言うことができよう。

台湾では2012年1月に幼稚園と託児所が一元化され、「幼稚園」となった。これに伴い、幼稚園を管轄する機関である教育部では、近年の幼児教育、特に私立幼稚園での

教育が保育者による教科学習指導に偏っていたことを反省し、遊びを充実させながら、子どもの主体性を尊重した学びを進めようとしている。「遊びの中で学ぶカリキュラム」「生活に即したカリキュラム」「課題設定型カリキュラム」などが策定されたことは、その表れであるといえるだろう。

幼保一元化を実現するにあたり、教育部は、保育者の指導、教具や玩具、図書の質と量などについて40以上の国定基準を設け、1～5年に1回、これに照らしてすべての幼稚園を評価するようになった。——表①参照

「基礎評価」「專業認定評価」「追跡評価」の3つがあり、後二者は「基礎評価」を通過して初めて受けられる。——表②参照

「基礎評価」を通過しなかった幼稚園については、一定の改善期間を置いてから再評

表① 幼稚園に関する法令の例

法令名	概要
幼稚園教保活動課程暫行大綱	幼稚園教育の基本原則を定めている。日本の幼稚園教育要領や保育所保育指針に相当する。発達心理学の研究者らが中心となって作成
幼稚園教保服務実施準則	幼稚園の始業・終業時刻、休暇期間などを定める
幼稚園評鑑辦法	全ての幼稚園が国定基準による評価を受ける必要があることを定める
教育部幼稚園課程与教学品質評估表	幼稚園のカリキュラムや教育の質についての評価指標。台北市立大学の幼児教育の研究者が作成

表② 幼稚園に対する評価

評価名	概要
基礎評価	設立経営、財務管理、教育とケア活動、人事管理、飲食と衛生管理、安全管理などを評価
專業認定評価	園務リード、資源管理、教育とケア、活動過程、評価及び指導、安全と健康、家庭と地域などの類別のうち、幼稚園の教育とケアという専門性の質に当てはまる項目について評価
追跡評価	基礎評価の未通過項目に対する追跡評価

価を行い、それでも改善されていなければ、処罰の対象となる。

私は、学びにおいて遊びは重要な意味を持つと考えている。そのため、教育部が遊びを重視する方針を打ち出したことを、台湾の幼児教育が一步前進したと評価する。ただ、多くの保護者は、教科学習に力を入れてほしいという気持ちを依然として強く抱いているようである。また、教育部の方針では遊びに保育者が介入する割合が高く、私は子どもの自主性をもっと尊重してもよいのではないかと感じるが、評価制度がある以上、それを実行するのは難しいに違いない。

このように台湾の幼児教育には課題もあると、私は考えている。以下、幼稚園でどのような学びと遊びが行われているか、具体例を挙げながら見ていこう。

● 多くの保護者は 教科学習指導を望んでいる

保護者は、幼稚園に対して何を期待して

いるか。まず、これを検討してみたい。

台湾の有力紙『聯合晚報』の幼稚園の授業に関する記事(2012年9月10日付)を紹介しよう。台北市のある公立幼稚園では、2012年度、4歳児と5歳児の合同授業のカリキュラムを2011年度のカリキュラムと同じにすることにした。「幼稚園とは知識ではなく技能を学ぶ場所であり、小学校などと違って授業に一定の進度を設ける必要はない」「カリキュラムが同じであっても、例えば切り絵であれば、4歳児は手で紙をちぎり、5歳児は鋏で紙を切るというように、活動の内容を変えればよい」という教育部の方針に沿ったためである。ところが、同幼稚園の5歳児の保護者からは、「5歳児が4歳児の時と同じ授業を2年間続けて受けることになる」「5歳児には新しいことを学ばせてほしい」といった不満が聞かれるという。

一方、公立幼稚園に比べれば教育部の指導から自由になれる私立幼稚園では、4歳児は4歳児のカリキュラム、5歳児は5歳児のカリキュラムというように、年次ごとに学習内容を分け、授業にも一定の進度を

設けている。教育部はこれを幼児教育として正常ではないと見て、今後改めるように指導していくとしているが、保護者には私立幼稚園の教育の方が好ましいと考える人の方が多いと、私は感じている。複数の年次で同じカリキュラムに取り組むことがある公立幼稚園の教育を「冷めたチャーハンの温め直し」と揶揄した言葉が、保護者の間で流行しているからである。

これらの例からは、教科学習を重視してほしいという保護者の心情が強いことが見て取れるだろう。

● 幼稚園でも教科学習指導は依然として続いている

幼児教育の方針を遊び重視にするという教育部の方針転換は、教科学習指導を否定することを意味しない。そればかりか、教育部は、教科学習指導についてはこれまで通り高い水準を維持していくとしている。そして、実際、どの幼稚園にも保育者による教科学習指導は多く見られるし、保育者がどのような教育に力を入れて指導すべきかも法令で定められている。

例えば、「語文」、言語教育である。都市部の幼稚園では台湾の公用語である北京語の学習指導、山間部の幼稚園では、北京語だけでなく、閩南語や客家語など、その地方の民族の母語の学習指導にも熱心に取り組んでいる。保育者と保護者が子どもに絵本を読み聞かせるイベントや、保育者による子どもの毎日の活動記録なども、都市部、山間部を問わず大半の幼稚園で行われている。こうした教科学習指導に対しては、保護者の満足度は高いと考えられる。

また、私は授業を見学していて、保育者の学習指導力は私立幼稚園よりも公立幼稚園の方が高いと感じる。公立幼稚園の保育

者は全員が政府機関採用試験の合格者、つまり国家資格保有者であるが、私立幼稚園の保育者には国家資格を持たない人もいることが、学習指導力に表れているのかもしれない。

教育部は、保育者が大学などに通学し、国家資格を取得できるように、私立幼稚園に補助金を支給するようになった。私立幼稚園の教育全体の質を高めようとしているのであろうが、保育者の学習指導力を高めようというねらいも大きいのではないだろうか。

● 台湾と日本との幼児教育観の違い

子どもは自主的な遊びを通して多くのことを学び、心身ともに成長していく。これは、今や多くの国で幼児教育に携わる者の共通認識である。台湾の保育者も、なるべく子どもの自主性を尊重したいと考えている人が大半であることを、私は研究を通して知っている。

ただ、先にも述べたように、国民政府は、従来、保育者が子どもを教え導く幼児教育を進めてきた。そのため、保育者の重要な役割は「教学」、つまり授業であり、これを上手に行うことができこそ立派な保育者であるという幼児教育観は、保育者の間にも根強く存在する。

例えば、台湾の幼児教育が重視することの1つ、道徳・品格教育を見てみよう。子どもが道徳や品格の大切さを学べるような寓話などを載せた学習用の絵本がたくさん出版されており、これを保育者が子どもに読み聞かせる幼稚園が多い。読み聞かせた後、保育者は、絵本の内容について道徳的に良いこととは何か、悪いこととは何かを子どもに尋ねる。そして、子どもが正しく

答えられれば、それで道徳・品格教育をしっかり行ったと考えることが多いと、私は感じている。

伝統的に子どもの自主性を尊ぶ日本では、保育者は、遊びや子ども同士のトラブルなどを通して、すべきことやすべきでないことに子どもが自分で気づけるように促すのではないだろうか。

また、どの幼稚園でも保育者と子どもとの集団



図① 図①参照 討論がさかに行われている。—— 図①参照 遊びの中で何に気づいたか、明日はどのような遊びをするかなどについて、子どもが自分の考えを述べてから、必ず保育者がまとめる。子どもは自由に意見を交換しているが、保育者が強くかかわっていることがわかるだろう。

日本の幼児教育では、台湾のような集団討論はあまり行われていないと思う。台湾の保育者の多くは、日本の幼稚園や保育所を見学すると、集団討論をしないことに驚く。そして、「日本の先生方は何もしていないではないか」と口を揃える。台湾と日本との、子どもに対する保育者のかかわり方の違いを象徴しているといえるだろう。

● 幼稚園での遊びは Guided play と呼べるか

ある公立幼稚園の保育者は、学びにおける自主的な遊びの重要性を十分に認識しながらも、それはあくまでも理想であるとして、次のように述べる。「何を使ってどのように遊ぶかなど、遊びの内容も仕方もすべて子ども自身が決めた方が、遊びを通して

得られる気づきは大きくなるでしょう。自由遊びこそ、理想的な遊び方であると、私は考えます。ただ、子どもの力を伸ばすためには、保育者による系統的な指導が必要なのではないでしょうか」と。つまり、保育者は意図的に遊びをガイドしているということである。これは、公立、私立を問わず、あらゆる幼稚園の保育者に共通する見解であると、私は考えている。

このような幼稚園での遊びは、Guided playなのかどうか。その判断は難しいが、私としてはGuided playと呼ぶことに違和感を覚える。子どもに対する保育者のかかわり方が強すぎると思うからである。ただ、Direct instructionと呼ぶにはかかわりが弱いだろう。台湾の幼児教育における遊びの特徴をしっかり把握できるように、今後さらに研究を続けたいと考えている。

2-2-2

シンポジウム：東アジアの現場

「遊び」を通して「学ぶ」： ～教育神経科学の視点から～

周 念麗

Zhou Nianli …………… 中国華東師範大学教授



華東師範大学就学前教育学部心理研究室主任、教授。1995年にお茶の水女子大学心理学士号、1998年に東京大学大学院教育学修士号、2003年に中国華東師範大学心理学博士学位を取得。2004年6月～12月、米国Arizona State University客員研究員として乳幼児の情緒発達、2006年5月～2007年3月、国際交流基金フェローとして名古屋大学で統合保育について研究。研究領域は児童心理、親子関係、0～3歳児の多元知能の測定と育成方案。主な著作は、『就学前児童の発達心理学』『就学前児童の心理健康と指導』『自閉症児の社会認知—理論と実験研究』『就学前特殊児童の統合保育における比較と実証研究』『0～3歳児の多元知能の評価と育成』など。

● 都市部に見られる 幼児教育の変化

近年、中国では幼児教育の仕方に変化が見られる。1949年の建国以来、旧ソ連の教育思想の影響のもと、保育者による教え込み型の幼児教育を行ってきたが、1990年代末頃から子どもの自発的な学びを重視する教育理念が幼児教育研究者によって紹介されるようになった。これを支持する保育者には、従来の教科学習指導から、子どもが遊べる環境をつくり、子どもを見守り、支援することへというように、保育者の役割をも変えていこうとする動きが見られる。

保育者の役割の変化は、上海などの都市部の保育所・幼稚園に既に現れている。保育者は教科指導を行う割合が低くなり、子

どもの自主性を尊重しながら、遊びのガイド、Guided playを行う割合が高くなっているのである。

● どのようなGuided playが 中国で行われているか

中国のGuided playでは、保育者の立てた教育目標に沿って、教室や屋外の敷地にそれぞれ遊びのコーナーを設け、そこにさまざまな関連遊具を置くことが多い。好きな遊具を用いれば、子どもはもっと楽しく遊べるように自分で工夫するため、保育者に与えられた遊具をただ使う場合に比べて、子どもの気づきや学びが何倍にもなると考えられる。

Social pretend play（社会的なごっこ遊び）は、中国のGuided playの特徴の一つで

ある。これは、病院や銀行、スーパーマーケットなど、社会生活でよく利用する場所を保育者が段ボールなどで幼稚園の教室に再現し、そこで子どもが行うごっこ遊びで、都市部のほとんどの保育所・幼稚園が幼児教育に取り入れている。—— 図①参照

社会的なごっこ遊びの舞台として教室に再現されている場所について検討しよう。先に挙げた例のうち、病院で見られるのは金銭の間接的な授受関係だけである。しかし、それ以外は全て商取引を行う場所、つまり金銭の直接的な授受関係が見られる場所である。こうした場所が遊びの一環として多くの保育所・幼稚園で再現されているのは、政府の経済政策を反映しているのではあるまいか。すなわち、社会的なごっこ遊びが行われていることは、1970年代末から改革開放政策を展開し、全国的に経済を非常に重視してきたことと密接な関係があると、私は考えているのである。

● 子どもは社会的な ごっこ遊びを通して多様な 人間関係を仮想体験する

保育者による指導が中心となる従来型の幼児教育と比べて、子どもの自主性が尊ばれる社会的なごっこ遊びには、どのような利点があるのだろうか。以下で教育神経科学の知見に基づいて解析したい。

まず、子どもの大脳敏感期における利点を見ていこう。敏感期とは、大脳組織や機能が特定の外部刺激に対して非常に敏感に反応する時期を指す。この時期に経験したことは、大脳の神経回路の仕組みと機能を強固に、また精密にする。そのため、大脳敏感期の子どもが社会的なごっこ遊びを行えば、ごっこ遊びで設定される場面を持つ社会的意味、つまり、人間関係や商取引、



図①

金銭の授受関係などを理解しやすくなる。これは、将来社会に適応するための基礎にもなるだろう。

次に、子どものミラーニューロンの発達を促すという利点がある。ミラーニューロンは大脳の神経細胞の1つで、他者の行動を参考にし模倣するという人間の動作を司っていると考えられる。1992年、イタリアの脳科学者Giacomo Rizzolattiの研究グループは、サルの下前頭回(F5領域)についての研究を通して、サルが目的を持ってある動作を行ったり、動作に関連する音が聞こえたりした時に下前頭回(F5領域)の一部の神経細胞に放電現象が起きることを発見した。さらに研究したところ、この放電現象が起きる細胞には、観察者の大脳内に他者の動作を鏡のように映し出す機能があることがわかり、ミラーニューロンと命名された。社会的なごっこ遊びでは、子どもは大人の動作を模倣することに努めるから、ミラーニューロンはそれだけ刺激を受けることになり、発達も促されると考えられる。

続いて、子どもの大脳の、言語に対する感覚と数に対する感覚の発達を促すという利点について、2つの側面から考えてみたい。

人間にはブローカ野と呼ばれる脳領域があり、動作の模倣と言語コードの両方にかかわっている。このことは、動作模倣と言語理解の間に密接な関係が存在することを

示している。まず動作を模倣し、音声、語調を含む言語模倣へと進むというように、子どもの発達過程を推論することもできる。これが、1つ目の側面である。

また、子どもは生来、system of number sense（数感覚系統）を有しており、これが数字と数字に関連する知識の基礎をなすと考えられる。アメリカの脳科学者Christine TempleとM. I. Posnerの研究によって、低年齢の子どもが大人と同じように頭頂葉を用いて数字の比較問題を解こうとしていることが明らかになった。Christine Templeによる、脳波を用いた別の研究では、5歳児が、4は5より大きいか小さいかといった数の対比についての問題に取り組む時、頭頂葉の皮質が大人と同じように活性化していることが解明されている。これが、2つ目の側面である。

以上から、子どもは社会的なごっこ遊びを通して、言語交流と貨幣交換についての認知を高め、さらに大脳の言語と数に対する感覚の領域の機能も発達させていると考えられる。

最後に、幼児の「社会脳」を発達させるという利点について考察したい。「社会脳」とは、社会とのかかわりの中で、他者の目的や意図、信念、推測などを理解したり、観察したりする情報処理の機能を司る、社会認知の神経ネットワークであり、主に前頭葉眼窩部、側頭回、および扁桃体が含まれる。「社会脳」には、社会情報処理システム（ventral social-affective processing system, VSAPS）という領域があり、「社会脳」も人類社会のネットワークのように、大脳の中の各領域に分布して人間関係が互いに影響しあうネットワーク処理作用を受け持っている。社会的なごっこ遊びを通して、子どもは、銀行という場が設定されれば銀行員と顧客、病院という場が設定され

れば医師や看護師と患者というように、それぞれの場での人間関係を仮想体験することになる。他者の心の中の期待や感情を読み取る体験が求められるため、社会的なごっこ遊びは「社会脳」の発達を促すと考えられるのである。

◎ Guided playを中国全域に普及させていきたい

中国の幼児教育が保育者による指導からGuided playに変わることを、私は歓迎する。ただ、今のところ、変化が見られるのは都市部の保育所・幼稚園に過ぎず、農村部では大半の幼稚園では机に向かって算数や文字を学ぶといった指導型教育が行われている。— 図②参照 — この二極化を解消し、中国全体にGuided play、特に社会的なごっこ遊びを広げていきたい。

また、山間部への遠足や樹木の栽培など、自然を活用したGuided playも普及させるべきであると、私は考える。子どもが生命の尊さに気づいたり、自然科学に興味を持つようになったりするきっかけになるからである。しかし、自然環境に恵まれた農村部でさえ、こうしたGuided playを行う保育所・幼稚園は少ない。あらゆる子どもが秘めている、無限の力を引き出すために、今後、充実させていきたい。



図②

2-2-3

シンポジウム：東アジアの現場

「あー、楽しかった！ 明日もまた遊びたい！」 という保育を目指して

－若手保育者の「保育観と保育実践の差異」に関する調査から－

入江礼子

Irie Reiko …………… 共立女子大学教授



共立女子大学教授、OMEP（世界幼児教育・保育機構）日本国内委員会常任理事。専門は幼児教育・保育学。お茶の水女子大学大学院家政学研究科児童学専攻修了（家政学修士）。幼稚園教諭、母子愛育会家庭指導グループ（現愛育養護学校幼稚部）保育者を経て家庭に入る。3人の子育て後、保育士養成・幼稚園教諭養成大学等で教鞭をとる。現在、共立女子大学家政学部児童学科教授。主要著書に『育児日記からの子ども学』（共著、勁草書房）、『親たちは語る』（共編、ミネルヴァ書房）、『乳児保育』（編著、相川書房）など。

◎はじめに

保育とは、「あー、楽しかった！ 明日もまた遊びたい！」という時を紡ぎだすことであると言っても過言ではないだろう。保育者は、このように子どもたちが希望をもって、明日へと向かう姿を胸に刻みつつ、子どもたちとの生活を共にしながら「今」を充実させることに心を傾ける。

しかし、保育者であれば誰もがそのような時を紡ぎだすことが可能なのだろうか？ 保育の現実に目を向けると、保育の理想と保育実践には多くの乖離が存在する。果たしてその乖離を乗り越える道は残されているのだろうか？ ここでは我が国の保育の担い手である若手保育者に関する「保育

観と保育実践の差異」という調査から、若手保育者が保育と格闘する姿を浮かび上がらせていこうと思う。

◎調査について

本調査は我が国を含むOMEP（世界幼児教育・保育機構）のアジア・太平洋地域5か国（日本、中国、韓国、ニュージーランド、シンガポール）の共同研究“Survey of the Gaps among Teachers’ Beliefs, Pedagogical Knowledge and Actual Teaching Practice”（邦題：保育者の保育観と保育実践における差異について－経験年数2～5年の保育者を中心として－）の一環として実施された。日本における共同研究者は著者を含む7名

(上垣内伸子、小原敏郎、酒井幸子、白川佳子、内藤知美、吉村香、入江礼子)である。この調査に関する報告は2013年7月、中国・上海でのOMEP世界大会におけるシンポジウムで行った。経験年数が2～5年の若手保育者を選んだのは、我が国同様に共同研究に参加した国々の保育においても、若手保育者が保育の大きな担い手になっているという現状があったからである。

● 対象者および期間

対象者は都内および近郊の保育者（幼稚園教諭、保育士）。保育者の経験年数は2～5年とした。調査期間は2012年6～7月、著者らが幼稚園・保育所に調査協力を依頼し、質問紙を送付した。その結果、144名から回答を得た。

● 調査項目

調査では保育者が大切と思っていること（保育観）と現実のずれを測定する項目を作成した。質問項目は以下のとおりである。

質問1：「日々の保育の中であなたが特に大切だと思っていることはなんですか？」（自由記述で回答）

質問2-1：「質問1でお答えいただいた大切だと思っていることは、現在のあなたの保育においてどの程度行えていますか？」（4件法で回答）

質問2-2：「質問2-1で行えている理由、あるいは行えていない理由について」（自由記述で回答）

質問3：「今より何が変わればより良い保育

が行えますか？」（自由記述で回答）

● 分析方法

質問1、質問2-2、質問3の自由記述はKJ法*によって分類した。

* KJ法：データをカードに記述し、カードをグループにまとめて、図解し、論文等にまとめていく方法。

● 結果と考察

(1) 質問1

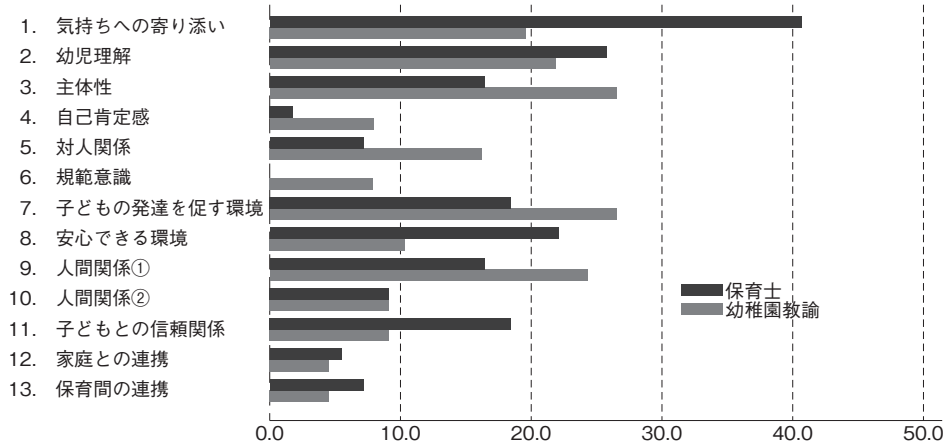
「日々の保育の中で保育者が大切に思っていること」について

自由記述の内容をKJ法によって分類した結果、「子どもへの理解（図①の1. 2.）」「発達の諸側面（図①の3. 4. 5. 6.）」「保育環境（図①の7. 8. 9. 10.）」「信頼関係・連携（図①の11. 12. 13.）」という4つの大カテゴリーと13の小カテゴリーが抽出された。このうち多かった「子どもへの理解」「発達の諸側面」「保育環境」という3つの大カテゴリーは、我が国における現行の幼児教育・保育の枠組みである幼稚園教育要領・保育所保育指針において重要とされていることとも合致していた。

次に、「保育の中で保育者が大切に思っていること」についての幼稚園と保育所の比較を行ったところ、以下のグラフに示される結果を得た。—— 図①参照

幼稚園教諭の回答数が保育士より多かったものは「3. 主体性（記述例：子どもが目的を持ち、主体的に活動すること）」「4. 自己肯定感（記述例：子どもが自信を持ち、自己肯定感をもてるようにする）」「5. 対人関係（記述例：子どもが人とのかかわりを通してさまざまなことを経験すること）」

図① 日々の保育の中で保育者が大切に思っていること



「6. 規範意識（記述例：挨拶など基本的な作法を身につけること）」「7. 子どもの発達を促す環境（記述例：幼児の生活に無理のないよう、また経験が偏らないよう、長期的な見通しをもった上で日々の保育を計画し、実践していくこと）」「9. 人間関係①（保育者自身の表情や行動見本）（記述例：あなたのことが大好きだよ、あなたのことを見ているんだよ、と伝わるような優しい表情や言葉かけを意識している）」であった。このなかで「3. 主体性」、「4. 自己肯定感」、「5. 対人関係」、「6. 規範意識」は大カテゴリー「発達の諸側面」に含まれている。このことから、幼稚園教諭は保育士に比して「発達の諸側面」をより大切にしているのではないかと考えられる。

一方、保育士の回答が幼稚園教諭より多かったものとしては「1. 気持ちへの寄り添い（記述例：子どもの気持ちに寄り添い、共感し、励まし、慰め、心の拠り所となるようにかかわること）」「8. 安心できる環境（記述例：保護者と離れて過ごす子どもたちにとって、それぞれの気持ちを受け止めて安心して過ごせるように、人的・物的環境を整えている）」、「11. 子どもとの信頼関係（記述例：子どもの一人ひとりとじっくり応

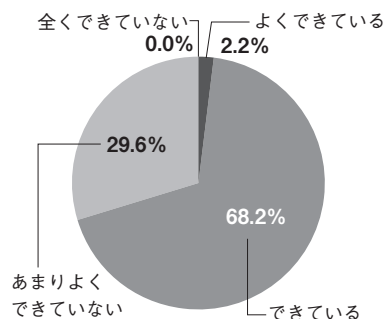
答的にかかわり、スキンシップを図ること）」であった。これらの結果は、保育所保育指針にもあるように保育所保育においては「養護と教育の一体化」が必要であるとされていること、さらに「養護」の部分は「教育」の土台になるため、保育所においてはより重要とされていることを示していると考えられる。

(2) 質問2-1

「保育の中で大切に思っていることを行えている程度」について

— 図②参照

「日々の保育の中で大切だと思っていることを行えている程度」については、「よくで



図②

きている」(2.2%)、「できている」(68.2%)という肯定的回答が合わせて約7割と比較的高く、「あまりよくできていない」(29.6%)という否定的回答の約3割を大きく上回った。

(3) 質問2-2

「質問2-1で行えている理由、あるいは行えていない理由」について

肯定的内容の回答をKJ法でカテゴリー化した。具体的に見ていくと「保育への前向きな意識や取り組み（記述例：自己の保育への思いを意識した実践を心がけている）」、「一人ひとりの理解やかかわり方の工夫（記述例：子どもの発達、個性に応じたかかわりを心がけている）」といった保育者個人の意識という視点をもつものと、「職員の協力体制、園環境の充実（記述例：学年会で実態を話し合い、細かい週案を立てる中で経験内容や援助の仕方を考えている）」などの「組織のあり方」という視点をもつ者があることがわかった。また、行えていないと回答した保育者では、「自己の葛藤や力量不足の認識（記述例：発達が遅れていると思われる子がいて、その子に対する援助がま

だできていないところがあるため）」、「自分自身の時間や余裕のなさ（記述例：自分の思いと行為とのギャップに不安・葛藤を感じる）」、「職員間や園としての課題」を多く挙げていた。

さらに、幼稚園教諭と保育士で見ると、求める保育の実践が行えている要因としては、幼稚園教諭は、保育者自身の前向きな意識や取り組みを挙げ、保育士は、職員の協力体制、園環境の充実など、職場・園環境の要因を挙げているところに特徴を見いだせた。

(4) 質問3

「何が変わればより良い保育が行えますか？」について

— 表①参照

ここでもKJ法によって自由記述の内容を整理した。その結果2つの大カテゴリー、11の中カテゴリー、27の小カテゴリーを得た。大カテゴリーでは「自己に注目」と「自己以外に注目」に分類されたが、これは、より良い保育を行うためには保育者自身が積極的に変わろうとしている場合と、社会や職場など自分以外の要因に注目して、そ

表①

大カテゴリー	中カテゴリー	出現度数 N=129	(%)
自己に注目	1.ゆとり	23	(17.8%)
	2.連携力(人間関係力)の向上	22	(17.1%)
	3.保育意識の変革	25	(19.4%)
	4.保育力の向上	57	(44.2%)
	5.自己管理	4	(3.1%)
	6.経験を積む	3	(2.3%)
自己以外に注目	7.社会環境の改善	12	(9.3%)
	8.職場環境の改善	24	(18.6%)
	9.子ども環境の改善	5	(3.9%)
	10.保育内容の改善	4	(3.1%)
	11.コミュニケーションの改善	27	(20.9%)

れが変わることが必要だと考えている場合があるということである。中カテゴリーでは「経験年数を積み、教材研究を続け、子どもが必要としている経験について援助できるように手だてを増やしていく」といった内容を持つ「4. 保育力の向上」が全体の半数弱と最も多いことがわかった。保育経験2～5年の保育者にとっては「保育力の向上」が喫緊の課題となっていることがうかがえる。

また、幼稚園教諭と保育士の回答を比較したところ、幼稚園教諭では「保育力の向上」「保育意識の変革」「連携力(人間関係力)の向上」「ゆとり」という回答が多かった。一方、保育士では「コミュニケーションの改善」の回答が最も多く、「職場環境の改善」「保育力の向上」と続いた。両者には「保育力の向上」という共通点はあるものの、幼稚園教諭では自分が変わればより良い保育ができると考えているのに対し、保育士は自分というより職場環境などの「自分以外のもの」が変わらなければより良い保育の実現は難しいと考えていることがうかがえた。

●まとめ

今回の調査で、経験年数2～5年の保育者が自分が大切に思っている保育が行えていないとする割合は3割と比較的少なかった。しかしながら、この層が日本の保育の主要な担い手であることを考えると、これら保育者が抱える課題に対して十分な対応が必要であると考えられる。

これら若手の保育者が、求める保育を実践するためには第一に「保育力の向上」が鍵となる。その他、「コミュニケーションの改善」「保育意識の変革」「職場環境の改善」「ゆとり」「連携力(人間関係力)の改善」と続く。連携については、保育の内部要因である「保

育者」「保護者」「経営者」との連携が必要であるとの記述はあるが、保育を取り巻く外部要因である「保育政策」「社会の保育観」などの改善意識は必ずしも高くない。これは2～5年といった経験年数による結果であるのか、あるいは日本の保育者においては、保育を取り巻く外部要因に対して改善を求める姿勢が弱いのか、今後の、経験年数の比較や国際比較が求められる。

また、幼稚園と保育所という施設種別の比較からは、改善の方法について、幼稚園教諭は、自己に注目し改善に取り組もうとする傾向が高く、一方、保育士は、職場環境などの自分以外の「組織」「園のシステム」の変革を求める傾向が高いことが指摘できた。

2-2-4 パネルディスカッション

シンポジウム：東アジアの現場

panel discussion

司会●塘 利枝子 Tomo Rieko …………… 同志社女子大学教授

パネリスト●

周 念麗 Zhou Nianli …………… 華東師範大学教授

翁 麗芳 Wong Leefong …………… 国立台北教育大学教授

入江礼子 Irie Reiko …………… 共立女子大学教授

朱 家雄 Zhu Jiaxiong …………… 華東師範大学名誉教授

東アジアの 現場から

周念麗先生、翁麗芳先生、入江礼子先生の講演の後、上記3名に朱家雄先生を加えたパネルディスカッションが、塘利枝子先生の司会で行われた。

台湾の幼児教育の 現状について

塘● 最初に、3人の先生方のご講演内容について、会場の皆様から質問をいただければと思います。

Q1 翁先生はご講演で、現在の台湾の幼児教育について、保護者は歓迎しているが、自分は違和感を覚えるとおっしゃっていました。違和感があるのはどのようなことについてでしょうか。

翁● 保育者の指導が強く、子どもの自主性が十分に尊重されているとは言えないことです。

また、保育者の教育目標の立て方も不十分だと思います。例えば、教育部（幼稚園を管轄する機関）の指導により、多くの幼稚園では野菜だけを用いた料理を給食として出す「草食の日」を週1日設けていますが、なぜこの取り組みを行うのか、これによって子どものどのような力を伸ばしたいのかは、あまり検討されていないように感じます。

朱● 私も、翁先生に質問があります。台湾が打ち出した、新しい幼児教育の指導方針には幼稚園の評価基準が細かく設けられており、これに照らして幼稚園が審査されます。以前、アメリカがこれと似た教育政策を行いましたが、うまくいきませんでした。台湾ではどうでしょうか。

翁● 評価基準を設けることは、幼児教育の質を向上させるきっかけにはなるでしょう。ただ、保育者が審査に合格することばかりを意識し、子どもに目が向かなくなる危険性も秘めているはずです。

中国のGuided playは遊び時間の格差を解消する鍵

Q₂ 周先生に質問が2つあります。1つ目は、中国で今、Guided playがなぜ必要なのか。2つ目は、中国がどのような子どもを育てようとしているかということです。

周● 1つ目の質問からお答えします。中国の山間部の子どもは、都市部の子どもに比べて、遊び時間が大幅に短いことがわかっています。地方は高齢化が著しく、両親が共働きである割合も高いため、子どもは保育所・幼稚園から帰宅すると、祖父母の世話をしなければならず、遊ぶ時間がないのです。保育所・幼稚園で過ごす時間はどの子どもにも共通してありますから、ここでGuided playを行えば、限られた時



間に子どもの力を最大限に伸ばせるだろうと期待しています。

次に2つ目の質問、中国が育てようとする子ども像についてですが、これは、今、変わろうとしています。以前は教科学習に長けた子ども、つまり英語や数学の試験で良い成績を収める子どもでした。ところが、グローバル化が進む近年は、多様な価値観を持つ人々と円滑に意思を疎通できるように、コミュニケーション能力や社交性などを身につけた子どもの育成にも、力を入れるようになりました。社会的なごっこ遊びがさかんに行われているのも、このような政府の教育政策の転換を反映していると考えられます。

塘● 周先生に中国でGuided playが求められる理由について考察していただきましたので、入江先生には、日本でGuided playが求められる理由についてお願いいたします。

入江● 私が幼稚園に通っていた1950年代には、友だちと一緒に、近所の小学生であるお兄さんやお姉さんに交じ



って原っぱなどでよく遊びました。その中で社交性を身につけられましたし、ずるいこと、いけないことなども学びました。子ども同士の遊びを通して、良い社会勉強ができたと思います。

ところが、近年は異なる年齢の子どもが集まり、子どもだけで遊ぶ機会が少なくなっていると思います。逆に言えば、あらゆる遊びに大人がかかわることが増えているはずです。すると、大人、保育者はどのように子どもにかかわるべきかが非常に重要な論点になるわけです。

中国・台湾の幼児教育は今後どのように展開するか

塘● 日本の保育者は、子どもがなるべく自由に遊ぶ、言い換えれば子どもの自主性を最大限に尊重したGuided playを行っています。一方、中国や台湾の保育者の行うGuided playは、日本に比べると子どもの自由度が低いようです。

Guided playとは、子どもが生まれながらにもっている好奇心や探究心を伸ばせるように保育者がガイドする遊びです。最も大切なのは子どもの自主性であり、保育者の役割はあくまでも子どもを補佐することにあります。そういう意味では、中国や台湾よりも日本のGuided playのほうが、Guided

playの理想に近いと私は思います。

中国や台湾は、今後、日本のようなGuided playを行うようになるかどうか、翁先生、周先生、予測をお願いいたします。

翁● 台湾の保育者が日本のGuided playを見れば、子どもが自由に遊んでいる姿に目を見張るでしょう。ただ、私の講演でもお話ししたように、保育者は子どもを教え導くべき存在であるという認識が、台湾には根強くあります。そのため、日本のGuided playの長所を認めながらも、自分たちも実践しようとはしないような気がします。台湾の保育者は、現状でも子どもの自主性を精いっぱい尊重していると考えているはずです。

周● 中国の幼児教育では、この10年ほどの間に、子どもの自主性が尊重されるようになってきていることは間違いありません。幼児教育研究者によって、子どもが遊びを通して多くを学ぶという認識が、少しずつですが確実に、幼児教育の現場や保護者に広がっているためだと考えられます。

panel discussion

2-3-1

遊びの中に学びがある

学習の場としての遊び学習： 子どもの楽育教具と空間デザイン

張 世宗

Chang Shin-Tsung …………… 国立台北教育大学教授



アメリカ・ブラット学院 (Pratt Institute) 建築学修士、コロンビア大学芸術学修士、教育学博士、国立台北教育大学芸術及び造形設計学部教授。国立台北教育大学芸術及び造形設計学部の学部長、おもちゃとゲームデザイン研究所所長、国立台北師範学院視覚芸術教育センターのセンター長、シンガポールPractice Performing Arts School海外顧問などを担当していた。アイデア教育システムデザイン、クリエート・デザインの研究と教育の他、幼稚園と児童博物館などの学習環境のソフトウェア、ハードウェア、ファームウェアの開発と設計に従事し、国立美術館ゲーム室、永和遊芸屋など「楽育」学習空間と国内外数多くの児童ゲームショーの企画と広報に携わる。主な著作は、「楽育」(Edu-tainment)、「遊芸学」など関係論文の他、「玩・遊・戯」、「台湾伝統児童おもちゃ及び智能開発ゲーム」、「伝統科学技術とアイデア楽育」などの本、「玩物尚智」教材シリーズなどがある。

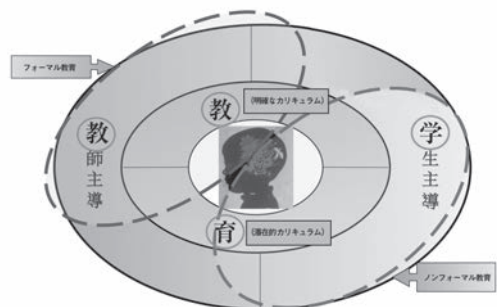
● インフォーマル教育の 長所について

「教」と「学」とは相反する概念であると、私は考えている。「教」とは、大人が主導する学習活動である。大人の立てた教育目標と教育計画に沿って学習活動を進めることが、子どもの「学びたい」という意思よりも優先されるため、子どもは学習活動に楽しさを感じるとは限らない。一方、「学」とは子どもが自らの「学びたい」という意思に従って行う学習活動であり、好きなことをしている時、あるいは遊んでいる時のような楽しさを伴う。

「教」はフォーマル教育 (Formal Education)、「学」はインフォーマル教育 (Informal Education) であると言うこともできるだろう。

— 図①参照

フォーマル教育では、学校教育における教師と生徒との関係に典型的に見られるように、大人は子どもに多くの知識を身につけさせることを目指す。効率を重視するため、大人の口頭での説明や子どもに配布する資料を通して、つまり、子どもの聴覚と視覚に訴えて知識を伝達する。子どもは短



図① フォーマル教育とインフォーマル教育の範疇

時間に知識を得られる半面、経験が間接的であるため、得た知識を忘れやすい。

これに対して、インフォーマル教育では、実際に体を動かしたり、手を触れたりすることを通して、子どもが主体的に知識を身につけることを重視する。子どもは知識を得るのに時間がかかるものの、経験が具体的であるため、得た知識を長く残すことができる。

● 幼児期には遊びを通して多くのことを学ぶ

インフォーマル教育の学習活動は、生活のさまざまなところに存在する。幼児期における代表例は、遊びである。幼児期は絶えず外界の影響を受けて学習する時期であり、こうした学習の多くは遊びを通して行われている。

ただ、生活の中で自然に生まれる遊びは自由遊び (Free play) であり、学習効果が高いとは限らない。そこで、大人には、子どもの自主性を尊重しながら、学びを意図した遊びを子どもが行えるように誘導することが求められる。あくまでも子どもが自然に「学びたい」と思えるように誘導するため、フォーマル教育の学習活動ではなく、インフォーマル教育の学習活動であると言えるだろう。

こうした遊びの鍵となるのは次の3つであると、私は考えている。

① 遊びの選択

遊びと学習のバランスが保たれた、「有意義な遊び」を選択できるように、大人が子どもを誘導するタイプである。遊びによっては、子どもが夢中になり過ぎて、限界効果が遊びの機能効果に影響を及ぼし、有益な活動を行う機会を排除するような、不利益をもたらすことがある。大人が誘導すれ

ば、これを防ぐことができる。

② 玩具・教具の開発

保育者の学習目的に応じて、効果的な学びが得られるような機能性玩具や教具が開発されれば、子どもは遊ぶ楽しさと学ぶ楽しさをともに感じられるはずである。開発にあたっては、保育者が子どものニーズを分析し、それを玩具・教具のデザイナーと共有することが重要である。

③ カリキュラム

特定の教育目標のもとにカリキュラムをつくり、それに沿って適切にプログラム化すれば、遊びは、目的のある、系統化され、組織化された学習活動となる。

● 教育と娯楽を融合した新たな教育概念「楽育」

子どもが遊ぶ楽しさを感じながら、より効果的な学びができるようなインフォーマル教育の学習活動について、私は研究を続けている。そして、教育 (Education) と娯楽 (Entertainment) の2つを融合した新しい教育概念、「Edu-tainment (楽育)」を提唱するに至った。台湾では、既に多くの施設で「楽育」が実践されている。

例えば、国立美術館には、子どもが友達と一緒に積み木などの遊具を使って遊べるコーナーを設けている。—— 写真①参照
遊具は全て、子どもの自発的な探索力や創作力などを伸ばせるように、幼児教育研究者が遊具デザイナーと話し合っって製作したものを用いている。

台北市親子センターには、映画やテレビドラマ、演劇の映像をスクリーンに映し、子どもがそれを見ながら舞台上で登場人物になりきって遊べるコーナーを設けている。—— 写



写真①



真②参照 演技芸術を、子どもが体験できるようにするためである。

このように、インフォーマル教育の1つである楽育では、手を触れる、組み立てる、演じるなど、子どもが体を動かして体感できる仕組みが整えられている。聴覚と視覚による学習に偏ることが多いフォーマル教育よりも、子どもは物事をずっと具体的に、深く、そして楽しく理解できるに違いない。だからこそ、前にも述べた通り、インフォーマル教育による学習では、子どもは学習後も長く、得た知識を身につけていられるのである。

また、楽育についての研究を続けるうちに、子ども同士だけでなく、年齢が大きく異なる者同士が遊ぶことの重要性にも気づいた。子どもと親や祖父母とが一緒に遊べば、子どもは親や祖父母から経験や知恵を学び、親や祖父母は子どもに教えることで、達成感を得られる。互いに交流を深めることにもつながるため、祖父母世代の生活経



写真②



験を孫世代に引き継ぐ方法にもなると考えられる。

● 工夫する楽しさに満ちた遊びを現代によみがえらせる「遊芸屋」

現代では、多くの子どもがパソコンやiPhoneなどのハイテク機器を使って遊んでいる。もちろん、そこで得られる学びも多いだろう。ただ、ハイテク機器が現れる以前の子どものほうが、楽しくなるように自分で遊びを工夫していたように思われる。1950年代、子どもの私の遊び道具は、川原の石や森の枯れ木などばかりだったが、それらを使って遊びながら、さらに面白く遊ぶためにはどうしたらよいかを、友だちと考えていた。

このような子どもの遊び、工夫する楽しさに満ちた遊びと、幼児教育や科学技術といった多方面の知見を統合し、現代に新た

によみがえらせ、さらに充実した楽育を行うことはできないだろうか。この理想を実現するために計画されたのが、玩具の開発・展示機関「遊芸屋」の設置である。

教育界の研究仲間や支援者の協力を得て、台湾新北市永和区に「遊芸屋」第1号館が完成し、すでに営業を始めている。来場者は、展示されている玩具全てを手に取り、遊ぶことができる。——写真③参照 子どもが親や祖父母とともに遊べるようにデザインされた玩具もたくさん展示されている。

展示品で遊べる玩具の博物館は、100年以上前にアメリカで生まれ、次第にヨーロッパや東南アジア諸国に広まった。「遊芸屋」は、台湾におけるその最初の試みである。幼児から高齢者まで「children of all ages(全年齢の子ども)」の学習者が、自分の手で操作したり、創作したりしながら楽しく学べる場である。運営面などの課題を克服し、今後さらに発展させていきたい。

● 幼児教育研究者同士の 国境を超えた交流を

近年、各国の幼児教育研究者の間で、遊びを通して子どもを育てることがますます重視されるようになった。例えば、日本では小林登先生と榊原洋一先生が率いるCRN (Child Research Net) は多くの先進的研究を世に問うているし、「東アジア子ども学交

流プログラム」のような、アジアの幼児教育研究者同士の交流の場でも、遊びと学びの関係について白熱した議論が行われている。台湾では、私が楽育を提唱し、「遊芸屋」の運営に参画するようになった。

子どもに、より楽しく、より深く学んでほしい。これは、全ての幼児教育研究者の願いである。話し合いの場や理論実践の場が、国境を超えて広がっていくことを期待する。

参考文献

張世宗 (1993)。『玩・遊・戯智慧の玩具・玩具的
智慧』。台北：太聯。

張世宗 (2002)。『童玩游藝與兒童文化』。于林文
宝 (編) 之兒童文学与兒童文化學術研討會論文集。
台北：万卷楼圖書出版有限公司。193p-229p。

張世宗 (2012)。『跨代樂育學習場域：社區型全
齡博物館的研究與設計』。国立台北教育大学主催の
『2012樂育樂活樂藝術与設計』 国際シンポジウムで
の講演。2012年12月7日。

張世宗 (2013)。『東アジア子ども学交流プログラ
ム報告書2013』。東京：Child Research Net。論文
のタイトル：從玩具到学具；从教育到樂育－童玩的
游藝研究与应用。2013.3. 43p-50p。

Dewey, J. (1916). Democracy and education. New
York: MacMillan.

Monigham-Nourot, P (1990). Looking at Children's
Play: A bridge between theory and practice. In
Klugman, E. & Smilansky, S. (Eds.) Children's play
and learning. NY: Teachers College.



写真③

2-3-2

遊びの中に学びがある

Playful Learningの情景

All you need is... Love, Passion and Playful Learning

上田信行

Ueda Nobuyuki …………… 同志社女子大学教授



同志社女子大学現代社会学部現代こども学科教授、ネオミュージアム館長。1950年、奈良県生まれ。同志社大学卒業後、セントラルミシガン大学大学院でM.A.、ハーバード大学教育大学院にてEd.M.および、Ed.D.を取得。専門は教育工学。Playful Learningをキーワードに、学習環境デザインとラーニングアートの先進的かつ独創的な学びの場をつくることに力を入れている。著書に『プレイフル・シンキング：仕事を楽しくする思考法』（宣伝会議）、『プレイフル・ラーニング：ワークショップの源流と学びの未来』（共著、三省堂）など多数。

● Playful Learningとは どのような学びか

Playfulとは、本気でものごとに関わっている時に感じる、あのワクワク・ドキドキ感のことであり、好きなことをやっている時に感じる興奮と楽しさである。ものごとを楽しくするのではなく、「楽しいことの中に、学びがあふれている」という考え方である。Playful learningとは、自分が周りの世界とどのようにかかわっていけば楽しくなるか、どのようにすれば周りの環境も巻き込んでPlayfulな状況を生み出せるかという考え方、アティチュード（姿勢）、振る舞いのことである。CRNでは、Playfulを「何かに熱中しているときの前向きな気持ち」といった意味に用い、子どもが自発的に学

びに向かうようになるためには、Playful spirit を持つことが大切であると提唱している。

● 大人が変化を楽しんでこそ、 子どもはPlayfulになる

子どもがPlayfulになることがいかに重要か。CRNでは1999年度から、このテーマに取り組んでいる。日本ではかなり早くから研究をスタートさせたと言ってよいだろう。

私がPlayful Learningについての研究に取り組むようになったきっかけも、99年にCRNのPlayfulをテーマにしたワークショップ「プレイショップ1999～プレイフル・スピリットを経験しよう！」の企画・運営に参画したことだった。このワークショップ

では、子どもが自主性や創造性を伸ばせるように、「つくって・かたって・ふりかえる」という活動を充実させた。内容についてはスタッフと検討を重ね、ワークショップ開催前日まで変更や微調整を行った。「子どもにも最大限のPlayfulを感じてもらいたい」。その一心で夢中になって準備をし、時間が経つのを忘れたことをよく覚えている。だからこそ、ワークショップ当日には多くの子どもの笑顔や楽しそうな表情を目の当たりにすることができたのだと思う。

どうしたら参加者に楽しんでもらえるかを常に考え、状況と対話しながら内容をリアルタイムに変化させ、その場で立ち上がってくるエキサイティングな場に寄り添っていくという主催者の姿勢こそ、Playfulなワークショップを実現するための鍵となる。CRNのワークショップの企画・運営に携わり、私はそう実感した。変化のない、予定調和型のワークショップでは、参加する子どもはもちろん、主催者である大人にもワクワク・ドキドキ感には生まれにくいに違いない。

現代は、デジタル化、グローバル化が進み、社会が大きく変化する時代である。変化を楽しもうとする姿勢は、今まで以上に重要となるだろう。

◎ 子どもをPlayfulにする ワークショップの例

近年、私が企画・運営に参画した、Playful Learningをテーマにしたワークショップを2つ紹介しよう。

①「BRICK3.0 ～PLAY PLAY PLAY～」

創造する楽しさを親子で感じてもらうワークショップである。

内容は次の通りである。腕や身体を使ってアルファベットを表すなど親子がさまざまなポーズをとり、その姿をカメラで撮影

し、画像を壁に映写する。親子はブロックで画像をなぞりながら、自分たちの姿を再現する。ブロックは一つひとつのパーツが大きいため、親子は体のカーブなどの細かな部分をどのように表現するかを考えることになる。そして、出来上がったブロックを写真に撮り、その連続した写真を使ってアニメーションをつくる。——写真①参照
子どもは見立ての達人である。この見立てる作業が、どのように創造性をわき立たせるかを考えるための実験的ワークショップである。



写真①

②自動車を楽しみにしよう

自動車メーカーからの依頼を受け、山梨県のキャンプ場で実施したワークショップで、3台のファミリーカーを楽器に変換して、ドアやボンネットを叩きながら演奏し、森の中で大合唱をするというワークショップである。内容を見てみよう。子どもたちが森を散策し、虫の鳴き声、落ち葉を踏む音、川の水が流れる音などをレコーダーに収録する。これをメディアアーティストがコンピュータに取り込み、データ化する。自動車にはセンサーが設置されており、車体に触れると、その情報がコンピュータに送られ、サンプリングされた音が再生される。子どもはこれを楽器とし、自分の歌に合わせて演奏する。演奏の後、子どもには未来の自動車をイメージした絵を描いてもらった。「木をのぼるクルマ」「サッカーのキーパ

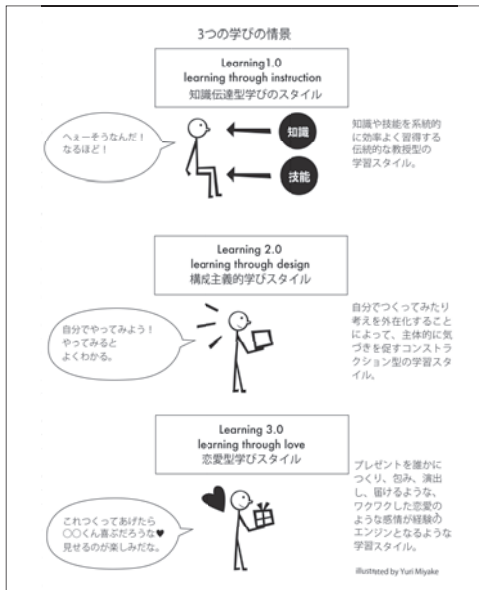
ーをしてくれるクルマ」など、どの子どもも自分の夢を見事に表現していた。

この2つのワークショップに限らず、私がワークショップを企画・運営する際は必ず、「楽しさの中に学びがあふれている」ということに子どもが気づき、Playful Learningを体験できるようにデザインしている。子どもの頃に楽しみながら学んだ原体験が少ないと、学びに対して「つらい!」「おもしろくない!」というネガティブなイメージを持ったまま、大人になってしまう。そうならないように、学びの楽しさを小さい頃から経験してほしいと願っている。

子どもに楽しむことこそ大切だと伝えるためには、一緒にいる大人も、心の底から楽しむということが欠かせない。そのため、大人にとっても魅力的なワークショップを心がけている。

● Playful Learningを実現する3つの学びの情景

学びにはさまざまなスタイルがあるが、3つの情景に分けて考えるとイメージが



図①

しやすい。それらは、①learning through instruction、②learning through design、③learning through loveである。—— 図①参照

①知識伝達型学びのスタイル

子どもに知識や技能を系統的に、教授する。教師の指導による学び、従来の学校教育での学びが、これに当たる。

②構成主義的学びスタイル

自分でつくってみたい、考えを外在化したりすることで、子ども自身に気づかせる。例えば、近年のワークショップ型学習に見られるように、子どもがグループでものづくりに取り組むなど、他者と協働し、対話をしながら行う学びである。

③恋愛型学びスタイル

このスタイルは上の2つとは少し違う視点から考えたもので、誰か特定の人や人たちに喜んでもらいたいと思って精一杯の準備と努力をしているときに起こる学びである。私たち大人の場合では、話をぜひ聴きたいと言われて招かれる講演会でのプレゼンテーションの準備や当日の発表で気付く学び、あるいは、病院で看護師さんやドクターが患者さんに喜んでもらいたいと思って日々接している時に発見する学びなどがこのスタイルである。好きな人に贈り物をする時の、あのドキドキ、ワクワクする気持ちが学びのエンジンになっているという意味で「恋愛型」と名づけた。図①では、子どものプレゼント作りの例を挙げている。何をプレゼントするか、それをどのように包むか、どのように渡すかなど、子どもが自分の思い描いた人を楽しませ、喜ばせるためにさまざまな工夫を凝らしている時の気づきや発見がパワフルな学びになっている。プレゼントをつくる子どもは、その作業自体に楽しさや喜びを感じているはずである。私は好きとか嬉しいとかが、これからの学びのキーワードになる予感がしてい

る。learning through loveはパワフルなコンセプトだと感じている。

● ドキドキ・ワクワク感を生む Playful Mindset

この「learning through love」を考え出すヒントをくれたのは、スタンフォード大学の心理学者Carol S. Dweckである。Dweckは、我々の行動に大きく影響する心理状態としてMindset（心の持ち方、心の姿勢）という概念を重視し、これを次の2つに分けて説明している。

1つ目は、Fixed Mindset。自分の能力を固定的に捉え、いくら頑張っても能力の伸びには限界があると考えるMindsetである。Fixed Mindsetの人は、仕事で困難な課題を依頼されると、「Can I do it?（自分にできるかな?）」と不安になり、「失敗したら他者からどう思われるだろうか」などとネガティブな発想にとらわれる。そのため、能力があっても、十分には発揮できないことがあると同時に、大切な学びの機会を失うことになる。

2つ目は、Growth Mindset。磨けば磨くほど自分の能力は伸びると考えるMindsetである。Growth Mindsetの人は、困難な仕事を与えられた時、これはチャンスだと思う、「How can I do it?（どうやったらできるのかな?）」と、ポジティブに考える。そのため、能力を十分に生かすことができ、さらには能力を伸ばせることも多い。

このように、人間は課題を与えられた時、Fixed MindsetかGrowth Mindset、どちらのMindsetを選択するかによって、不安を感じてやめてしまうか、挑戦してみようと一歩踏み出すことができるかが決まってくる、というのがDweckの考え方である。

私はこの2つの考え方に付け加えて、他

者への気持ちがエンジンになって行動を誘発するPlayful Mindsetというモチベーション・モデルを考えている。

Fixed Mindsetの人は自分が他者からどう思われるかという気持ち、Growth Mindsetの人は自分がどうしたいかという気持ちが心理の大部分を占める。これに対して、Playful Mindsetの人の心理は他者、しかも特定の他者を喜ばせたいという気持ちで満たされる。つまり、「How can I make you happy?（どのようにしたらあなたを喜ばせることができるか）」と考えるわけである。すると、驚かせたい、喜んでほしいという気持ちいっぱい、ワクワク・ドキドキしながら課題に取り組めるだろうし、その過程で学ぶことも多くなると私は考えている。相手に感謝される喜びが次はもっと喜ばせたいという行動へと繋がっていく。私はこれを「喜びの循環モデル」と呼んでいる。

● 教育に社会に Playfulを広げるために

オーケストラの指揮者は、聴衆のために夢中でタクトを振る。この指揮者のように、特定のオーディエンスを楽しませ、喜ばせたいという情熱を持って学ぶ姿勢が、学びには欠かせない。本気でものごとにかかわっている時に感じる、あのワクワク・ドキドキ感がPlayful Learningの正体である。

今後、Playfulな学びや、Playfulな生き方、働き方を社会に広げられるように、私は実践的な理論やモデルの構築、ワークショップの企画・運営に力を入れていきたいと思っている。Playful Learningと言わなくても、Learningと言うだけで、「学びって楽しい!」と子どもたちが感じてくれる社会が、1日も早く来るよう、微力を尽くしていきたい。



Chapter

第三章

遊びの質を高める保育のあり方 (現場の声を聞きながら)

- 3-1-1 遊びの質を高める保育のあり方
- 3-1-2 パネルディスカッション
- 3-2 園種別ワークショップ：
「遊びが学びの保育」の実現を阻むもの
- 3-3 フリーディスカッション
現場と専門家の議論：
「遊びが学びの保育」の実現に向けて

3-1-1

遊びの質を高める保育のあり方

遊びの質を高める保育のあり方

河邊貴子

Kawabe Takako …………… 聖心女子大学教授



聖心女子大学文学部教育学科教授。教育学博士。東京都公立幼稚園において12年間教諭として保育に携わった後、東京都教育委員会指導主事などを経て、現職。主な研究テーマは、保育記録のあり方や遊び援助論。日本保育学会理事、「幼稚園における道徳性の芽生えを培うための事例集」作成協力者などを歴任。主な著書に『保育記録の機能と役割～保育構想につながる「保育マップ型記録」の提言』（聖公会出版）など。

◎ 遊びを中心とした幼児教育をどう浸透させていくか

子どもにとって遊びが重要なことに異論がある人はいないだろう。しかし、目に見える成果を求める風潮や園児獲得のための方策の優先、また遊びの意義が理解されにくいことなど、さまざまな理由により、遊びを中心とした幼児教育は必ずしも定着していない。

だが、ここで改めて、子どもにとっての最善の利益は、豊かな遊びによる日々の生活の充実だと強調したい。それを実現するためには、どのような生活や教育が必要であるか、今一度熟考する必要があるだろう。

私は多くの園内研修会に参加しているが、保育における遊びの位置づけの問題については、3つに大別できると感じている。

1つ目は、遊びを教育内容として位置づ

けてはいるものの、保育者間で遊びの質の捉え方が共有されていないタイプである。既存の幼稚園や保育所が統合された形の認定こども園に顕著で、保育者間の考え方のすり合わせができておらず、環境構成や援助の手立ての個人差が大きいといった問題が見られる。

2つ目は、「遊びは子どもの自発性によるもの」という考え方をはき違え、「放任」しているタイプである。保育者が、子どもが遊びの中で経験していることを読み取って援助しないので、子どもは同じ遊びを繰り返すことが多く、遊びが停滞している。

3つ目は、遊びを教育内容と捉えず、「休み時間」的に扱うタイプである。教育とは保育者が一斉に教授するものと捉えているので、子どもが遊びのテーマや場、仲間を自己選択し、課題解決に向かう活動に価値がおかれぬ。そのため、子どもの能動性

が発揮される場面は限りなく少ない。

3タイプいずれかに属する園が少なくない現状で、遊びの重要性を浸透させるためには、遊びと学びの関係性を十分に説明する必要があるだろう。

遊びの中で子どもの内面の変化を観察すると、遊びと学びの原理は重なっていることに気づく。子どもは、初めから明確な目標を持って遊ぶのではない。対象とかわる中で、次第にやりたいことの方が明らかになり、見通しを持って遊びを展開させていく。これは「混沌」の中に「秩序」を見出す営みであり、「学び」そのものといえよう。

遊びの重要性を説く上では、目の前の子どもの姿を通して語るだけではなく、将来的な有用性を説明することも大切である。これについては、既に多くの研究により根拠が示されている。一例を挙げると、鳥取大学の研究「すくすくコホート鳥取」では、幼児期からの追跡調査により、社会性や学力などの観点から幼児期の遊びの重要性を指摘している。また就学前に十分に遊ばせることが、いわゆる受験学力を高めると指摘する研究もある。受験学力が価値判断の基準として妥当かどうかは議論を要するが、今の社会では一定の説得力を備えていることは確かだろう。

● 子どもは遊べば遊ぶほど能動的な学び手として成長する

次に、遊びを掘り下げて考え、援助のあり方を探っていこう。

遊びの定義は、「自発性（自分からすること）」「自己完結性（満足するまですること）」「自己報酬性（「楽しい」という感覚など自分に報酬を与えること）」の3つに集約されることが多い。しかし、これらだけでは、一

日中テレビゲームに没頭するケースも当てはまるため、他の要素も合わせる必要があるだろう。それが何であるかは、遊びの構造を考えると、自ずと見えてくる。

遊びとは、「できるだろうか」という緊張感と、「できた！」という解放感を交互に味わいながら、ある種の能力や見通しを獲得するプロセスと言える。出発点は興味・関心を持った身近な環境とのかかわりであり、遊び手の自発性に支えられて展開していく。

自発性は、面白い・楽しいといった「快」の感情と分かちがたい。子どもは遊びをもっと面白くしようと、ヒト・モノ・コトに主体的にかかわろうとする。かかわりが深まるにつれ、遊びの面白さは増し、興味・関心がさらに高まるという循環が生まれる。この繰り返しにより、子どもは発達に必要な経験を積み重ねていく。そして、遊べば遊ぶほど能動的な学び手として成長し、その後の成長を支える土台がつけられていくのである。こうしたプロセスの深まりが、今回の主題である遊びの質の高まりと言ってよい。

遊びはパターン化により停滞するため、随時、新奇性を取り込み、より面白くするプロセスが重要になるが、それは子どもの力だけでは難しく、大人の援助が必要になる。そこに保育者の最大の存在意義がある。

保育者に求められるのはまず、遊びが幼児教育の中核であり、遊びの質を高めることが子どもの発達の保障につながるという認識を持つことだ。その上で子どもがヒト・モノ・コトにどうアクセスしているかをよく観察、理解し、その延長上に援助の可能性を見出し、環境をデザインする必要がある。

● 遊びの志向性の延長に援助の可能性を見出す

そうした援助がどのように行われるべき

か、実践を交えて説明しよう。

記録的な大雪に見舞われた後、神奈川県
の私立幼稚園を訪問すると、子どもたちは
園庭で雪遊びを楽しんでいた。さまざまな
遊びが展開されていたが、5歳児のグル
ープは屋外に置かれたマットの型によっ
てきた雪のかたまりを発見し、一人の「マ
カロンみたい」という言葉をきっかけにマ
カロンづくりが始まった。様子を見守っ
ていた保育者は、ある子どもの「マカ
ロン屋さんをしよう」という言葉に反
応し、絵の具を提案した。保育者のね
らい通り、子どもたちは色付けに夢中
になり、「これはストロベリー・マカ
ロンね」などと遊びを展開させた。—
写真①参照

他にも、雪を投げるなど体で楽しんで
いたグループのそばでは、保育者が共
感を示すことで、子どもたちが安心
して没頭していた。また、かまぐら
づくりやソリ遊びでは、子どもたち
の遊びに対するほんやりとしたイメ
ージをはっきりとさせる言葉をかけ
たり、技術的に難しいことを手助け
したりして、遊びの志向性の延長に
援助の可能性を見出していた。雪と
いう偶発的な出会いから、子ども
たちが遊びをいかに多様に展開
させたかを示したのが図①である。

保育者の適切な援助があったからこそ、
遊びをこのように豊かに展開した。保
育者は子どもが遊びの中で目指して
いることや

体験をしていることを十分に読み取る。
その上で、子どもの達成感を重視し、
どう足場をかけるかを考えることが、
遊びの質を高めるためには極めて重
要である。

●自ら遊びの中に入り 遊びの輪郭を明瞭にする援助

次は一人の子どもが目の前興味のある
ものに入り込んでいく様子を見てみよ
う。

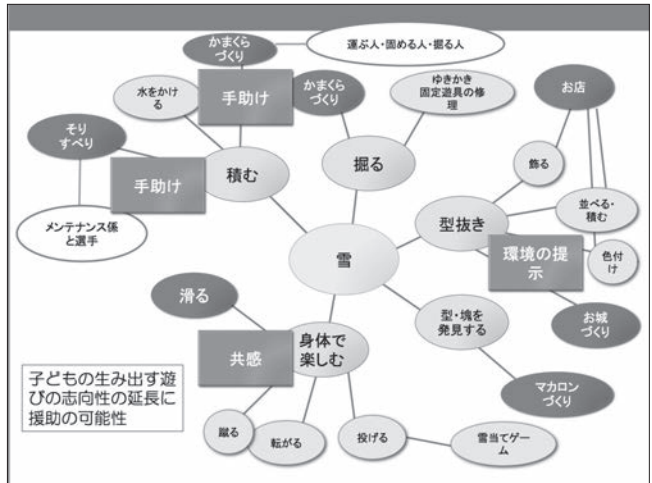
H児は、一人でコマ遊びをしていた
が、それは本当にやりたいことでは
なかったようだ。保育室に二人の子
ども（A児とB児）が入って来て、「
本屋さんごっこをやろう」と、積み
木でお店を作り、本を並べ始めた。
保育者がA・B児に「すごいね」と
声を掛けるのを聞いたH児は、静
かに本屋作りの手伝いを始めた。

保育者は、本屋ができたタイミング
を見計らってお店に入った。そして
「図書館カードを忘れたわ」と言
うと、H児が「ここは本屋さんです」
と反応。—写真②参照 保育者が
「そしたらお金を作るね」と製作
コーナーに移動すると、H児はレ
ジを作り始めた。「自分もやりたい」
と、はっきりと言わないが、も
っと積極的にかかわりたいよう
だ。

その間、A・B児は、「本屋でク
ッキーが食べられるようにしましょう」
と、クッキーづ



写真①



図①

くりに移った。レジを完成させたH児は、「いちごクッキーはどう？」などと話しかけ、次第に活動の中心的な役割を担っていった。

— 写真③参照

H児の姿を通して、遊びに能動的にかかわる過程で、ヒト・モノ・コトへのかかわりが深まっていく様子がよく分かる。さらに遊びの中で「次はどうしようか」という自己課題が生み出され、協同性も深まっている。こうした遊びの背後には、自ら遊びの中に入り、徐々に遊びの輪郭が明瞭になるようにした保育者の援助がある。

●生活や遊びに連続性を持たせる

それでは、保育者はいかに具体的な援助

の手立てを講じればよいのだろうか。

私自身が保育者として現場にいた頃、豊かな遊びの展開に必要な要素として「遊び課題」と「他者とのかわり」という2つの軸を設定し、子どもを捉えていた。一人ひとりの子どもが、2つの軸のどの位置にいるかを記録したのが図②である。これを「グリッド型記録」と命名した。

4つの象限は、次のように分類できる。

■第1象限 仲間とのつながりを楽しみ、遊びに共通のイメージを持てる。遊びが停滞すると、イメージを出し合い面白くしていく。

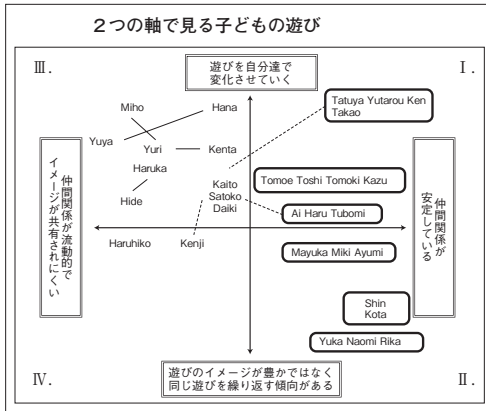
■第2象限 友達関係は安定しているが、遊びを面白く作り変える経験が少なく、



写真②



写真③



図②

同じ遊びを繰り返しやすい。

- 第3象限 安定した仲間を築いておらず、遊びの充足感を十分に味わえない。
- 第4象限 遊びに対する意欲や主体的態度が不十分。また友達関係も安定しておらず、遊びの課題を持ちにくい。

この4象限をもとに、援助の大まかな方針を検討した。例えば、第1象限の子どもは、少し引いた場所から見守り、困った時に手を差し伸べれば大丈夫。一方、第4象限はしっかりと向き合い、能動的な学び手にする援助を続ける必要がある、といった具合だ。集団保育では、一人ひとりの子どもを理解するとともに、こうした典型的な見方も必要だと感じる。

続いて、一人ひとりへの具体的な援助は、以下の5つの視点を踏まえて検討した。

- ①目的意識の深化（自分のやりたいことができているか）
- ②状況を再構成する力（遊びの面白さに向け、絶えず状況を作り直そうとするか）
- ③環境へのかかわり（遊びに使うモノや場の必要性が分かり、能動的にかかわるか）
- ④情報の選択と自己決定（他者の動きを見たり、言葉を聞いたりして、自分の中に

さまざまな情報を取り入れているか）

- ⑤他者とのコミュニケーション（思いや考えを、他者にどう伝えようとしているか）
- 2つの軸で大きく捉え、5つの視点で詳細に分析するという方法で、遊びの質を高める援助を生み出していったのである。

遊びを幼児教育の中心に据える上では欠かせない、心理学者であるパセック氏の提唱するGuided playの考え方にも言及したい。

Guided playは、大人は遊びの文脈を開始させるが、その中で「指示」はしない遊ばせ方である。大人の役割は、支配的ではないが積極的で、子どもの意識を明確にするフィードバックや質問をする。それにより、子どもの喜びや自尊心、自信、社会的な絆が高まり、実行機能や学力を向上させると考えられている。私が考える「遊びを中心とした保育」との共通点は、子どもの能動性を尊重するという点である。しかし、Guided playでは「何を学ばせるか」は大人の側にイニシアチブがあるように読み取れる。子どもを能動的な学び手に育てるという大きな目標を大人は保持していたとしても、学びのイニシアチブはあくまでも子どもの側にあるのではないか。Guided playはFree playと直接教授の中間と位置づけられているが、そうではなく、子どもの何を学ぼうとしているかを理解することから必要な大人の配慮を考えるべきではないかと思う。

最後に強調したいのが、幼児教育の中では、生活や遊びが単発的、分断的にならないようにすべきということである。そうしないと、子どもが生み出す文脈はつながらない。幼児教育には「プロセスが大事」なのである。今日の体験から明日の興味が生まれるような連続的な生活を送るために、子どもと保育者が相互にかかわって創り出す遊びのプロセスを重視していただきたい。

3-1-2

パネルディスカッション

遊びの質を高める保育のあり方

panel discussion

司会●**榎原洋一** Sakakihara Yoichi …………… CRN 所長、お茶の水女子大学大学院教授

パネリスト●

河邊貴子 Kawabe Takako …………… 聖心女子大学教授

上垣内伸子 Kamigaichi Nobuko …………… 十文字学園女子大学教授

大豆生田啓友 Omameuda Hirotomo …………… 玉川大学准教授

遊びの質を高める 保育のあり方

「誘導保育」に通じる 「Guided play」の保育観

榎原● 本日はよろしくお願ひします。河邊先生のご講演では、最後にGuided playについて言及されました。Guided playは、米テンプル大学の発達心理学者キャシー・ハーシュ＝パセック氏のグループなどが提案していますが、児童心理学者である倉橋惣三が提唱した「誘導保育」という保育観に似たものを感じます。

大豆生田● 河邊先生は、雪という環境の中で、子どもが協同して遊びが広がり深まったりした事例を紹介されましたが、あの場面での保育者の援助は、倉橋の考え方に通じる面があると思います。倉橋は、「生活を、生活で、生活



に」という言葉を掲げ、「さながらの生活」が幼児期の基盤として大切だと唱えました。子どもが登園したら、自分で好きな遊びを選んで過ごす時間をまず大事にする。それは好き放題にさせるという意味ではなく、倉橋の言葉を借りれば、「自由と設備」が与えられています。「設備」は「環境」を意味すると捉えると、雪という環境に「自由」にかかわる状況が、あのような多様な遊びを生み出したわけです。

倉橋が「さながらの生活」を重視した根底には、子どもは自由に学び、自己を充実させる力があるという信念がありました。主体的に環境にかかわって遊び、学ぶ力を尊重したのです。しかし、当然、上手く遊びに入れない子どももいます。そういう場合は、自己充実を求めるだけでなく、何らかの手助けが必要になり



大豆生田啓友：玉川大学教育学部乳幼児発達学科准教授。青山学院大学大学院文学研究科教育学専攻修了後、青山学院幼稚園教諭などを経て、現職。専門は、幼児教育学・保育学・子育て支援。日本保育学会理事、NPO法人びーのびーの理事などを兼任。主な著書に、『支え合い、育ち合いの子育て支援—保育所・幼稚園・ひろば型支援施設における子育て支援実践論—』（関東学院大学出版会）、共著に『子どもを「人間としてみる」ということ』（ミネルヴァ書房）など。



河邊貴子
聖心女子大学教授

ます。

倉橋の誘導保育論の中でも、保育者の援助により、遊びや生活に筋のようなつながりを持たせることの大切さが述べられています。雪遊びの事例でも、保育者が遊びの様子を読み取りながらかかわることで、遊びを単発で終わらせず、つながりを持たせていました。そこでは、河邊先生が話されたように、子ども主体と大人主体の二項対立ではなく、個々の子どもと保育者との相互のやりとりが大切であると改めて感じました。

河邊先生に一つ質問です。絵の具という刺激的な素材は遊びに大きな影響を与えますが、保育者はどのような意図や思いから、子どもたちに提案したのでしょうか。

河邊 ● 遊びの中で生じた見通し、それから目的が明確になってきたことを踏まえ、「ここだ！」と考えて提案したのでしょうか、確かに大きな賭けだったと思います。もし3歳児に提示していたら、遊びがぐちゃぐちゃになってしまったでしょう。保育者は、床の上にひっそりと置くようにして絵の具を提示し、あくまで子どもの思いを尊重する姿勢でした。そこには深い子ども理解と同時に、絵の具という対象物に対する保育者自身の経験や理解があったのだと思います。

子どもと一緒に雪の滑り台を作る場

面では、若い保育者自身に雪遊びの経験があまりなかったようで、怖がってなかなか高くしませんでした。それを見ていたベテラン保育者が、「もっと高く大丈夫」と声をかけていました。そういう点には、保育者自身の経験の差が表れます。

「自分で選んだ」と思える遊びの選択が重要

上垣内● 河邊先生のご講演をお聞きして考えたことをいくつかお話しさせていただきます。

Guided playに関して、大人が文脈を開始させるというお話でしたが、遊びの選択というプロセスは、倉橋の誘導保育でも非常に慎重に考えられています。遊びは子どもの興味・関心に始まり、その時代の社会・文化状況に応じ、家庭や社会との繋がりの中から選ばれ、そこには保育者自身の子ども時代の原体験も織り込まれます。そのように子どもを尊重する意思があるからこそ、子どもは「先生から与えられた」とは思わず、「自分がやりたいくて始めた」という感覚を持てるのでしょうか。そうした意味からGuided playを考える上では、特に遊びの選択は重要であると感じました。

またGuided playにおいては、大人からのフィードバックや深い質問を受けることで学ぶというお話でしたが、環境を通して保育することを考えると、モノやコトにもそのような機能があるのではないかと思います。対象と深くかかわることは、まさに対象と対話することです。対象そのものが、子どもに対してフィードバックをもたらしたり、質問を投げかけたりすることもあるでしょう。ですから、保育者の役割はもちろん重要ですが、遊びの対象そのものを大切にする必要があると思いました。



上垣内伸子：十文字学園女子大学人間生活学部幼児教育学科教授。お茶の水女子大学大学院児童学専攻修了後、国立総合児童センター「こどもの城」小児保健部心理相談員などを経て、現職。専門領域は保育学、発達臨床学で、保育者養成、および保育という臨床的な場での個々の子どもの発達と心的世界の理解やそれに対する援助のあり方を研究している。OMEP（世界幼児教育機構）日本委員会理事、財団法人こども未来財団理事などを兼任。主な著書に、『自由保育とは何かー形にとらわれない心の保育』（フレーベル館）など。

倉橋は、「充実指導」という言葉を使っていますが、保育者によるフィードバックや質問に教育的な意図が見え隠れすると、自己形成力の手助けにはならないと考えました。保育者の意図が表に出ず、あくまで子どもが自分で気付いたかのように感じられる投げかけをすることが、充実指導なのだと思います。

倉橋は、誘導保育は一人の保育者ではできず、園という環境を生かし、集団や仲間、空間が持つダイナミズムが可能にすると述べています。この点について、私も同じことを考えています。

一人ひとりを読み取る記録と俯瞰的な記録の両方を持つ

神原● 河邊先生は、これだけ遊びの重要性が言われながら、遊びを中心とした保育がなかなか定着しない状況を指摘されました。一方で、雪遊びをする子どもに絵の具を差し出して遊びを豊かにするようなかかわり方ができる保育者もいるわけです。こうした資質は、一体、どのように身につくのだろうかという疑問を持ちました。保育者の養成課程の課題がかかわってくるのかもしれませんが。

河邊● 養成課程も関係しますが、それより園長の考え方が大きいと思います。どのような保育をしたいのか、とことん考える必要があります。絵の具を提案した結果、遊びが広がったわけですが、保育者の頭の中には自身の経験を踏まえた見通しや予測があったのでしょうか。それがなければ、あの場面で絵の具は出さな

いと思います。

予測に反することや予測を超えることも、たびたびあるものです。そこで、まず保育者としての予測をしっかりと持つこと、そして実践においては、予測を横において、子どもが実際にどのように考え行動しているのかを観察すること、この2つを常に心の中に共存させることが大切です。上手く援助できない原因は、予測の範囲が狭い、保育者自身が遊んだ経験が乏しい、やらなければいけないことで頭が一杯、遊びの観察が不十分、などが考えられます。

神原● 記録の重要性も述べられていましたが、記録を通して、遊びを援助するスキルや感性は身につくのでしょうか。

河邊● 記録することはとても大切だと思います。ただ、惰性で記録するだけでは全く意味がありません。どのように記録すれば、必要なことが見えてくるかという試行錯誤が必要でしょう。

保育記録は、子どもを対岸に置くようにして、「あんなことをした」「こんなことをした」と書き連ねるだけでは、子どもと保育者との相互関係が生まれません。その時に自分がどう感じたか、何をしようと思ったか、実際に何をしたか、それを受けて子どもはどう変化したかなど、子どもとの関係性を踏まえた記録が重要です。

大豆生田● 雪遊びなどの事例を通し、保育者の心が動いて、ワクワクした思いで子どもの姿を見守っている様子が伝わってきます。遊びが広がっていく背景には、そうした保育者の思いがあるのでしょうか。

そんな生き生きとした情景を記録する方法として、エピソード記述があります。子どもとの関係の中で、保育者が感じたことや発見したこと、また個々の子どもの興味・関心や課題などを記録するスタイルです。

一方、もう少し俯瞰的な視点からの記録もあります。ドキュメンテーション型などが代表的です。子どもを羅列的に見て、遊びの群れの中での様子を捉えるやり方です。これらは、どちらかを選ぶのではなく、両方あることが大事です。ただし、現在の保育者が置かれた状況下では、記録にかかる負担は非常に大きいという課題も付け加えておきます。

子どもを類型化する見方は頭の中にマップを持つこと

上垣内● 俯瞰的に見た記録は大切だと、私も感じます。河邊先生が仰ったように、多人数を保育するには、ある程度、類型化することは重要でしょう。類型化は、頭の中にマップを持つことだと思いますので。

一方、一人ひとりを丁寧に読み取る記録も、もちろん大切です。個を尊重する視点を持ちながら、クラスの一日のダイナミズムをどう捉えるか。容易ではありませんが、これを追求していくことが、本日のテーマである遊びの質を高めるこ



榎原洋一

とにつながるのではないのでしょうか。

保育記録について踏み込んで考えるために、ここでニュージーランドの事例を紹介させていただきます。ニュージーランドには、「テファリキ (Te Whariki)」というカリキュラムがあり、それを評価する「ケイ・ツア・オ・テ・パエ (Kei Tua o te Pae)」というツールがあります。

テファリキは、「エンパワメント」「全体的発達」「家族とコミュニティ」「関係性」という4原則、そして「心身の健康」「所属感」「貢献」「コミュニケーション」「探求」という5要素によって構成されています。「子どもが何かできるように」ことを目指すのではなく、有能な学び手である子どもがどのように学んだかというプロセスを非常に大事にするカリキュラムです。そうした保育理念を大事にするためには、それにふさわしい評価の仕方があるという考えから、ストーリーを通じて評価するケイ・ツア・オ・テ・パエが生み出されました。

幼稚園教育要領や保育所保育指針も、しっかりとした保育理念とカリキュラムを提示しているのですから、ニュージーランドのようなすっきりとした評価や記録の制度を検討しても良いのではないのでしょうか。例えば、幼稚園教育要領では、「5領域×心情・意欲・態度」が基本となっていますが、「何をするか」よりも、「保育を通じた心情・意欲・態度の育ちを見ていく」という視点にふさわしい、評価と記録のツールがあるといいと思います。

遊びはあくまでプロセス優先 コンテンツは代替可能

榎原● ここで会場からご質問を受け付けたいと思います。

会場 山形県の私立幼稚園の理事長兼園

長です。Guided playについて、個人的な経験を交えて質問させてください。私の趣味の釣りに、息子を幼児期から連れて行っていました。基本的な安全対策やルールを教え、最低限の釣り方を教えただけで、後はできるだけ子どものやりたいうようにやらせました。口出ししたくなることは多々ありましたが、堪えていると、自己流で釣果を上げるようになり、今では私を超える釣り好きになりました。こうしたやり方も、Guided playと言えるのでしょうか。

河邊● 鳥取大学の「コホート研究」ではまさにそのことを研究しています。小学生の生活満足度を調査していますが、親の心配の多くは杞憂で、子どもは満足して生活しているという結論を提示し、保護者の過保護や過干渉があると、社会性の獲得にブレーキがかかると指摘しています。今のご質問で言えば、父親とい

う憧れのモデルがいて、安全が保障された上で、自己探索できる自由度がある。そして、ある程度の認めもある。抜群の学習環境と言えるのではないのでしょうか。私が、Guided playで懸念しているのは、学ばせるために、いわば遊びが利用されることです。今お話しされたような学び方は、とても良いと思います。

上垣内● 河邊先生が懸念されている点は、遊びがコンテンツ優先になり、いかに効率良く身につけるかばかりを追求してしまうことだと思います。コンテンツではなく、あくまでプロセス優先であるべきだと、私も思います。誰と、どのように学んだかということから、ストーリーが生まれるのだと思います。コンテンツは代替可能と言えます。

榊原● とても重要なご指摘が多々ありました。本日はどうもありがとうございました。

panel discussion

3-2

園種別ワークショップ

遊びの質を高める保育のあり方

Workshop

「遊びが 学びの保育」の 実現を阻むもの

第2部のワークショップは、公私立、また幼稚園、保育所の枠を超え、保育者が『遊びが学びの保育』の実現を阻むもの』について率直に語り合う場となった。幼稚園と保育所のグループに分かれて議論した内容を発表し合い、全体で共有した。ファシリテーターは、幼稚園グループは玉川大学准教授の大豆生田啓友先生、保育所グループはベネッセ教育総合研究所発行の『これからの幼児教育』編集長の橋村美穂子が務めた。



いかに若手をフォローして 保育者の資質を高めていくか

はじめに幼稚園グループの議論の内容を見てみよう。参加者は、公立幼稚園園長2名、私立幼稚園主任、公立幼稚園出身の幼稚園教員養成課程講師の計4名。自己紹介を経て、「遊びが学びの保育」を展開する上での課題を付せんに入ることから始まった。

以下、議論の一部を掲載する。

.....
大豆生田● 全員が保育者の資質に関する課題を記入しています。

台東区・公立幼稚園長● 特に若い保育者は自身が遊んだ経験が少なく、「こういう遊びが楽しいだろう」というイメージが湧きづらいようです。現場の中で経験させる必要があると感じます。

品川区・公立幼稚園長● 保育雑誌などを読んで勉強しても、自分が体験していないため、その活動を通して何を感じさせるかといった深いところまで考えずに進めてしまう保育者も見られます。

幼稚園教員養成課程講師● 経験が少ないことが、子どもの遊びの意味や面白さを読み取る力の弱さにつながっているように思います。

台東区・公立幼稚園長● 経験を通して次第にレベルアップするので現場に入ってからも間に合わないことはないと思います。ただ、最初から、予測したり、とっさの援助をしたりする力を期待するのは難しいかもしれません。

江戸川区・私立幼稚園主任● 自身の経験が少ないほか、単に忘れているケー

スも多いと思います。養成課程では、「たとえば、こんなことをして遊んだ」「あの遊びが面白かった」などと思い出させる指導が必要でしょう。

品川区・公立幼稚園長● 逆に経験が多い人の落とし穴が、自分の経験だけで判断してしまうことです。目の前の子どもの思考や工夫を見ようとせず、「こう展開するはず」と先読みし過ぎてしまうことがあります。

台東区・公立幼稚園長● オールマイティである必要はありませんが、1つのことを突き詰めて何かを見出した保育者は、他のことも深い視点で見られるような気がします。

大豆生田● 経験が少ない保育者は、主に学び合いにより育つのでしょうか。

品川区・公立幼稚園長● 確かに保育者同士の学び合いは大切ですが、若手ばかりの園では難しくなります。有難いことに私の園にはベテランの保育者がいますが、苦勞されている園は多いようです。園長と若い担任の間に、経験のある保育者がいてフォローできると上手く回ると思います。

大豆生田● 中間的な存在の役割が大きいということですね。

品川区・公立幼稚園長● そうですね。保育は言葉で教えられる以上に、見て学ぶことが多いと思いますので。

大豆生田● 保育者の資質を生かすためには、「やりたいことができる」という風土も大切だと思います。

台東区・公立幼稚園長● そこは園長の考え方が大きいと思います。

江戸川区・私立幼稚園主任● まず保育者によってワクワクするポイントが違うことから認める風土が大切ではないでしょうか。保育者が生き生きと保育できる環境が、豊かな遊びをつくる根っこになると思います。また、いかに保育者に自信を持たせ、失敗を許容する環境をつくるかがキーになるのでは

ないでしょうか。

大豆生田● 最近の保護者からは、「小学校に備えて英語を教えてください」「文字の読み書きを教えてください」というような声がよく聞こえてきます。

台東区・公立幼稚園長● 保護者には遊びの大切さを伝えていますが、難しいのは、英語や読み書きなどを大切にする園も存在することです。そういう園を否定するような表現はできませんので。

品川区・公立幼稚園長● 入園保護者会などでは映像を活用し、「この遊びの中で、こんな体験をして、こういう育ちにつながっています」と説明するようにしています。どうしても目に見える成果が優先されがちですが、それにめげず、遊びの大切さを発信し続けることが、私たちの使命だと思っています。

幼稚園教員養成課程講師● 保護者にも、遊びのプロセスを一緒に経験してもらおうというやり方もありそうです。

品川区・公立幼稚園長● そうですね。保護者会では、子どもの活動に似たグループワークを体験してもらおうなどしています。

幼稚園教員養成課程講師● 一人ひとりの子どもの姿を通し、「こんなふうに変わってきた」「物事に意欲的に取り組めるようになった」などと説明すると納得してもらいやすいと思います。「3歳のときには何もできなかったのに、す



ごい成長ですね」などと、少し長いプロセスで成長を知らせることも必要でしょう。

江戸川区・私立幼稚園主任● 保護者だけではなく、社会が幼稚園に対して抱くイメージがずれていることも多い気がします。例えば、幼稚園の活動というと鼓笛隊などを思い浮かべる方が多いのですが、そうではなく、遊びが大事であることを、はっきりと伝える必要があります。

保育所グループでは 時間・空間の制約が 大きな課題

続いて、保育所グループの議論の様子を見てみよう。こちらは、公設民営保育園長、公立保育園長（2名）、私立保育園長の計4名で議論を行った。

.....
橋村● 保育者の資質に関する記入が多いようです。

山形県・私立保育園長● 先生がワクワクできないと、遊びは広げられないと思います。

江東区・公設民営保育園長● それは先生が主導するということですか。

山形県・私立保育園長● 保育者が遊びの中心になるというより、共感できるかどうかということです。子どもと遊びを分かち合えるか、とも言えます。例えば、石をひっくり返すと、ダンゴムシがうじゃうじゃと出てくる。子どもと一緒に、ひっくり返す瞬間を楽しめるかどうかが大事です。

北区・公立保育園長● 保育者が遊びの中に入っていくことは、逆に言えば、子どもの遊びを奪ってしまう危険性もあります。それを十分に意識した上で、子どもに対して「面白いことを見つけたね」と言ってあげられるかどうか大事だと思います。

橋村● 共感とは、具体的にはどういうことですか。嬉しいことがあった時に共感するとか、そういうことでしょうか。

山形県・私立保育園長● 例えば、石をひっくり返してダンゴムシが出てきたら、「わーっ」と、子どもの気持ちに共感しながら演技する。その時には、保育者も一瞬、童心に返ってワクワク感を持つことが大切だと思います。

北区・公立保育園長● 「これをしたら、こうなるだろう」という予測を持ちながら、保育者自身も面白いということかもしれません。変な言い方ですが、なかなか「俳優」のように振舞えない保育者が少なくありません。ちょっと固さがあるというか、真面目過ぎるというか。発想に「ねばならない」的なところがあるように感じます。

品川区・公立保育園長● 「教えなきゃいけない」と思い込んでいるのではないのでしょうか。若い保育者に対して、「一緒に遊んで、心を通じ合わせるのが大事だよ」と言うと、「遊んでいいんですか?」と驚かれることがあります。安全面の配慮などに精力を使い、なかなか一緒に遊び込めないようです。

江東区・公設民営保育園長● 遊びの質とは、どれだけ豊かな体験をしたかということにかかわります。保育者が同じ場面を体験することで共感が生まれますが、保育者自身に体験がないと、遊びの質を判断しづらいように思います。

北区・公立保育園長● 体験不足の保育者に体験させることは大切だと思います。ただ、体験だけでは追い付かないため、先輩から話を聞いたり、自分で学んだり、保育者としての資質を伸ばしてあげられるような環境を園がつくことも必要ではないのでしょうか。

江東区・公設民営保育園長● 今の若手は、自分から何かをすることは少ない

のですが、園長がちょっと石を投げると飛び付いて一生懸命にやろうとする素直さがあります。要は、園長があの手この手で保育者の自主性を育てることが大切なのでしょう。だから、保育者の課題を考えるときに問われるのは、常に園長のあり方だと思います。

橋村● 長時間保育に関する意見も出ています。

山形県・私立保育園長● 自分の勤務が終わっても保育時間は続きますから、保育者同士が子どもや遊びについて話し合う時間があまり取れません。そこは幼稚園と大きく異なる点です。人的配置にゆとりがあると良いのですが、それも難しいのが現状です。

江東区・公設民営保育園長● 勤務時間イコール保育という状況で、プラスアルファの時間を持ってないのが悩みです。記録を優先し、保育がお留守になることは許されませんから。延長保育の環境がどうあるべきかという議論も必要だと思っています。

橋村● 保育の時間と空間の環境には、どちらも保育所ならではの課題がありそうです。特に都内では、園庭が狭かったり、定員を超えて受け入れていたりする園もあります。

品川区・公立保育園長● 例えば、ブロックや積み木で遊んでいても、食事の時間には片付けなくてははいけません。遊びと生活のスペースが分かれていれば、連続した遊びができるのですが、それは難しいという保育所はとて多いように思います。

江東区・公設民営保育園長● いわゆる細切れの保育は、できるだけ避けたいところです。1時間半や2時間近くかけて遊んでいると、子どもたちが自分から遊びを見つけて、新たな展開を見せる場面に遭遇しますので、本来はたっぷりとした遊びの時間を保障できるというのがいいのですが。

山形県・私立保育園長● 保育者にも子どもにも十分な時間の保障がないという話が出ましたが、実は保護者も忙し過ぎることが多いのは、保育所の課題だと思います。

幼稚園・保育所ともに 保育者の資質を課題視

各グループから提示された課題が、**図①**だ。幼稚園・保育所とも、保育者の資質に関する課題が多く挙がった。若手を中心に、遊びの経験が少ない保育者に対するフォローを充実させていくことは、園種を問わず、これからの大きな課題と言えるだろう。

幼稚園と保育所の違いとして、保育所では時間・空間的な制約の大きさが目立った。現場レベルで改善することが難しい課題も含まれるため、今後、政策的な視点からの議論も求められる。

議論の中では、課題の提示だけでなく、改善に結び付きそうな提案も数多くあり、園における遊びのあり方を考えていく上で非常に示唆に富むワークショップとなった。



「遊びが学びの保育」の実現を阻むもの

【幼稚園グループより】

- ◎保育者について
 - ・保育者自身の遊びの経験が不足していないか
 - ・園長の考えや園全体の文化が、遊びを大切にしているか
 - ・独自性は大事だが、「独善」になっていないか
 - ・養成機関や園での研修に課題はないか
- ◎保護者について
 - ・保護者や社会の幼稚園に対するイメージにずれはないか
 - ・「遊びが学びである」ということが十分に伝わっているか
- ◎環境について
 - ・行事などが増える中で、子どもが十分に遊べているか
 - ・行事が、遊びや生活と乖離していないか
- ◎場所について
 - ・園庭が狭く、遊びが広がらないことがあるか
 - ・子どもの遊びに即した建物や設備であるか
- ◎子ども自身の体験について
 - ・子どもの体験を支える計画に課題はないか

【保育所グループより】

- ◎保育者について
 - ・保育者自身の遊びの経験が足りているか
 - ・保育者の保育経験は不足していないか
 - ・保育者の層が薄くなり、モデルとなる存在がいないのではないかと（特に私立保育園）
 - ・保育者は子どもに十分に共感できているか
 - ・保育者自身がどれだけ豊かな遊びの経験を積んできたか
 - ・園長は、保育者の自主的な判断をきちんと受け止めているか
- ◎保育の時間と空間について
 - ・保育の時間や空間が細切れになっていないか
 - ・安全面による制約は過度になっていないか
 - ・記録する時間は十分に確保できているか

図①

3-3

現場と専門家の議論

遊びの質を高める保育のあり方

free discussion

司会● 榊原洋一 …………… CRN 所長・お茶の水女子大学大学院教授

出席者●

河邊貴子 …………… 聖心女子大学教授

大豆生田啓友 …………… 玉川大学准教授

一見真理子 …………… 国立教育政策研究所総括研究官

磯部頼子 …………… ベネッセ教育総合研究所顧問

品川区・公立保育園長

江東区・公設民営保育園長

北区・公立保育園長

山形県・私立保育園長

幼稚園教員養成課程講師

品川区・公立幼稚園長

台東区・公立幼稚園長

江戸川区・私立幼稚園主任

「遊びが学びの 保育」の 実現に向けて

第3部は、これまでのプログラムに参加した先生方によるフリーディスカッションを行った。第1・2部で提示された課題などについての踏み込んだ議論を通し、「遊び」を中心とした保育をいかに充実させ、その意義を社会に広げていくか、具体的な方途を探った。

豊かな遊びを保障できる 保育者をどう育てるか

榊原● 皆さん、よろしくお願ひいたします。遊びの質を考える上では、自由遊びと一斉遊びのバランスやあり方を考えることが欠かせないと思います。まず、この点についてのご意見をお聞かせください。

河邊● 自由遊びか一斉遊びかという二択の議論にはあまり意味がなく、形態として両方必要と言えらると思います。子どもの自由な遊びの広がり、一斉遊びが上手く絡むように仕向けることが大切でしょう。

幼稚園教員養成課程講師● そうですね。1人ではできない遊びを皆で体験する中で、全体としての遊びが広がり、そこから個々の遊びに派生していく。そのように共通体験がきっかけとなり、それぞれの世界が広がることはよくあります。私の園では、自由遊びと一斉遊び、普段の遊びと行事、また生活と遊びをスムーズに行き来させることが大事だと、よく話しています。

磯部● 遊びの種類は実にさまざまですが、最低限のルールが分かっているれば、誰でも参加できるような活動は、

特に一斉遊びに向いていると言えるでしょう。

榊原● 子どもの姿を読み取り、遊びを展開させるのが保育者の役割ですが、第2部のワークショップでは、保育者の資質がなかなか育たないという課題が挙がりました。この点について議論を深めたいと思います。

江戸川区・私立幼稚園主任● 1人の保育者の経験には限界がありますから、チーム保育の視点を大切にすべきでしょう。例えば、「この先生は砂場遊びが得意だ、あの先生は木登りを教えてくれる」といったことを子どもたちが分かっていたら、それぞれの経験が活かされ、相乗効果が生まれます。保育者は、園長が知らない経験や得意分野を持っているものです。そういう長所を自分から出たくなるような土壌をつくることで、自ずと子どもの遊びは豊かになっていくと思います。

台東区・公立幼稚園長● 今のお話を聞いて、それぞれの保育者の良いところを生かす保育っていいな、と思いました。チーム保育という言葉で思い出したのが、数年前、幼稚園と保育所の一体化に向けて、保育士さんと組んで保育をしたことです。この時、2人だから2倍見とれたかという、1人の子どもに同じ注意をしまったり、2人とも見落としてしまったりして、なかなか上手くいきませんでした。複数担任が一般的な保育士さんは、慣れているのかもしれませんが。

北区・公立保育園長● 公立保育園では複数担任制が一般的ですが、チーム保育は情報交換が鍵だと思います。常に2人が同時に見ているわけではないので、「〇〇ちゃんは、こうだったよ」と伝え合って共有します。こうした報告は、自分の保育を振り返る機会にもなります。保育者の組み合わせは、子どもの育成面を考え、ベテランと若手を



一緒にすることが多いです。

河邊● 公立幼稚園の多くは単学級ですので、経験の少ない保育者が他の学級を見て学ぶことが難しくなっています。そのため、異年齢保育を行ったり、複数の保育者がかかわって影響を与え合う場面を意識して設けることが大事です。

品川区・公立保育園長● 私の園では、あえて若い保育者を担任にして「あなたが頑張らないと、子どもは伸びないよ」と発破をかけました。先輩と一緒にすると、どうしても頼ってしまい、なかなか伸びないという課題をずっと抱えていたためです。すると、とても頑張ってくれて、良いクラスをつくりました。「よくやったね」と褒めると、「頑張ってたよ」と泣きながら喜び、「来年も頑張る」と言ってくれました。園長としては大きな冒険でしたが、非常に良い結果となりました。

品川区・公立幼稚園長● 私も園長になる前にチーム保育を経験しました。一緒に教材を研究し、異なる視点から子どもたちの姿を捉えて評価をする中で、保育者として大きな学びがありました。特に、自分とは異なる捉え方を知って見方が広がり、次につながられたことが大きかったと思います。今、私の園では、比較的経験が豊富で、自分だけで完結させられる保育者が多いのですが、他の見方を知るとさらなる工夫が

生まれますから、保育者同士が気兼ねなく学び合える仕組みをつくることを心がけています。

江戸川区・私立幼稚園主任● 工夫はとても大事だと、私も思います。工夫して、上手くいったり、いかなかったりという繰り返しにより、遊びは広がっていきます。ですから、保育者がいかに主体的に工夫できるようにするかを考える必要があると思います。例えば、保育者が「こんなことをしたい」と言った時、園長が「前例がない」と却下すれば、その工夫はつぶれてしまいます。そもそも工夫には失敗が付き物ですから、失敗を認められなければ、子どもの遊びは広がりません。そこに園長の役割があるのだと思います。

幼稚園教員養成課程講師● 保育者によって子どもの姿の読み取り方は違いますから、当然、援助の仕方も異なります。それを同じ土俵に乗せて議論することが大事と考え、保育記録をもとに「何が違ったか」「どうしたかったのか」などと話し合っています。保育や遊びの質を高めるためには、単に経験を積むだけではなく、自分の保育を振り返る視点を持つことが不可欠だと思いますので。綿密な記録を取るのが難しい場合は、園長の私が写真を撮って話し合いを促すなどの工夫をしています。

大豆生田● そのように一人ひとりの良さを生かし、保育者同士が学び合っ

ている園は良いですね。素敵な園は、むしろ経験年数が多い保育者ほど、若手から学んでいるものです。そういう園に実習生を送ると、「あの学生さん、とても面白かったよ」などと、学生の良いところまで見つけてくれます。そのような学び合う風土を園内に形成することが、すごく大事だと思います。

「遊びが保育」を実践する園で園長に求められる資質とは

榊原● 保育者の力を引き出し、園の風土を形成するためには園長の資質が重要であることが、第1・2部でもたびたび触れられました。ここで、園長に求められる資質や心がけについてお聞きしたいと思います。

台東区・公立幼稚園長● 保育者が自由に発言し、支え合える余裕のある雰囲気をつくり出すことではないでしょうか。もちろん、規範意識も大事で、ラフ過ぎるのも良くありませんが、自分の考えを安心して出せる環境はとても大切だと思います。

山形県・私立保育園長● 一言で表すと、「保育者の笑顔を絶やさないこと」だと思います。保育者が常に太陽のような笑顔を心がけることで、子どものみならず、保護者にも安心感を与えられます。保育者の笑顔を妨げるものを排除することが、園長の役目だと考え



free discussion



ています。

品川区・公立幼稚園長● 私の園でも、「笑顔」がキーワードです。子どもの笑顔をつくり出すために、まず保育者が笑顔で働ける職場をつくることを心がけています。笑顔とは、単に面白さや楽しさから生まれるのではなく、子どもと一緒に保育をつくり出していく充実感から、にじみ出るようなものだと考えています。

品川区・公立保育園長● 園長として、上から押さえつけるような言い方はしないように心がけてきました。保育者が自信を持ち、極端なことを言えば、「園長がいなくても大丈夫」と思えるような園をつくりたいと思っています。そんな気持ちが伝わっているのか、若手もベテランも気軽に発言し、時には私が保育者から叱られることもあります。自由な雰囲気の中で保育に専念できていると思います。

大豆生田● ミッションを明確にして、一人ひとりの保育者の個性を大事にする園づくりに力を注ぐことが大切でしょう。そういう園には、若手やベテランを問わず、「うちの園では——」と、しっかりと自信を持ってミッションを語る、魅力的な保育者が多いです。

江東区・公設民営保育園長● 園長も一保育者ですので、徹底的に保育について語り合うことが大切。常に保育者の目線と園の運営を行う園長の立場で物

事を考えています。そして大きな船に、保育者や子どもと一緒に乗り込むイメージを持ち、それぞれのポジションで役割を果たせるようにサポートする。船の舵取りは園長の役目ですから、常にアンテナを高く保つとともに、アンテナの本数も他の保育者より多く持っている必要があると考えています。

江戸川区・私立幼稚園主任● 私立幼稚園は、経営の面がありますから、園児獲得はもちろん大切。しかし、それが一番の目的になってはいけないと思います。保育についてしっかりとした考えを持ち、保護者や地域社会に対して丁寧に語れることが、園長に求められる資質だと思います。また、私が新任の時、園長から「俺がお前を採用した人間だ。俺が採用したのだから、お前は好きなことをやれ。責任は俺が取る」と、はっきりと言われ、安心して保育に専念できました。自分もそんな園長になりたいと強く思います。

磯部● 私自身は、普段は、どこか「遊び人」のような良い意味でのずぼらさを持ちながら、いざという時には責任を持って判断し、行動する園長を目指してきたつもりです。

保護者や地域社会の理解と協力を得るために

榊原● 保護者や地域社会に対し、もっと発信が必要というお話がありましたが、そのあたりはどうお考えでしょうか。

江戸川区・私立幼稚園主任● 社会のイメージに迎合しないことが大事でしょう。幼稚園は、自由な「遊び」からかけ離れた一斉活動のイメージで語られることがまだ多いのですが、「それは違う」ときちんと伝えることは説明責任だと思います。いろいろな具体的な事例を出しながら、現場の保育者だけではな

く、教育学者などとも連携して説明していく必要があります。

江東区・公設民営保育園長● 保護者に対し、私たちがどのような気持ちで保育しているかを伝えることが大切だと思いますが、それは容易ではありません。現在の園に赴任した3年前から、「保育内容をどう伝えるか」「子どもの声をどう届けるか」について、試行錯誤しています。園としての揺るぎない方針を地道に伝えていこうと思い、お便りを工夫したり、掲示板を活用したり、ドキュメンテーションで丁寧に伝えたりしてきました。

台東区・公立幼稚園長● 私の園では、ここ3年ほど、ホームページでの情報発信に力を入れています。3日に1度くらいの更新で、日々の保育場面の写真とコメントをアップするうちに、「5歳の姿って、3歳とはずいぶん違いますね」とか、「何でもない遊びだと思ったけど、いろんな意味があるんですね」といった声が聞かれるようになりました。直接言葉で伝えることも大切ですが、こうした補助的な情報発信の効果も実感しています。

北区・公立保育園長● 保護者への説明の機会として、「ママ先生」として保護者が保育に参加する場を設けています。保育者の思いを実際の保育場面を通して伝えるのがねらいです。その他に地域社会にも発信していますが、まだ広く浸透させるまでには至っていません。

品川区・公立保育園長● 保育者の思いを全ての保護者に理解していただくのは不可能なことなのかもしれません。それでも、少しでも理解していただくために、担任が子どものさまざまな姿を拾って、良い学びをしていることをきちんと伝える努力をしています。

品川区・公立幼稚園長● 子どもの姿を通じて保育者の思いを伝えることは、私の園でも心がけています。また公立

幼稚園は地域の中にある教育的資産ですから、その意義や役割を十分に理解してもらえるように、園長として関係諸機関とのネットワークづくりに力を入れています。

大豆生田● 子育て支援センターなどの役割も大きいと思います。未就園児の保護者に対し、子どもの発達に大事なことなどを語れるコミュニティができると、園選びの方向が変わってきます。そういうコミュニティはまだ少ないので、今後、地域の子育て支援の場が1つの鍵になりそうです。

一見● 日本の保育は個々に工夫をされ、地域で努力を積み上げられています。皆さんのお話を聞いて、「ものづくりジャパン」の基礎は、徹底して遊び込むことの良さに支えられているのかなと感じました。今後、世界のモデルになり得るような素晴らしい事例を海外に発信する仕事に力を入れていく考えです。

榊原● 今後の幼児教育を考える上で非常に有益な提案が数多くありました。今後、乗り越えていくべき課題にアプローチするための道筋が見えてきたような思いがします。どうもありがとうございました。

free discussion

CRN Activity Report 2013

Table of Contents

1	The Challenges and Prospects of ECEC in Japanp.84 (1 st ECEC Research Conference)
2	Child Science of Play and Learning: Playful Pedagogyp.88 (2 nd ECEC Research Conference: 9 th Child Science Exchange Program in East Asia)
3	Child Care that Improves the Quality of Playp.92 (3 rd ECEC Research Conference)
4	Presenter Profilesp.96

1st ECEC Research Conference

The Challenges and Prospects of ECEC in Japan

ECEC Research Conference Starts Strong on June 30, 2013

The first ECEC Research Conference, organized by Child Research Net (CRN), was held at Ochanomizu University on the theme "The Challenges and Prospects of ECEC in Japan."

ECEC is an acronym for "Early Childhood Education and Care." International interest in it has been rising as the Organization for Economic Co-operation and Development (OECD) has emphasized the importance of "Starting Strong" in child care and education.

The program started with the keynote address delivered by Kiyomi Akita, Professor, Graduate School of Education, the University of Tokyo, titled "The Challenges and Prospects of ECEC in Japan in the Context of Globalization," illustrating the global trends of ECEC. Next, the moderator, Yoichi Sakakihara, CRN Director, Professor of the Graduate School of Ochanomizu University, gave a presentation on the challenges facing ECEC. Noriko Goto, Research Manager, Child Sciences and Parenting Research Office, Benesse Educational Research and Development Institute (BERD), reported on the findings of the Second Basic Survey on Early Childhood Education and Child Care. Following these presentations and latest data, a panel discussion was held with four panel members: Mariko Ichimi, Senior Researcher, National Institute of Educational Policy Research and Hiroto Omameuda, Associate Professor, Tamagawa University, in addition to the two aforementioned speakers. Finally, the floor was opened for questions and discussion. Various issues were brought up by ECEC practitioners, which heightened expectations for the next conference. With such fruitful discussions, the first conference started strong indeed.

Data and Evidence Collection Increases Quality of ECEC

Professor Akita pointed out the following three issues in the current practice of ECEC in Japan.

1. Lack of education and child care that will ensure that the individual child will lead a happy life in early childhood and beyond in a globalized, knowledge-based society in the 21st century
2. Lack of education and child care that responds to diverse needs amid widening disparity (economic and regional disparities, etc.)
3. Lack of facts and evidence to ensure the process of improvement in ECEC quality

Compared to other countries that increasingly invest resources in ECEC, Professor Akita pointed out that Japan's public funding for it remains low and emphasized the importance of discourse and evidence to ensure that the significance of ECEC can be widely understood. As

the latest world trends, she introduced case studies from Taiwan and Korea as examples of the effective operation of the ECEC system through the integration of kindergarten and day-care center and also showed a short movie from Singapore where the integration was put into practice last May. Professor Akita further referred to the evaluation indicators for quality ECEC and ongoing international trends, providing examples from Australia and Canada. These examples helped to understand the necessity of promoting data collection and monitoring to effectively increase the quality of early childhood care and education at the national level.



Five Challenges of ECEC

Professor Sakakihara, the moderator of the meeting, introduced the five challenges that face ECEC and ECEC specialists gave their thoughts on them. The following are the five challenges that were addressed in the conference.

1. How can Japanese ECEC be positioned in the global context?
2. Do we have an overall picture of Japanese ECEC? What is the average ECEC in Japan?
3. What are the standards to measure the quality of ECEC? What is quality ECEC?
4. How can we improve the quality of ECEC? Specific facts rather than visions and philosophies are necessary.
5. What are essential differences in care and education between nursery schools and kindergartens?

The specialists then responded to the above questions. For example, it was mentioned that "ECEC in Japan has traditionally been based on the importance of proactive play by children themselves. This, however, is little known outside Japan. As a result, even though Japan was ahead in this field, it seems to have been too far ahead and ended up a step behind."



What is needed to improve the quality of teachers

Following the aforementioned presentation, Ms. Goto introduced selected findings from the Second Basic Survey on Early Childhood Education and Child Care conducted by Child Sciences and Parenting Research Office, Benesse Educational Research and Development Institute (BERD), which was newly released on April 17, 2013. In response to the question "What is needed to improve the quality of teachers?" "Better salary for teachers" was the top answer in public kindergartens, private day-care centers, and Early Childhood Education and Care centers (*nintei kodomo en*). "Better placement standards for teachers" and "improving training program content" were ranked first in public day-care centers and public kindergartens, respectively.

What is needed to improve the quality of teachers
(5 most frequently selected items among 28)

	1	2	3	4	5
Public Kindergartens	Improving training program content	Regular status for non-regular teachers	Creating an atmosphere of mutual support among teachers	Improved on-site training content	Improved guidance by management
	66.9	64.7	64.0	60.5	60.1
Private Kindergartens	Better salary for teachers	Improving training program content	Creating an atmosphere of mutual support among teachers	Improved guidance by management	Improved on-site training content
	77.2	68.6	60.6	56.0	55.3
Public Day-care centers	Better placement standards for teachers	Regular status for non-regular teachers	Improving training program content	Improved guidance by management	Creating an atmosphere of mutual support among teachers
	72.6	67.7	62.1	61.2	59.5
Private Day-care centers	Better salary for teachers	Improving training program content	Better placement standards for teachers	Creating an atmosphere of mutual support among teachers	Improved guidance by management
	83.4	67.2	65.3	63.3	60.1
ECEC centers	Better salary for teachers	Improving training program content	Creating an atmosphere of mutual support among teachers	Opportunities to participate in off-site training	Improved guidance by management
	77.7	69.1	65.5	59.7	59.0

Source: The Second Basic Survey on Early Childhood Education and Child Care conducted by Child Sciences and Parenting Research Office, Benesse Educational Research and Development Institute (BERD)

Evidence strongly needed to solve problems in the field

This was followed by a panel discussion based on the ideas that had been proposed and collected data shown. Ms. Ichimi stressed the importance of a government framework to manage early-childhood data in an integrated fashion and the mapping of ECEC so that the positioning of Japanese ECEC could be highlighted in the global context. Professor Omameuda suggested that data collection and its utilization for ECEC are necessary in Japan, citing an example of a recent athletic performance survey utilized to initiate change in ECEC activities at the grassroots level. Professor Akita also highlighted the importance of mapping with a view to reflecting on the features of one's own kindergarten or center in illustrating all the aspects of children's development. In this manner, the significance of evidence was clarified and widely shared during the panel discussion.



In search of ECEC quality assessment standards

The difficulty of qualitative assessment of ECEC activities also sparked a lively exchange in the conference. Professor Akita maintained that each kindergarten or center should take pride in its diverse characteristics and make efforts to improve quality on its own. This remark shows a stance that ECEC quality should be discussed based on the unique diversity of respective kindergartens and centers, rather than setting unified quality standards for ECEC activities. It was also proposed that, besides numeric data, communicating the reality of children in the community or society could serve as evidence, building upon the idea of "children as citizens."

During the open discussion, a variety of important issues were raised from the floor, such as collecting first-hand experience of teachers, or suggestions on how to draw up standards from cohort studies, all of which were highly suggestive for setting standards to assess the quality of Japanese ECEC activities. ECEC Conference has truly taken the first step to "Starting Strong."



2nd ECEC Research Conference: 9th Child Science Exchange Program in East Asia

Child Science of Play and Learning: Playful Pedagogy

Hosting the 2nd ECEC Research Conference

Child Research Net (CRN) hosted the 9th Child Science Exchange Program in East Asia: the 2nd ECEC Research Conference that was held at Keio University's Mita Campus from October 26 (Saturday) to 27 (Sunday), 2013. During the span of two days, the event focused on Playful Pedagogy and Guided play, two concepts of early childhood education, to promote discussions on play and learning.

The relationship between Play and Learning

Our first day was all about lectures that theoretically considered the relationship between play and learning.



The event started off with a special lecture from our honorary director, Noboru Kobayashi, Professor Emeritus of the University of Tokyo, which illustrated to us how the emotion, joy, is key to a child's healthy physical and mental development, based on case studies from neuroscience studies.

Next, CRN's Director, Yoichi Sakakihara, Professor of the Graduate School of Ochanomizu University, gave a presentation on significance of "Playful Pedagogy." One of the important methods mentioned in implementing Playful Pedagogy is Guided play. Its features were explained as a method of teaching positioned between the categories of "direct instruction" and "free play" that form early childhood education. Knowing what materials to use is important as teachers try to create an environment that is in line with educational goals while respecting the child's freedom and independence that will spark his or her natural sense of wonder and curiosity. In addition, he introduced the views of American researchers on Guided play, regarded as most effective in developmental growth, as well as findings from studies in developmental psychology and neuroscience that provide us with evidence of the rich role of learning in play. In his speech, Director Sakakihara also proposed greater international recognition for traditional childcare practices in Japan and the benefits of implementing play into children's upbringing and urged parents and teachers who were present in the conference to be more confident in their efforts.

Next, Kiyomi Akita, Professor of the University of Tokyo, and Jiaxiong Zhu, Professor Emeritus of East China Normal University, followed up on Director Sakakihara's presentation and presented their perspectives on the aspirations and aims of early childhood education.

Professor Akita emphasized the importance of incorporating play into early childhood education. She started off by defining the role of the teacher in Guided play as "being aware of the educational elements that are present for the children while the children are in play." Based on that, she spoke of "teachers being required to understand how to deal with each child individually and to decide educational goals so that a variety of support and management are on hand." She also highlighted the significance of creating environments and activities that are engaging for children. She further appealed that "those who support children's play should also value playfulness in themselves."



Professor Zhu also talked about how creating a balance between play and learning is indispensable for a child's healthy development. The importance of Guided play was also emphasized. Using building blocks as an example, Professor Zhu stated that in many cases when we compare a child playing alone with one playing with a teacher, the latter builds better and this in turn helps their sense of accomplishment and awareness. In addition, he urged teachers to constantly think of how, when and what to use in order to strike a balance between giving children independence and guidance in play.

Putting Theory into Practice

During the two days, besides the theories to which we were introduced, we also learned ways to apply them.

On the first day, the last to take the rostrum was Shin-Tsung Chang, Professor of the National Taipei University of Education, and he introduced a new term that he created himself, "edutainment," by merging the two words, "education" and "entertainment." He explained the importance of play space and design in playthings or learning tools in creating learning-intended play and recommended interactive exhibitions in museums that engage touch or "parent-child centers" that encourage play between parents and children. Professor Chang also carried out a mini workshop that showed the participants how to fold a moving origami bird to emphasize that "in play, what is important is that we motivate children's creativity and guide them to be inventive and innovative."



On the second day, we had the honor of hearing from Nobuyuki Ueda, Professor of Doshisha Women's College of Liberal Arts, an advocate of Playful Learning, who defined it not

as "having fun learning" but as creating "a fun environment that is rich with learning opportunities." Using images of several workshops, Professor Ueda showed how to create such environments. He illustrated that children need more excitement in firsthand learning experience. He also explained Playful Learning by providing examples of coordinated activities that call for using our hands to make things, learning through human interaction, and in-depth learning that focuses passion on a specific objective.

Current Issues with the Early Childhood Education in East Asia

On the second day of the symposium "On the Scene From East Asia," three researchers from China, Taiwan and Japan gave us insights into the current early childhood education scene in the respective countries and the concomitant challenges.



According to Nianli Zhou, Assistant Professor of East China Normal University, there is much work to be done regarding the social development of Chinese children today. Professor Zhou further explained, based on data from neuroscience, that such issues will require widely propagating the practices of Guided play while revising the current trend of Direct Instruction in early childhood education.

Kindergartens and day-care centers in Taiwan were unified in January 2012 and are now known as "pre-schools." Leefong Wong, Professor of the National Taipei University of Education, further explained that these centers must meet certain government requirements that ensure the standards of their educational and reading materials, both in quantity and quality. These centers facilitate reading sessions between guardians and their children, friendly discussion groups for teachers and other guardian-oriented activities. On the other hand, Professor Wong added that because teachers also tend to direct children's play in many facilities, organizing activities that develop children's self-initiative and diverse capabilities is a challenging issue.

From Japan, Reiko Irie, Professor of Kyoritsu Women's University, talked about the teachers' mission, which should be to create a childcare environment where children feel they are having fun and want to engage in the same activities again the following day. However, a recent survey of teachers shows that while many young teachers are involved in early childhood education, they feel a significant gap between caregiving values and the actual caregiving. In order to address this issue, Professor Irie pointed out that for current teachers, in-service and on-the-job training at kindergartens, day-care centers or similar facilities should be provided. In addition, students that are currently studying to be teachers should be exposed to more practical training.

Making the Best Out of Guided play

The second day closed with an overall discussion by Professor Chang, Professor Ueda, Professor Zhu, Professor Zhou and Professor Irie. Without delay, the moderator, Director Sakakihara posed the question, "To take full advantage of the benefits of Guided play, what are

some knowledge and skills required of our teachers?" to the panel, and the discussion provided an understanding of the differences between China's and Japan's values on play from different angles. Professor Zhu commented that as it is vital to build and manage an emotionally trusting relationship with each child, we must be equipped, not with formal knowledge, but with wisdom that is highly flexible, which he further emphasized is necessary if we closely respond to the needs and feelings of children. The panel agreed with Professor Zhu's comments and this helped us recognize a sense of universality in the discussed early childhood values.

The Q&A session also gave us the opportunity to discuss the implementation of Guided play with the panel and audience. We especially had an active dialogue regarding Professor Zhou's comments on how to apply "social pretend play"^④ as an educational method to promote social development.

This program ended with great results through the presentations, workshops and symposiums that gave us the opportunity to consider both the theories and practice behind play and learning. During these two days, the presenting researchers caught the attention of the floor with their elaborate analysis and light-hearted humor that sometimes caused laughter from the floor.

The two days passed quickly. Not only did our panel consist of educators from Japan, China and Taiwan but we had medical scholars, developmental psychologists, designers and many others who enriched the event with their comments and helped highlight important issues surrounding the current situation of play and learning in early childhood education.

④ This refers to a make-believe game where teachers use readily available materials like boxes to recreate environments that are easily found or frequently used in public, like hospitals, banks, supermarkets and so forth.



3rd ECEC Research Conference

Child Care that Improves the Quality of Play

Hosting the 3rd ECEC Research Conference

The 3rd ECEC Research Conference sponsored by Child Research Net (CRN) was held in Shinjuku on Saturday, February 15, 2014. Researchers of early childhood education and child care professionals gathered to discuss "Child Care that Improves the Quality of Play" and related subjects.

Session 1 Keynote Address and Panel Discussion

Session 1 began with a keynote speech delivered by Professor Takako Kawabe of the University of the Sacred Heart. The panel discussion that followed included Professor Kawabe, Sakakihara Yoichi, CRN Director and Professor of the Graduate School of Ochanomizu University, Nobuko Kamigaichi, Professor of Jumonji University and Hiroto Omameuda, Associate Professor of Tamagawa University.

Teachers who understand and support each individual child

Professor Kawabe noted that children develop an interest in something when they become absorbed on their own while playing, and emphasized the necessity of such experience for development and the importance of play-centered early childhood education. She stressed that teacher support is also necessary to heighten interest and enjoyment in play, that is, to increase the quality of play. Concrete examples of teacher support underscored the importance of incorporating novelty in play to encourage playful participation.

Based on her own experience as a teacher, Professor Kawabe proposed ways to adapt teacher support to the needs of each child and particular situation, which include helping out children who have difficulty making friends and watching over children as they become absorbed in play with friends. She also raised the issue of "Guided play," pointing out that it has much in common with the support to enhance the quality of play, and offered suggestions.



Keeping a childcare record builds skills that support play

The ensuing panel discussion responded to issues that Professor Kawabe had raised in her keynote address. A range of views were exchanged on such issues as what the teacher should keep in mind when proposing play materials and the importance of the teacher choosing the play in implementing the theory of Guided play.



What methods can help teachers acquire the knowhow to support children's play? This question, which was posed by CRN Director Sakakihara, became a major focus of lively discussion. All the panelists agreed that keeping a childcare record was a key practice for teachers. When keeping this record, Professor Kawabe urged teachers to adopt a viewpoint that considered the relationship with the children rather than merely listing what happened during the day, namely, writing down goals for the day, comparisons with what was actually accomplished, and the children's reactions. Professor Omameuda proposed creating an episodic record that would report what the teacher felt and discovered in interactions with the children and a record that would document the group play of children from a comprehensive perspective. Professor Kamigaichi suggested that each kindergarten and day-care center should draw up methods for assessment and record-keeping in line with the curriculum and principles of childcare that are set forth in the Course of study for Kindergarten and the National Guidelines for Care and Education at Day Nursery.

Session 2 Workshop

In the Session 2 Workshop, eight childcare professionals spoke frankly on the topic "Impediments to Realizing Playful Learning in Child Care" in a discussion that went beyond the usual frameworks of public and private facilities and differences between kindergartens, day-care centers, and Early Childhood Education and Care centers (*nintei kodomo en*). Discussion was first held in two separate groups: the kindergarten group and the day-care group with Professor Omameuda and Mihoko Hashimura, editor of Benesse newsletter, "Thinking about the Future of Infant Education", serving as respective facilitators. This was then followed by an overall discussion with the combined groups.

Young teachers, in both kindergarten and day-care centers, need more experience in play

Both the kindergarten group and day-care group noted that young teachers showed some difficulty regarding play. In fact, all childcare facilities, regardless of type, reported an increase in teachers who seem not to have played much as children and to lack experience in play. Although they have read childcare materials and studied the subject, they do not know the aims of childcare, such as knowing what children should derive from play, because they have not experienced it themselves. One proposed solution to impart the fun and joy of play called for both experienced teachers and their younger counterparts to learn about play together.



At the same time, the discussions also highlighted large differences between kindergarten and day-care centers in terms of time and space. Staff of day-care centers commented that it was difficult to find the time to discuss matters pertaining to the children and play because even when their own work was over, the facility was still open. They also noted that engaging in sustained play was also difficult because play and living spaces are not separate, which means that activities, such as playing with blocks, etc., have to be interrupted to clear the space for mealtime. In contrast, the kindergarten group expressed no such views. Given that the current situation cannot be easily resolved, this will require further discussion from the perspective of government policy as well.

Session 3 Free Discussion

Session 3 featured free discussion that included all the panelists and childcare professionals of the previous sessions, Mariko Ichimi, Senior Researcher, National Institute for Educational Policy Research, Yoriko Isobe, Advisor of Benesse Educational Research and Development Institute (BERD), and Director Sakakihara serving as the moderator. Bringing up issues that were raised in Sessions 1 and 2, the discussion addressed specific measures to improve play-centered childcare and extend its social significance.

What can directors do to enhance playful learning?

How to develop childcare professionals who will stimulate rich learning experiences? The free discussion started off with a discussion of this question which was raised in the workshop. One participant (senior teacher, private kindergarten, Edogawa Ward, Tokyo) stressed the importance of team childcare as a way for teachers to learn from one another, a view that drew wide

support. Another participant (director, public day-care center, Kita Ward, Tokyo) proposed pairing experienced and young teachers to promote information exchange and thereby reinforce team childcare.

What should directors of childcare facilities do to enhance playful learning? Participants expressed a number of views that included creating an atmosphere of free expression and mutual support for teachers (director, public kindergarten, Taito Ward, Tokyo); ensuring an environment in which teachers can always interact with the children with a smile (director, private day-care center, Yamagata Prefecture); and creating a facility with a well-defined mission that respects the individuality of each teacher (Professor Omameuda).

The discussion extended to information targeting parents and the community. Ideas included regularly posting photographs and comments on the homepage to better inform parents of the facility's childcare policies and stance (director, public day-care center, Taito Ward, Tokyo) and cases in which the directors networked with local organizations to promote further understanding.

Conclusion

The program brought together researchers of early childhood education and childcare professionals who care for and interact with children on a daily basis and provided an opportunity to discuss and exchange views on children's play. In addition to bringing up a variety of issues, solutions were proposed that promise to more fully incorporate play into learning, and the discussions yielded fruitful suggestions for the role of play in childcare. The ECEC Research Conference will continue its research on learning and childcare in FY2014. We look forward to further research contributions and stimulating discussion in the future.

Presenter Profiles (in Alphabetical order)



Akita Kiyomi (1st and 2nd Conference)

Ph.D., Education. Professor, Graduate School of Education, The University of Tokyo. Specializes in child care and education, educational psychology, and lesson study. Currently, serves as President of the Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education and the Japan Reading Association; Vice president of the World Association of Lesson Studies. Awards include the Kido Award, Japanese Association of Education Psychology; Science and Research Reading Award, Japan Reading Association; and Developmental Education and Research Award, Center of Developmental Education and Research. Recent publications include *Raising Children with Picture Books* (Iwasaki Publishing); *Real Life as It Is* (Froebel-Kan), *Day Care that Fosters Wisdom*, *The Attitudes to Day Care*, and *The Meaning of Childcare* (Hikari no Kuni), *The Psychology of Learning* (Sayusha), *The Psychology of Child Care* (Zenkoku Shakai Fukushi Kyogi-kai), *Collaboration Between Day-care centers, Kindergartens and Elementary schools: The Challenge of Building a Caring community Together* (co-authored and edited, Gyosei).



Chang Shin-Tsung (2nd Conference)

M.Arch., Pratt Institute, M.A., Columbia University, Ed.D., Columbia University. Professor and Chair, Department of Art Education and Department of Plastic Design, National Taipei University of Education. Director, School of Toys & Games Design. Director, Center for Visual Arts Education, National Taipei University of Education. International Advisor for Practice Performing Arts School, Singapore.

Development and design of hardware, software, and firmware for educational environments such as kindergartens, children's museums, etc., in addition to systems design and research in Creative Design education.

Major publications include papers on edu-tainment and "the arts of amusement" as well as toys, play, amusement, traditional Taiwanese toys and games to develop intelligence, traditional scientific technology and idea edu-tainment, etc., and a series of manipulative educational materials for learners that develop intellectual skills.



Goto Noriko (1st Conference)

Research Manager, Child Sciences and Parenting Research Office, Benesse Educational Research and Development Institute (BERD).



Ichimi Mariko (1st and 3rd Conference)

Senior Researcher, Department of International Research and Co-operation, National Institute for Educational Policy Research of Japan. Specialized in Chinese language, comparative education, and history of education at university and graduate school. Interests include views of children, early childhood education, and the study of children. After studying in Beijing for one year and a half, has researched and surveyed the history of educational exchange between Japan and China, education policy and reform in Asia, child-raising support and early education in Asia in her current capacity.



Irie Reiko (2nd Conference)

M.A., Home Economics, Child Study, Graduate School of Home Economics, Ochanomizu University. Professor, Kyoritsu Women's University. Member of the Standing Board, the Japanese Committee of Organisation Mondiale pour l'Éducation Préscolaire (OMEP).

Specializes in early childhood education and child care.

After working as a kindergarten teacher and child care practitioner for the class for children with special needs (currently, preschool of Aiiku Yogo School), stayed home and raised three children. Taught courses in professional child care and kindergarten training at university.

Currently, professor of Department of Child Care, Faculty of Home Economics, Kyoritsu Women's University.

Publications include *The Child Science of Keeping a Child Raising Diary* (co-authored, Keishoshobo), *Parents' Stories* (co-edited, Minerva Shobo), *Infant Care and Education* (co-authored, Aikawa Shobo), *Child Care Today* (co-edited, Houbunshorin), *Child Care Content: Human Relations* (co-authored, Houbunshorin).



Kamigaichi Nobuko (3rd Conference)

M.A., Home Economics, Child Study, Graduate School of Home Economics, Ochanomizu University. Professor, Department of Early Childhood Care and Education, Faculty of Human Life, Jumonji University. Worked as a counselor in child health division, National Children's Castle and an assistant professor in Ochanomizu University before assuming current post.

Specializes in early childhood education, clinical study of development. Main research themes are ECEC, preschool teacher training. Concurrently serves as Secretary General, The Japanese Committee of Organisation Mondiale pour l'Éducation Préscolaire (OMEP), and member of the Board, Children's Future Foundation. Publications include *What is Unstructured Child*

Care?: Child Care for the Heart and Mind (Froebel-Kan Co., Ltd).



Kawabe Takako (3rd Conference)

Ph.D., Education, Professor, Department of Education, University of the Sacred Heart, Tokyo.

Worked as a kindergarten teacher at a public kindergarten in Tokyo for 12 years, and teacher's consultant in preschool education research division, Tokyo Metropolitan Institute for Educational Research and In-Service Training (current Tokyo Metropolitan School Personnel in Service Training Center) before assuming current job. Main research themes are methodology for child care practice recording and theory of assisting child's play. Served as member of the Board, Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education, and collaborator in *Case Studies in Fostering the Emergence of Morality in Kindergarten* by MEXT, Japan.

Publications include *The Roles and Functions of Recording Child Care Practice: A suggestion for "Activity Map Recording" to improve daily planning* (Seikokai Publishing).



Kobayashi Noboru (2nd Conference)

M.D., Ph.D., Professor Emeritus of the University of Tokyo; President Emeritus of the National Children's Hospital; Honorary Director of Child Research Net (CRN); Honorary President of the Japanese Society of Child Science; Honorary Director of the Japanese Society of Baby Science; Honorary President of the Japanese Society for Breastfeeding Research; Honorary President of the Japanese Society for Prevention of Child Abuse and Neglect.

Graduated from the Graduate School of Medicine, University of Tokyo in 1954. Studied in the United States and England. Served as Professor, University of Tokyo; President, National Children's Hospital; and Chair, International Pediatric Association. Awards include the Japan Medical Association Award for Outstanding Distinguished Service (November 1984), the 56th Mainichi Shuppan Culture Prize (October 1985), International Pediatric Association Award (July 1986), Second Class Order of the Sacred Treasure (Autumn 2001), and the Takemi Prize (December 2003). Books outside his area of specialization, pediatric medicine, include *Human Science* (Nakayama Shobo), *Children are Our Future* (Medi-Science Inc.), *Reciprocal Development Through Childraising* (Futohsha).



Omameuda Hirotomo (1st and 3rd Conference)

M.A., Education, Graduate School of Aoyama Gakuin University. Associate Professor, Department of Education, Tamagawa University. Worked as a teacher in Aoyama Gakuin Kindergarten before assuming current post. Specializes in early childhood education and care, parenting support. Concurrently serves as member of the Board, Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education, and member of the Board, NPO bi-no bi-no. Publications include *Parenting Support through Mutual Support and Development: A practical theory of parenting support in day-care centers, kindergartens, and childcare support facilities* (Kanto Gakuin University Publishing), *To See Children As Humans* (co-authored, Minerva Shobo).



Sakakihara Yoichi (1st, 2nd and 3rd Conference)

M.D., Ph.D., Professor, Graduate School of Humanities and Sciences, Ochanomizu University; Director of Child Research Net (CRN); President of the Japanese Society of Child Science. Specializes in pediatric neurology, developmental neurology, in particular, treatment of Attention Deficit Hyperactivity Disorder (ADHD), Asperger's syndrome and other developmental disorders, and neuroscience. Interests include mountain-climbing, listening to music. Father of two sons and a daughter.

Born in Tokyo in 1951. Graduated from Graduate School of Medicine, University of Tokyo in 1976, and taught as an instructor in the Department of Pediatrics before becoming professor in the Research Center for Child and Adolescent Development and Education, Ochanomizu University.

Major publications include *The Monkey Who Wears Diapers* (Kodansha), *Children Who Can't Concentrate* (Shogakukan), *Hyperactive Children* (Kodansha + a Shinsho), *Asperger's Syndrome and Learning Disorders* (Kodansha + a Shinsho), *The Medical Science of ADHD* (Gakken), *The Critical and Sensitive Periods of the Child's Brain Development* (Kodansha + a Shinsho).



Ueda Nobuyuki (2nd Conference)

M.A., Ed.M., Ed.D., Professor, Doshisha Women's College of Liberal Arts, Faculty of Contemporary Social Studies, Department of Childhood Studies. Director, neomuseum. Born in Nara, 1950. Graduated from Doshisha University; Central Michigan University, M.A. ; Harvard Graduate School of Education, Ed.M., Ed.D.

Specializes in educational technology and learning art. Has created many innovative and original sites for learning environment design and media education. Visiting Researcher, Harvard Graduate School of Education, 1996-1997. Visiting Professor, Media Laboratory, MIT, 2010-2011.

Publications include *Playful Thinking: Ways of Thinking to Make Work Fun* (Senden Kaigi), *Playful Learning: The Source of Workshops and the Future of Learning* (co-authored, Sanseido); *Workshop in Cooperation and Expression: Environmental Design for Learning* (co-authored, Toshindo). <http://www.neomuseum.org>



Wong Leefong (2nd Conference)

Ph.D., Faculty of Education, The University of Tokyo. Professor, Department of Early Childhood and Family Education, National Taipei University of Education. Currently, overseeing research on the licensing system of ECEC educare giver in Taiwan. She has been training preschool teachers in Taipei and also traveling around Taiwan and to the outlying islands once a month to evaluate kindergartens and educational programs. Observing the field of early childhood education from the perspectives of a parent, educator, and administrator, her research considers early childhood education and care that is relevant in the global era.

Major publications include *Issues and Trends in Child Care Support* (co-authored, Gyosei), *Reform in Global Early Childhood Education and Care and Scholastic Aptitude* (co-authored, Akashi Shoten), and *Preschool Education in Asia and Children Living in a Multicultural Age* (Akashi Shoten).



Zhou Nianli (2nd Conference)

Ph.D., Psychology, Professor of East China Normal University.

Specializes in child development, the parent-child relationship, evaluation of multiple intelligences and child-rearing planning for children aged 0-3 years, and other areas. Received her Bachelor of Psychology from Ochanomizu University in 1995, Master of Education from University of Tokyo in 1998, and Doctor of Psychology from East China Normal University in 2003. She conducted a survey on emotional development of infants as a visiting research fellow at Arizona State University in the U.S. from June to December 2004, as well as a survey on integrated education as a member of Japan Foundation fellows from May 2006 to March 2007 at Nagoya University in Japan.

Recent publications include *Developmental Psychology of Preschool Children*, *Guidance on Mental Health of Preschool Children*, *Social Cognition of Autistic Spectrum Disorder young children: Theory and Experimental Research*, *Comparative Analysis and Experimental Study on Preschool Children with Special Needs in Early Childhood inclusive Education*, *Evaluation of Multiple Intelligences of Children aged 0-3 years and their Development*.



Zhu Jiaxiong (2nd Conference)

Professor Emeritus, School of Preschool and Special Education, East China Normal University. Member of Research Center for Reform of Basic Education and Developmental Research in East China Normal University, the MOE Project of Key Research Institute of Humanities and Social Sciences; Advisor, Doctoral Course.

Currently, Executive of the Chinese Society of Education; Member, Science Committee; Chair of Committee for Mainland China, Pacific Early Childhood Education and Research Association (PECERA). Serves on the editorial board of four international publications on early childhood education.

Specializes in the theory of early childhood education and kindergarten curricula and has published numerous research papers, translations, and teaching materials. Recipient of many distinguished awards and a special grant of the State Council of the People's Republic of China. Jiaxiong Zhu Early Childhood Education Research: <http://www.zhujx.com>

CRN活動レポート 2013

～ECEC研究と東アジア子ども学交流プログラム報告書～

発行日 2014年3月31日

発行 チャイルド・リサーチ・ネット (CRN)
<http://www.crn.or.jp/> (日)
<http://www.childresearch.net/> (英)
<http://www.crn.net.cn> (中)
〒206-8686
東京都多摩市落合1-34
ベネッセ教育総合研究所内

編集人 榊原洋一

編集スタッフ 劉愛萍
小川淳子
岡田恵
内田幸枝
姜娜
武文

編集協力 (株)ペンダコプロダクション

翻訳 村田久美子 (中→日)
Sarah Allen (日→英)

デザイン 森一典デザイン事務所
富田淳子

チャイルド・リサーチ・ネット (Child Research Net) は、(株)ベネッセコーポレーションの支援のもとに運営されている国際的、学際的なインターネット上の「子ども学」研究所です。



**CHILD
RESEARCH
NET**

日本語版 <http://www.crn.or.jp>

中国語版 <http://www.crn.net.cn>

英語版 <http://www.childresearch.net>

チャイルド・リサーチ・ネットはベネッセコーポレーションの支援のもと
運営されています。